



ヘルメスの翼に

— 小樽商科大学 F D 活動報告書 —

第 9 集

目 次

はじめに

— 学 部 編 —

第 1 章 F D 活動報告 (学部教育開発部門)

第 2 章 平成 23 年度「インターンシップの教育効果検証」について

第 3 章 平成 22 年度「総合科目Ⅱa」と「ルーキーズキャンプ」アンケート分析
結果

— 大学院商学研究科 (アントレプレナーシップ専攻) 編 —

第 4 章 F D 活動報告 (専門職大学院教育開発部門)

第 5 章 平成 22 年度「授業評価アンケート」集計結果と分析

— 大学院商学研究科 (現代商学専攻) 編 —

第 6 章 F D 活動報告 (大学院教育開発部門)

小樽商科大学教育開発センター

(2011 年度)

まえがき

本報告書「ヘルメスの翼に―小樽商科大学FD活動報告書―第9集」は、平成22年度（一部平成23年度）における教育開発センターのFD活動をまとめたものです。

本学におけるFD活動は、平成12年度より教育課程改善委員会のもとに設置されたFD専門部会を実施主体として活動を続けてきました。その後、本学におけるFD活動を組織的に展開するために、教育課程改善委員会を発展的に解消しその機能を継承する教育開発センターが平成16年4月に設置されました。

平成19年度に教育開発センターの組織が改編され、FD活動は、学部におけるFD活動を「学部教育開発部門」が、大学院現代商学専攻におけるFD活動を「大学院教育開発部門」が、また、ビジネススクール（専門職大学院）である大学院アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動は「専門職大学院教育開発部門」が実施主体となり展開されています。

FD活動を通じてより質の高い教育を実現するために、本学教職員、学生、関係者の忌憚のないご意見を教育開発センターにいただければ幸いです。

本報告書の表題「ヘルメスの翼に」は、本学の学章（シンボルマーク）「ヘルメスの翼に一星」がら取ったものです。本学ホームページによると、学章について次のように説明されています。

この学章「ヘルメスの翼に一星」は、商業神ヘルメスの翼の上にある一星が、北の大地から英知の光を放つ様子をあらわしたものです。下のリボンには、1910年の創立とOtaru University of Commerceの頭文字が示されています。

ヘルメス(Hermes)は、ギリシャ神話の神の一人で伝令の神、また商業、学術などの神とされています。ローマではマーキュリー(Mercury)と呼ばれています。ヘルメスは2匹の蛇がからみついた翼の杖をもち、伝令の神として世界を飛翔しています。一星は、本学の前身である小樽高等商業学校以来、本学のシンボルとして用いられてきました。「北に一星あり。小なれどその輝光強し。」と謳われた本学の伝統を象徴しています。

FD活動を通じてより質の高い教育が実現でき、それによってヘルメスの翼に輝く一星がより強く光り輝くことを願って、本報告書の表題を「ヘルメスの翼に」としました。

本報告書は「学部教育開発部門」、「キャリア教育開発部門」、「大学院教育開発部門」及び「専門職大学院教育開発部門」が中心となって作成したもので、作成するにあたってご協力をいただいた本学学務課をはじめとする関係教職員 みなさんに謝意を表します。

平成24年3月

学部教育開発部門（平成 22 年度）

- 部門長 角野 浩（経済学科）
- 委員 大矢繁夫（教育開発センター長、教育担当副学長）
- 委員 高野寿子（学部教務委員会委員長）
- 委員 中浜 隆（商学科）
- 委員 片桐由喜（企業法学科）
- 委員 小笠原春彦（社会情報学科）
- 委員 石崎香理（一般教育等）
- 委員 鈴木将史（言語センター）
- 委員 辻 義人（教育開発センター）

専門職大学院教育開発部門（平成 22 年度）

- 部門長 篠本智之（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 近藤公彦（アントレプレナーシップ専攻長）
- 委員 出川 淳（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 保田隆明（アントレプレナーシップ専攻）
- 委員 堺 昌彦（アントレプレナーシップ専攻）

大学院教育開発部門（平成 22 年度）

- 部門長 穴沢 眞（国際商学コース）
- 委員 小田福男（現代商学専攻長）
- 委員 中川喜直（大学院教務委員長・コース共通科目）
- 委員 横田宏治（経済学コース）
- 委員 佐古田彰（企業法学コース）
- 委員 行方常幸（社会情報コース）
- 委員 マーク・ホルスト（言語センター）
- 委員 辻 義人（教育開発センター）

キャリア教育開発部門（平成 23 年度）

- 部門長 杉山 成
- 委員 **【センター長が指名した者】**江頭 進、小田福男、林 誠司、大津 晶、沼澤政信、岡部善平、辻 義人
- 【部局長等】**和田良介（学部教務委員会委員長）、栗原 智（キャリア支援課長）、吉原春之（学務課長）、内藤真一（入試課長）

はじめに

教育開発センター長 大矢 繁 夫

小樽商科大学のFD活動報告書「ヘルメスの翼に」第9集（平成22年度版）をお届けします。

本学のFD部門は、平成19年度に大学院現代商学専攻FD部門を独立させ、現在、学部、専門職大学院アントレプレナーシップ専攻、大学院現代商学専攻の3つの部門から構成されています。今回の報告書も、前回同様にこの3つの部門における分析・報告から成り立っています。

全国的にFD活動は年々進化を遂げ、焦点も、当初見られた授業アンケート及び授業改善の方法を探るといったものから、キャリア教育や初年次教育の意義を考えるなど、学生の主体的学びをいかに促すかを問題とする方向に変化してきたように思えます。

このような現在のFD活動の状況を念頭に置き、今回の報告書は、第2章で「インターンシップの教育効果検証」を、第3章で「総合科目Ⅱaとルーキーズキャンプのアンケート分析」を取り上げました。これらは、学部のキャリア教育と初年次教育に対する分析・考察の一環をなしています。

なお、従来からの「授業改善のためのアンケート分析」は、諸般の事情により本報告書とは別途に別冊として発行することとしました。

本報告書第4章と第5章は、前号と同様に、専門職大学院アントレプレナーシップ専攻におけるFD活動の報告と「授業評価アンケート」の集計結果及び分析を載せています。

第6章は、大学院現代商学専攻における、大学院学生ならびに科目担当教員に対する学習・研究活動や指導をめぐってのアンケートの結果を取り上げています。

本学の教育が、社会の要請に応えるべくますますその質を高めていけるように、本報告書が活用されることを願っています。

目 次

まえがき

はじめに.....教育開発センター長 大 矢 繁 夫

一学 部 編一

第1章 FD活動報告

- 1. 1 学部教育開発部門の活動状況.....
- 1. 1. 1 学部教育開発部門の活動.....
- 1. 1. 2 研修会等の実施.....
 - (1)新任教員研修会の実施.....
 - (2)FDワークショップの実施.....
- 1. 1. 3 平成22年度「授業改善のためのアンケート」の実施.....
- 1. 1. 4 FD活動報告書「ヘルメスの翼に」第8集の発行.....
- 1. 1. 5 学科単位での授業改善の取組.....
- 1. 1. 6 FDコラム.....

第2章 平成23年度「インターンシップの教育効果検証」について

キャリア教育開発部門長 教授 杉山 成

- 2. 1 調査の目的.....
- 2. 2 調査の概要.....
- 2. 3 結果と考察.....
- 2. 4 結論.....

第3章 平成22年度「総合科目Ⅱa」と「ルーキーズキャンプ」アンケート分析結果

教育開発センター助教 辻 義人

- 3. 1 調査の目的.....
- 3. 2 アンケート分析結果.....
 - 3. 2. 1 総合科目Ⅱaの前後間での比較.....
 - 3. 2. 2 ルーキーズキャンプ参加の効果の分析.....
 - 3. 2. 3 性別と調査時期との関連について.....
- 3. 3 総合考察.....
 - 3. 3. 1 社会性への注目.....
 - 3. 3. 2 悩みの個数への注目.....

3. 3. 3	その他の尺度について
3. 3. 4	本分析の問題について
3. 4	本報告の結論
3. 5	ルーキーズキャンプ 2010 自由記述アンケート結果

－ 大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻 －

第4章 FD活動報告

4. 1	専門職大学院教育開発部門の活動状況
4. 1. 1	専門職大学院教育開発部門の活動
4. 1. 2	研修会の開催状況
4. 1. 3	授業評価等の実施状況
	(1) 平成 22 年度「授業評価アンケート」の実施
	(2) 教員相互の授業参観の実施
	(3) 教員による自己評価の実施
4. 1. 4	FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」第8集への掲載

第5章 平成 22 年度「授業評価アンケート」集計結果と分析

専門職大学院教育開発部門委員 准教授 保田 隆明

5. 1	質問項目
5. 2	アンケートの集計結果
5. 3	アンケートの分析
5. 3. 1	「教員の教授法について」の分析
5. 4	成績評価
5. 4. 1	履修者数と単位取得者数
5. 4. 2	取得単位数とGPA
5. 5	自己評価

第6章 FD活動報告

6.1	大学院教育開発部門の活動状況
6.1.1	大学院教育開発部門の活動
6.1.2	「大学院FDアンケート」集計結果について

第1章 FD 活動報告
(学部教育開発部門)

第1章 FD 活動報告

1. 1 学部教育開発部門の活動状況

1. 1. 1 学部教育開発部門の活動

平成 22 年度の学部教育開発部門会議は 8 回開催された。主な審議内容は以下のようである。

- (1) FDに関する研究 テーマ：「本学卒業生の教育成果について」
- (2) FD活動報告書 「ヘルメスの翼に（第8集）」の発行
- (3) 新任教員研修の一環としての「教員相互の授業参観」の実施
- (4) FDコラムの学報への掲載
- (5) FDワークショップの実施 「本学卒業生は企業にどのように評価されているのか？ ―本学教育課程に対する卒業生と企業の評価― 」
- (6) 学科単位での授業改善の取組について
- (7) 平成 22 年度「授業改善のためのアンケート」の実施について
- (8) 教育成果の保証に係る e ポートフォリオの構築等について

1. 1. 2 研修会等の実施

(1) 新任教員研修会の実施

- ・平成 22 年度に実施した新任教員研修会の内容は次のとおりである。

日時 平成 22 年 4 月 2 日（金）10 時 00 分～12 時 00 分

場所 4 号館 2 5 1 講義室・2 号館情報処理センター

参加者 新任教員 8 名

- ・研修内容

講演 1) 山本学長

「小樽商科大学の現状と課題」

講演 2) 大矢教育担当副学長

「小樽商科大学の教育課程について」

「本学学部カリキュラムについて」

「本学のFD活動について」

E-learning 説明会（説明者 教育開発センター 辻助教）

(2) FDワークショップの実施

学部教育開発部門は、平成 22 年 12 月 8 日に、本学教職員を対象に「本学卒業生は企業

にどのように評価されているのか？ -本学教育課程に対する卒業生と企業の評価-」（報告者：教育開発センター 辻 義人助教）をテーマにFDワークショップを開催した。

1. 1. 3 平成 22 年度「授業改善のためのアンケート」の実施

平成 22 年度の「授業改善のためのアンケート」は、平成 19 年度にアンケート項目の見直しと改訂をおこなったスリム化したアンケートによって、456 科目を対象に実施された。

平成 22 年度「授業改善のためのアンケート」集計結果と分析は第 2 章に掲載している。

1. 1. 4 FD活動報告書「ヘルメスの翼に」第8集の発行

FD活動報告書「ヘルメスの翼に」第8集は、FD専門部会が平成 21 年度に活動した内容をまとめたもので、平成 23 年 3 月に出版され、本学関係部署、教員、学生に配付している。

1. 1. 5 学科単位での授業改善の取組

平成 18 年度より、授業改善への取組みは主として学科単位で推進され、各学科の意向に沿った形で、趣向を凝らした授業改善の取組が展開されている。学部教育開発部門では、年度当初に取組計画書を、年度末に報告書を提出してもらい、集約のうえ報告内容を公表し、次年度の計画に役立ててもらっている。

以下に、平成 22 年度の各学科等の授業改善の報告内容を掲載する。

【経済学科】

経済学科は、これまで積極的に授業改善につながる取り組みを進めてきたが、今年度も同様に以下の様な授業改善の取り組みを行った。

1. 基幹科目一年次配当の「経済学入門Ⅰ」「経済学入門Ⅱ」に関する検討会を、今年度の講義終了後に実施した。

出席者 平成22年度経済学入門Ⅰ担当 中村健一准教授

平成22年度経済学入門Ⅱ担当 横田宏治

平成23年度経済学入門Ⅰ担当予定者 佐野博之准教授

平成23年度経済学入門Ⅱ担当予定者 渋谷浩教授

経済学科学部教育開発部門委員 角野浩教授

また経済学入門Ⅱ教科書選定についての議論を担当予定者を通じておこなった。

2. 定期試験の過去の問題の公表を行った

- ・経済学科として公表の場を設けることを平成16年度第10回学科会議で決定しているが、この合意に基づき、定期試験過去問題の公表が行われ、学生が閲覧可能となっている。

3. 授業改善の取り組みの対外発信

- ・平成21年度授業改善のためのアンケート結果の客観評価部分を、例年通り学園便りに掲載した。

【商学科】

1. 新人教育研修の一環としての授業参観および懇談会

以下の授業参観を行い、そのあとに懇談会（意見交換）を行った。

日 時： 7月12日（月）19時25分～20時55分（7限目）

場 所： メディアホール2階

授業科目：経営学原理

担当教員：小田福男 先生

2. 学部カリキュラムにかかわる意見交換会

将来構想委員会ワーキンググループが今年度に学部カリキュラムについてのプランをまとめて各学科に検討依頼を行った場合には、その内容をふまえながら、中期的な視点から商学科の学部カリキュラムのあり方について検討する意見交換会を開催する予定であった。しかし、将来構想委員会ワーキンググループから各学科に検討依頼がなかったために、意見交換会は開催しなかった。

【企業法学科】

1. 不可率4割目標について

別記の通り

2. 学科教員による意見交換会

下記項目につき8名の教員において意見交換会を平成22年7月8日に実施した。自由な議論の中で、様々な提案がなされた。今後の検討課題としたい。

1) 学科の科目編成について

今後の科目設定・編成について自由な議論をしながら、下記のような意見が出された。

刑法1(総論)にくわえて、刑法2(各論+訴訟法)の開講

保険法・海商法の創設

商法総則2単位化への変更

2) 授業改善に向けて

授業改善を目的として行なわれている新人教員が他の教員の授業参観についてである。これは大変有意義であるとの意見があった。授業の進め方や、パワーポイントの使い方、参加型授業などを見学することで、自身の講義の参考となったとのことである。

3) ゼミ・卒論のあり方について

ゼミの時間を火曜日と木曜日の4～5講目に固定せず、月曜日から金曜日の毎日、5講目に設定することは、どうかという意見が出た。

こうすることにより、火曜日と木曜日の3～4講目という、いわゆる「ゴールデンタイム」に講義日の選択肢が増え、学生の出席率が上がることがきたいできる。ゼミは必修なので、出席率の低い5講目に配置することは問題ない。

こうすると、夜間主コースの授業とぶつかる教員が出る恐れがあるとの心配がある。これに対しては、ゼミと同授業が重ならないよう時間割を設定するなどの工夫をすれば、解決が可能である。

また、卒論については、昼間コースも夜間主コース同様、選択制してはどうかとの意見があった。

4) 夜間主にたいする講義のあり方について

50人を1学科所属とし、提供する授業の集約化を図る。

現在、定員50人を4学科所属とするため、一つ一つの講義の履修者数が少なく、端的に言えば、効率が悪い。しかも、学生達は学科所属に関係なく、専門科目・ゼミを選択をしている。

社会人教育としての理念を考慮すれば、体系的、総合的、あるいは基礎的な講義を提供することが望ましい。これを実施するためには学科の枠を超えたカリキュラムを編成することが必要である。

(別記)企業法学科 不可率一覽 2010 年度

教員名	科目名	履修者 数	試験受験 者数	不可率
A	行政法Ⅰ 昼		88	27.2%
	行政法Ⅰ 夜		10	20.0%
B	行政法Ⅱ 昼			34.8%
	租税法 昼			13.0%
C	憲法Ⅱ 昼		136	27.9%
	憲法Ⅱ 昼 夜		8	0.0%
D	社会保障法 昼		90	26.0%
E	民事手続法 昼	13	8	50.0%
	倒産法 昼	9	4	0.0%
F	商法Ⅲ 昼	123	117	14.5%
	法学 夜	31	25	0.0%
G	刑法Ⅰ 昼	143	133	12.0%
	刑法 夜	31	26	23.1%
H	国際経済法 昼	67	58	15.5%
I	知的財産法 昼	99	82	19.5%
J	法学 昼	278	250	16.0%
	国際法 昼	70	65	7.7%
	国際機構論 昼	73	62	11.3%
K	民法・基礎Ⅰ	136	92	12.0%
	民法Ⅱ 昼	94	73	11.0%
	民法Ⅱ 夜	17	7	14.0%
L	民法・基礎Ⅱ		146	31.0%
	民法Ⅲ 昼		47	22.0%
	民法Ⅰ 夜		11	37.0%
M	商法Ⅰ 昼	122	110	10.9%
	商法Ⅰ 夜	69	55	23.6%
N	憲法・基礎Ⅰ			
	憲法・基礎Ⅱ			

(2) 自由意見記入

「良かった点、要改善点、特筆すべき事項を記入してください」

記入結果

・授業中にたえず質問することで、学生の緊張感が高まり学習意欲の向上につながったことが良かった。

・昨年度は良と可しかいなかったものの、今年度は優をつけることが出来たのは、喜ばしいといえるだろう。また、質問が尽きた時点で、時間中でも講義を終了するというスタイルは、それで構わないと思う。自己責任を植え付けるという意味でも。

・授業改善は個人単位で個人が行うべきものである。

・講義の最後に出席確認を兼ねたレスポンスシート（コメントなしの大福帳）を渡し、授業中に疑問に感じた点などを講義受講生に記載させ、回収した。次回の授業の冒頭で、レスポンスシートに記載された質問に回答し、学生との双方向性や講義の理解度を深める工夫を行った。最終回のレスポンスシートに受講生が記入したコメントでは、このレスポンス方式がとても好評であった。

【一般教育等】

昨年度のように「授業改善のための検討会議」を学科会議と別立てで設けることはできなかったが、学科会議の中で特に「自然科学の教育体制」について長時間の議論が行われた。その結果、八木教授による「北海道総合研究機構との連携・協力に関する協定」の提案となった。

【言語センター】

平成22年度「学科単位での授業改善の取り組み」について、言語センターでは以下のような取り組みをいたしましたのでご報告いたします。

1. 平成21年度成績分布表についての検討。

第4回センター会議（7月14日）において、言語センター教員（非常勤講師含む）担当の授業についての成績分布が検討され、秀・優併せて50%以上の授業（少人数授業除く）が若干数あったので、担当教員に注意を喚起した。不可が甚だしく多い授業（40%以上）は存在しなかった。

2. 英語以外の語学における Semester 制の導入に関する検討。

英語以外の語学教員が会合し（6月9日）、Semester 制導入のメリット・デメリットについて検討した。その際、初修外国語の特徴である「積み上げ方式」が、本学では Semester 制導入により担保されなくなる懸念が出された。如何にして「積み上げ方式」を一定限度守り、Semester 制に移行できるかその方策を探ることが、今後の検討課題となる。

3. 小樽商科大学教職研究会への参加。

1 2 月 1 1 日に第 2 3 回小樽商科大学教職研究会に言語センターより教員数名が参加し、中学・高校での英語等教授法について研究会会員（商大OB）と活発に議論した。

4. Self-Study-e-Learning プロジェクトの継続的研究。

特別経費により推進されている e-Learning プロジェクトは今年度助教、事務補佐員各 1 名を採用し、更に集中的な研究が進められている。また、研究成果の実践である英語 I D における e-Learning 授業は着実な成果を上げている。（過去 3 年の履修者 TOEIC 平均点：H20=485.2 / H21=498.9 / H22=522.1）

1. 1. 6 FDコラム

平成 13 年度から FD 広報として学報及び教育開発センターのホームページに「FD コラム」を掲載している。平成 22 年度に掲載した FD コラムは以下の通りである。

英語 e-Learning 授業について（1） 「させっぱなし」にしないために —学報第 376 号（H22. 8）掲載—

言語センター客員研究員 横村（鶴木）栄美

はじめに

平成 20 年度より、英語科目に、1 年生対象の e-Learning 科目『英語 ID（半期 1 単位：前期、後期各 4 クラスと、再履修クラス 1 クラス）』が開設されました。平成 21 年度には、2 年生対象の e-Learning 科目として、『英語 IIA2/IIB（半期 1 単位：前期、後期各 4 クラス）』（平成 22 年度より『英語 IIA2/IIB2』）が開設されました。この e-Learning 科目は、卒業後の就職や進学を考慮し、全学的に TOEIC を導入する必要性を考え、学生に、統一した学習機会を与えることを目的としたクラスとなっています。

以来、担当者として、学習の指導をしてきました。どちらの授業も、パソコンを使って学習を進めるため、「させっぱなし」にならないよう、また、「飽き」がこないよう、学生の様子を見つつ、進めています。

これまで担当してきて、自分なりに工夫してきたと思う点を挙げてみます。

1. オリエンテーションでの説明

1 回のオリエンテーション時間を長くし、授業の流れ、成績評価、使用する学習ソフト等を、

スライドやパソコン画面を実際に見せながら、詳しく説明しました。情報処理センターの第一実習室で授業を行っていますが、この教室は、授業がないときは自由開放されており、その延長気分で授業を受ける学生がいます。授業中にもかかわらず、趣味のホームページや動画を見る学生がおり、頭が痛いところです。このような状況も踏まえ、今年度は、進めるべき学習の目安とともに、「一発不可」の条件をいくつか挙げました。配布資料にこれらの条件も記載し、オリエンテーションの欠席者にも、後日、資料を配布しました。

2. ホームページ・掲示による連絡

授業のホームページ (<http://www.otaru-uc.ac.jp/~emiemi/>) を作成し、主に、①学習ソフトのショートカット、②授業に関する連絡事項、③小テストの結果、④学習の進捗状況、の4点を掲載しています。①については、商大君のアイコンにリンクを貼り、それをクリックすれば、学習ソフトのログイン画面に入れるようにしてあります。そうすることで、毎回、URL を入力する必要がありません。②は、遅刻や欠席の学生にも連絡漏れがないよう、授業で連絡している内容と同じ事項を載せています。更新しても、過去の連絡事項はすべて残し、確認できるようにしてあります。また、オリエンテーションで説明した、小テストの日程や成績評価についても、掲載しています。③については、『英語 ID』は半期に2回、『英語 IIA2/IIB2』は半期に3回、小テストをしているので、その結果を掲載しています。平均点、最高点、最低点を確認することで、学生個人個人の次の学習の目安となっていると思います。④については『英語 IIA2/IIB2』のみですが、学習の目安としている、「習熟証明番号7つ取得(※1)」に向けて、毎週の取得状況を掲載しています。これにより、自分と同じ進捗状況の学生を知ることができ、学習の進め方の目安にすることができます。

※1 『英語 IIA2/IIB2』で使用している Newton の学習ソフトには、50 のサブコースがあり、そのうち、7つ以上を終えることを指示しています。ひとつのコースをすべて学習し終わると、「習熟証明番号」という番号が発行されます。

3. パワーポイントの使用

毎回、授業の始めに、授業のホームページを確認するように指示していますが、同様の連絡事項を、パワーポイントのスライドで表示しています。また、授業中は、学習の進め方をスライドで提示しています。終了後は後片付けや小テストの予告等の注意事項を提示しています。毎回、同じデザイン、同じ内容のスライドを使っていますが、時々、連絡事項や進め方を少し書き換えています。

4. 小テスト

『英語 ID』は半期に2回、ペーパーによるテストを課し、『英語 IIA2/IIB2』では月に1回、

学習ソフトに付属しているテストを課しています。毎回、ただ学習ソフトを進めるだけでは、飽きてしまったり、実力を測ることができないので、定期的にテストをすることで、授業に変化をつけています。『英語 ID』では、定期試験の代わりに TOEIC IP Test を課しています。ペーパーテストは、本番の流れをつかむためにも、よい機会だと考えています。

5. 「やったなり」の成績評価

e-Learning 授業ですので、成績評価も機械的になります。たとえば、『英語 ID』は、TOEIC スコアで 400 点以上を取ることが単位取得の条件です。スコアによって、「秀」から「不可」までの評価がつきますが、これに、通常の学習状況を点数化し、TOEIC スコアに加えて、最終評価としています。場合によっては、TOEIC スコアの成績基準よりもよい評価がつくこともあります。『英語 IIA2/IIB2』については、成績評価の最低基準を設けていますので、最低基準以上の学習を進めた場合、多く進めればその分、高い成績評価になるようにしています。また、1 レッスン毎や 1 週間毎の進捗状況を確認し、学習の進捗の遅い学生については、面談等での対応をしています。特に、課題の 3 分の 1 を以上進めているのに、小テストの成績が良くなかったり、小テストを毎回受け、出席もほとんどしているのに、学習が思うように進んでいない学生などを調べ、面談をしています。

6. e-Learning などの指導

e-Learning 授業ですので、授業では、何を学習するか、どの課題を進めるかは学生によって変わってきます。『英語 ID』では、毎回、学習するレッスンを指示していますが、『英語 IIA2/IIB2』は、学生が、どのコースのどのサブコースを学習するか、各自で決めて進めます。ある程度、授業の回数が進めば、学生は各自で学習できるため、特に何かを指導するという必要はありません。しかし、だからといって、学生アシスタントだけに授業を任せ、教員が教室に不在にするわけにもいきません。通常、授業では、私も教室に常駐し、進捗状況のチェックや教室内を見回って学生の様子を見たりしています。

『英語 ID』では、毎回、出席と学習内容の確認を兼ねた表を提出してもらっています。学生は、授業の終わりに、その日の学習内容を記入し、提出します。それをこちらで確認し、コメントをつけて、次の授業で返却します。これを毎回繰り返しています。この方式は昨年度の授業から始めました。一言でもコメントをつけることで、学生の学習内容を見ていることを伝えられますし、簡単な質問のやりとりも可能です。また、学習ソフトによってはテストのようにスコアが出るものがあります。そのスコアも記入させているので、学生個人が、どのくらい学習していて、どのくらい力が伸びてきているか、確認することもできます。

終わりに

英語 e-Learning 科目は必修科目であるため、1 年生、2 年生は全員、履修します。授業については学生アシスタントを使い、私が一人で担当していますが、成績評価基準等は英語教員全員で話し合ってきました。

これまで 3 年間、e-Learning 科目を担当してきて、e-Learning だからこそその細かい指導の必要性を感じてきました。学生に同一の学習環境を与えることができますが、ただ「やりなさい」というだけでは、学生は何のために学習しなくてはならないのか、理解してくれません。毎年、指導の方法や成績評価の基準を考え、変えてきた結果、自主的に TOEIC の必要性に気づき、継続して学習する 3 年生以上の学生が増えてきたように思います。

なぜ大学進学率が 50%を超えたのか？ —大学進学人口と大学数との関連—

—学報第 376 号 (H22.8) 掲載—

教育開発センター 辻 義人

【1. 大学のユニバーサル化】

2009 年度、四年制大学への進学率が初めて 50%を超えました。これは、望めば必ずどこかの大学に入学できてしまう「大学全入時代」「大学のユニバーサル化」と呼ばれている現象です。これまで、そのメリットやデメリットについて、多くの議論がなされてきました。例えば、メリットとして、多くの若者に高等教育を受ける機会を与えられるようになったことが挙げられます。その一方、デメリットとして、学力や背景の多様化によって教育活動が困難になること、学習に対するモチベーションが低い学生が増加することなどが指摘されています。今後、ユニバーサル化に合わせた大学教育のあり方についての議論が、さらに活発化することが予想されます。

【2. 大学進学率が上昇を続けた理由とは？】

上記の通り、大学進学率が 50%を超えたことは、すでに多くの方がご存じのこととされます。しかし、これまで大学進学率がどのような経緯をたどり、なぜ 50%を超える事態になっているのかについて、詳しく紹介している資料は必ずしも多くはありません。そこで本稿では、大学進学率の推移に注目し、大学のユニバーサル化が生じた経緯を紹介します（詳細は、海老原, 2009 を参照）。

大学進学率の推移を、図 1 に示します。1980 年代後半、大学進学率はおおよそ 25%弱で推移してきました。それ以降、1990 年代前半から、大学進学率は緩やかに上昇を続け、2009 年度

に初めて 50%を超えたことが読み取れます。つまり、1980 年代後半には、およそ 4 人に 1 人が大学に進学していた割合でした。ところが、2009 年には、2 人に 1 人が大学に進学するようになったのです。

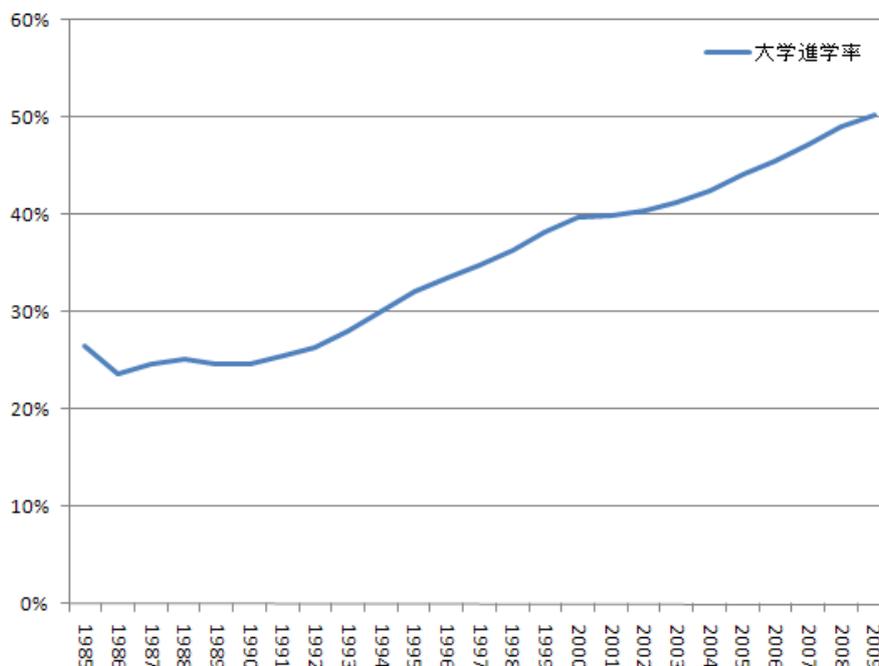


図 1 大学進学率の推移 (1985~2009)

大学のユニバーサル化の経緯を読み解くには、大学進学率のグラフだけでは不十分です。そこで、図 2 では、大学進学率と 19~22 歳人口（主に大学に入学する年齢人口）を示します。ここで、特に 19~22 歳人口（図中、赤線）に注目すると、1993 年に最も多く、約 816 万人であることがわかります。それに対して、2009 年には、19~22 歳人口は約 513 万人となっています。このように、1990 年代前半から、大学進学率が上昇を続ける一方、19~22 歳人口は減少し続けていることがわかります。

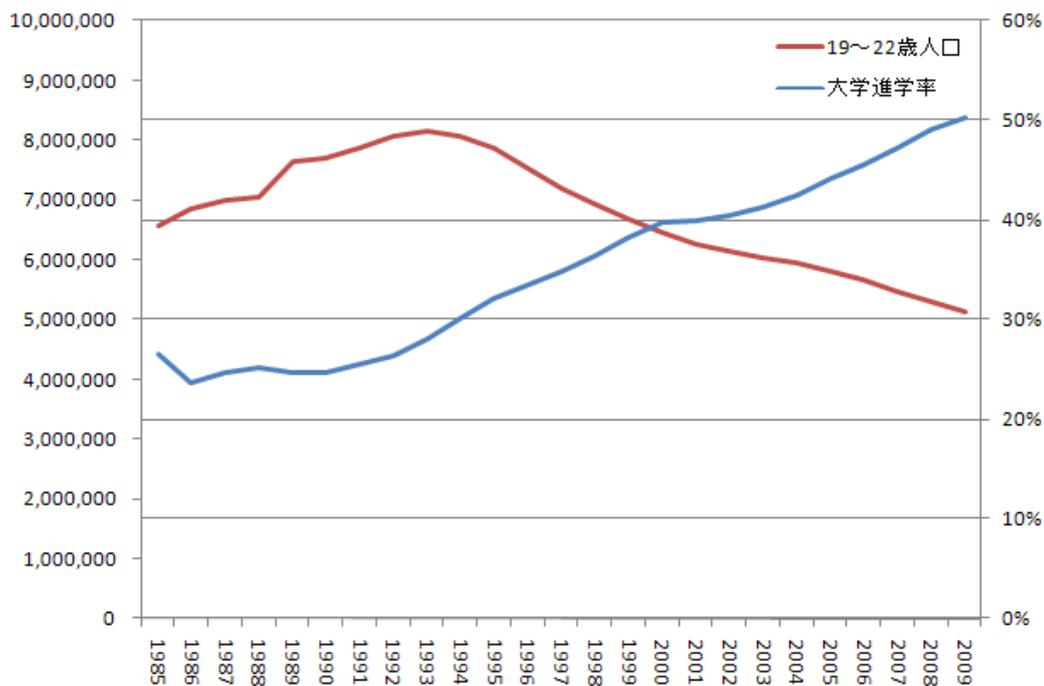


図2 大学進学率と19~22歳人口の推移

各年度の大学進学率と、19~22歳人口のデータを用いることで、その年度ごとの実際の大学生数を計算することができます。ここで、1993年、2000年、2009年を対象に、大学生数の推移を計算すると、以下のような結果となりました。

- ・最も19~22歳人口が多かった1993年の大学生数は、約240万人
- ・中間の時期である2000年の大学生数は、約275万人
- ・大学進学率が50%を超えた2009年の大学生数は、約285万人

この結果より、大学進学率が顕著に上昇している一方、大学生数はそれほど増加していないことがわかります。この模式図を図3に示します。1993年の大学進学率は、約25%でした。また、2009年の大学進学率は、約50%でした。大学進学率のみに注目すると、ここには2倍程度の違いがあります。しかし、実際の大学生数は、さほど大きく変化していないのです（正規分布の斜線部分の面積は、さほど変化していません）。

このことから、大学進学率が50%を超えた理由を推測することができます。1990年代前半から、19~22歳人口は一貫して減少しています。その一方で、大学の受け入れ学生数（大学入学者数）は一定であり続けました。そのため、大学進学率が50%を上回る現象が生じたものと考えられます。

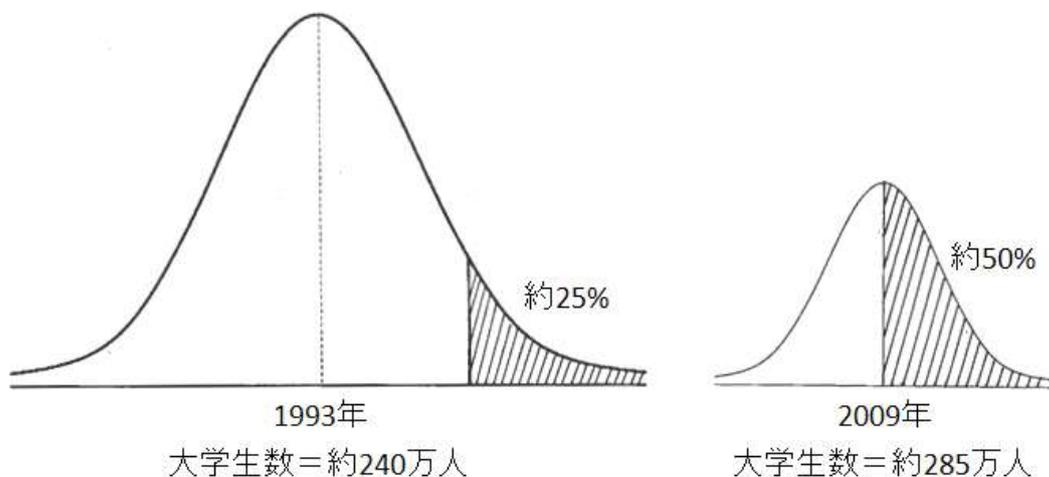


図3 大学進学者数の比較イメージ（1993年と2009年）

【3. 今後、大学進学率はどう変化するのか？】

本稿では、大学進学率が50%を超えた経緯について、大学入学者数との関係から紹介してきました。では、今後、大学進学率はどのように変化するのでしょうか。この点については、19～22歳人口と大学数との関連に注目する必要があります。図4は、1980年代後半からの大学数の推移を示したものです。1985年には450校程度であった大学数が、2009年には800校弱にまで増加していることがわかります。本来、19～22歳人口に合わせて推移すべきであった大学数が、緩やかな増加を続けています。このように、大学の受け入れ学生数が増加し続けていることも、大学進学率の上昇につながる理由の一つといえるでしょう。

今後の大学進学率に関しては、大学数の変化に注目する必要があります。2010年夏の時点において、各地で大学の統廃合に関するニュースが聞かれるようになってきました。今後、競争力のない大学は、存続が困難となることが考えられます。このことによって、19～22歳人口の大学入学の受け皿が減少することから、今後とも大学進学率が上昇し続ける可能性は低いことが予想されます。今後しばらく、大学進学率は50%近くを維持すると思われますが、その後は低下し、適切な割合で推移するのではないのでしょうか。

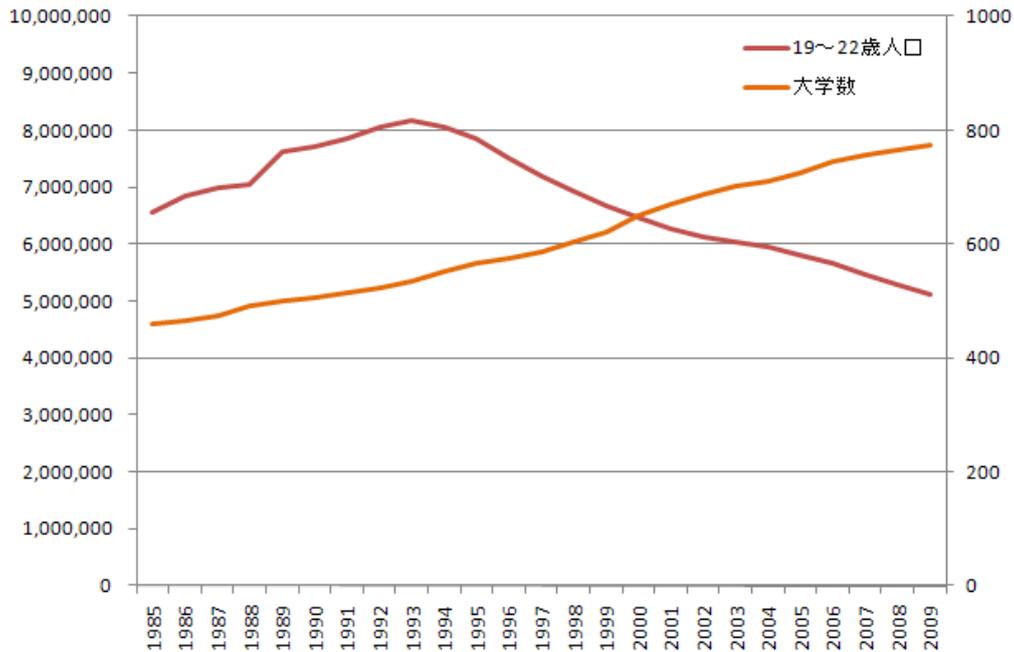


図4 19~22歳人口と大学数の推移

【4. 本稿のまとめ】

本稿では、大学進学率が50%を超えた経緯について、19~22歳人口と大学数の観点から考察し紹介しました。その結論を、以下の通りにまとめました。今後、ユニバーサル化した大学において、どのような教育活動が求められるのか、引き続き情報収集と検討が求められています。

問1) どのような経緯で、大学進学率が50%を超えたのか？

回答1) 1990年代前半を境に、19~22歳人口は減少の一途を辿っている。その一方、大学入学者は減少せず、むしろ微増する傾向にあった。このため、19~22歳人口における大学入学者の割合が徐々に上昇し、2009年に50%を超えたといえる。

問2) 今後、大学進学率はどのように変化するのか？

回答2) 大学進学率の上昇には、大学数の増加が関連していることが考えられる。これまで、大学数は1980年代後半から一貫して増加傾向にあった。しかし、現在、競争力の乏しい大学の存続が困難になりつつあることが指摘されている。このことから、今後の大学進学率は、大学の統廃合の状況に合わせて低下すること、そして、その後は安定したレベルで維持されることが予想される。

(参考資料)

海老原嗣生 (2009) 学歴の耐えられない軽さ やばくないか、その大学、その会社、その常識、朝日新聞出版

「2010 年度前期：授業改善アンケート 授業規模と学生評価の関連」

—学報第 381 号 (H23.1) 掲載—

教育開発センター助教 辻 義人

例年、本学においては、学期終了時に「授業改善のためのアンケート」を実施している。アンケート結果は、各教員にフィードバックされ、学生が授業に対してどのような印象を持っているのか、また、具体的な改善の要望などを参考にすることができる。教員と学生とが、授業について意見交換を行える機会は、決して多くはない。この点について、本アンケートの結果は、本学の授業改善に大きく貢献しているものといえるだろう。なお、アンケート結果は、各教員にフィードバックされるだけでなく、FD 活動報告書「ヘルメスの翼に」において、本学における授業改善の指針としてまとめられている。

2010 年度の前期では、昼間・夜間主の両コースを合わせて 205 科目でアンケートを実施した。全科目を合計すると、7990 件の回答が得られている。

授業改善アンケートの設問内容と、その評定値の平均を以下の表 1 に示す。集計結果より、設問 6 (授業中の私語・遅刻への対処) を除き、評定値が 4 を上回っていることが示された。本アンケートは 5 段階で行われていることから、多くの学生は、本学での授業に対してある程度高い評価を行っていたことが伺える。

表 1 アンケート項目と学生の平均評定値

設問	平均値
1) シラバスやオリエンテーションから、事前に十分な情報が得られた。	4.14
2) 学生の理解を促す工夫 (授業形態や内容など) が見られた。	4.10
3) 教員の説明や指示内容は明確であった。	4.12
4) 教材や資料 (板書、スライド、プリントなど) の提示が適切であった。	4.03
5) 学生への対応 (質問の回答、進度の調節など) が適切であった。	4.10
6) 授業中の私語や遅刻者への対処が適切であった。	3.99

次に、授業の規模と学生の評価との関連に注目する。これまでFD報告書「ヘルメスの翼に」において、授業の規模と学生の授業満足度との間には負の相関があることが報告されている。これは、各科目の履修者が多ければ多いほど、授業評価アンケートの評価が低下する関係性である。

ここで、アンケートの回収枚数に基づき、授業の規模の分類を行った。また、上位33パーセント、下位33パーセントを基準として、大・中・小規模科目の評定値の比較を行った。以下に、各規模における学生の評定値を示す(表2、図1)。

表2 授業規模ごとのアンケート評定値

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7
大規模	4.11	4.05	4.08	3.99	4.04	3.91	4.03
中規模	4.15	4.08	4.11	4.03	4.09	3.97	4.15
小規模	4.18	4.21	4.20	4.08	4.17	4.11	4.31

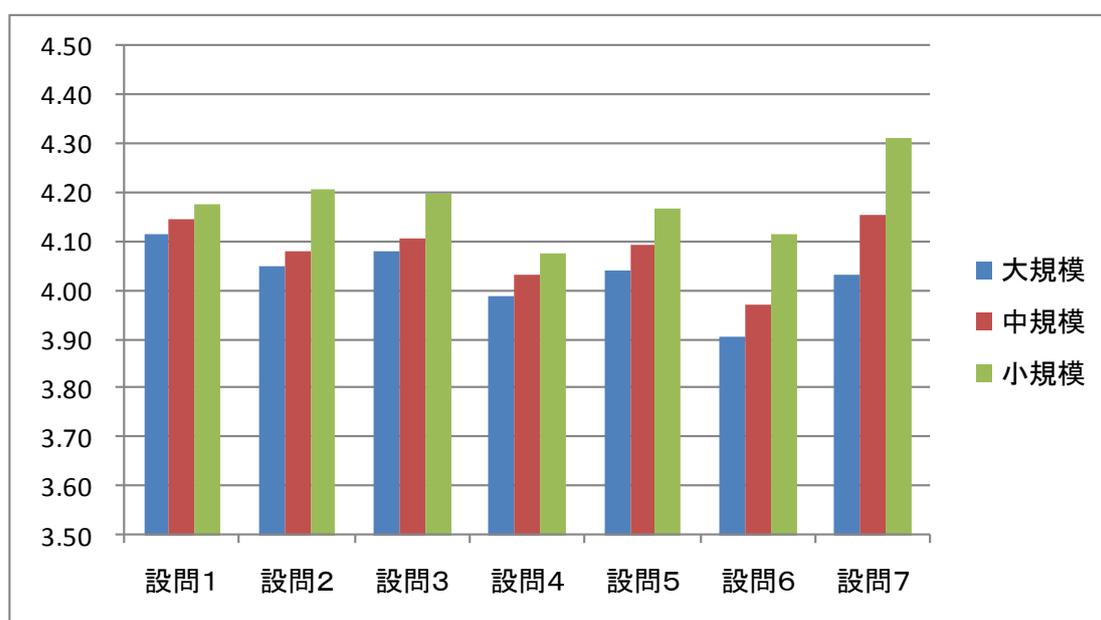


図1 授業規模ごとのアンケート評定値

この結果より、授業の規模が大きいほど学生の評価が低い傾向があることが示された。授業規模が大きい科目では、学生の理解度や前提となる知識量の幅が大きいため、講義の進行がきわめて困難である。また、私語や遅刻者が増加するために授業運営が難しい。このために、受講者が多い科目では、アンケート評定値が低下することが考えられる。

授業規模と学生の評価の関連性に注目したとき、設問7(授業に適した教室環境)にもっと

も反映されている。ここで、興味深い点として、それ以外の質問項目においても、大規模科目の評定値が低いことが挙げられる。授業規模が大きい科目において、学生は学習環境のみではなく、授業の内容や私語への対応など、多様な点について不満を持ちやすい可能性が示された。

このことから、これまでの FD 報告書「ヘルメスの翼に」において報告されたように、授業の規模と学生の授業評価との間にマイナスの関連性があることが示された。さらに、授業の規模が大きくなることによって、教室環境の評価にとどまらず、多様な側面にマイナスの影響を及ぼす可能性が示された。

今後、2010 年度後期のデータの収集と分析を行い、授業の規模と学生の評価との関連について、さらなる検証が必要であろう。

英語 e-Learning 授業について (2) 独自教材の導入について

—学報第 383 号 (H23.3) 掲載—

言語センター客員研究員 横村 (鶴木) 栄美

はじめに

英語 e-Learning 科目では、現在、本学独自教材を作成しています。本稿では、e-Learning 科目の目的、独自教材の内容について、述べていきます。

1. 本学の英語 e-Learning 科目の目的

本学の英語 e-Learning 科目の目的は、主に、TOEIC で「ある程度」のスコアを取得できるだけの力をつけることにあります。「ある程度」とは、ひとつは、400 点以上の取得を目指すことです。そのためには、400 点に届かない学生への指導と、高得点の取得を目指す学生への指導を、同時にこなす必要があります。もうひとつは、就職試験等で役に立つだけの TOEIC スコア取得を目指す (750 点以上) ことにあります。これに加えて、本学学生の能力や必要性に合った教材、英作文 (Writing) にも対応できる教材の開発・提供のために、本学の e-Learning 授業は存在します。

2. 独自教材開発の経緯

自主開発教材を作成する流れになったのは、既存のソフトでは不十分な問題が出てきたからです。既存ソフトはすでに出来上がっていますので、目的に合ったものを選択すれば、あとは学生に指示を出して学習させることが可能です。しかし、本学の学生の傾向に合うものや、大

学や社会が求める人材を育てるということも考えると、もっと専門的、多種類、多レベルの設問が必要となってきます。

本学では、英語科目は、必修科目の他にも、教職科目や専門科目にも開講されており、大学院では、英語の教員免許（専修免許）が取得可能なコースもあります。これらの英語科目を、体系的に、継続して学習できる環境を作るためにも、独自教材の開発が必要であると考えました。

3. 独自教材について

これまで **e-Learning** の教材の作成や授業を担当してきて、良い教材とは、「大量で」「多レベルで」「多種類で」「小さな目標を設定できて」「ごほうびのあるもの」、これに加えて、「対面授業との連携が取れるもの、他の学習につながられるもの」の6つのポイントがありように思います。

現在、作成している教材は、常に、問題数を増やし、更新していくことが可能です。さらに、タグ付けによって、レベルごと、話題ごと、文法項目ごとなどの分類が可能です。1回の学習（授業時間）で、60問から80問を進めるように、設問数を設定しています。設問から抜き出したテストを作成することもできます。

対面授業との連携については、今後の課題となっていますが、設問をもとに授業用テキストを編集し、対面授業での利用を検討しています。

今年度から、1年生の英語 **e-Learning** 授業で、独自教材の導入を始めました。完成した設問は学生にとっては易しかったようですが、アンケート結果などを見ても、学習そのものは、おおむね好評だったように思います。

教材の作成は、最初はとても大変です。まったくのゼロから作るわけですから、手間も時間もかかります。しかし、独自教材のよいところは、作成した教材の修正や、追加が随時可能なことです。また、個々の学生の学習状況を確認できるので、学生個人の得意・不得意分野や、学年ごとの学生の傾向を見ることが可能です。学生の全体のレベルや傾向が変われば、新たな教材を増やし、提供することができます。

教材を自作すると、設問の追加や修正、削除が常に可能です。時事問題等は特に、時期が過ぎれば修正の必要があります。また、1年生コースにある設問を基礎コースに使ったり、レッスンの中の設問を他のレッスンで使うなど、設問の移動が可能です。

4. 終わりに

e-Learning 教材は、英語科目だけではなく、他の外国語科目、他の専門科目でも作成が可能です。パソコンで、**Word** や **Excel** が使えれば、あとは設問を増やしていき、修正、更新を繰り返して、目的の教材を完成させていきます。労力はかかりますが、本学学生に合うもの、

教員が目指すもの、大学が求めるものに、最も近い教材を提供できます。

英語 e-Learning 教材は、今後、TOEIC の他に、TOEFL、英検、再履修対策、ビジネス英語、教員免許更新関連、OJT などの分野も作成を計画しています。授業だけではなく、英語に興味がある本学全ての人に役に立つものを、目指していきたいと思います。

第2章 平成23年度「インターンシップの教育効果検証」について

第2章 平成23年度「インターンシップの教育効果検証」について

キャリア教育開発部門長 教授 杉山 成

2. 1 調査の目的

大学教育におけるインターンシップの教育効果については、これまで体験学習 (learning by doing) や正統的周辺参加 (legitimate peripheral participation) という観点から考察がなされている。それらの研究では、インターンシップでは、直接自らの眼と耳で現実の「仕事の場」を体感することができ、また、組織の一員としての役割が付与されるため、そのことによって働くことへの理解とコミットメントが深化するといったキャリア意識への効果が想定されている。

また、近年はインターンシップの評価というテーマに関心が寄せられているが、こうしたアクティブ・ラーニングの具体的な評価方法については議論の途中にあり、心理・教育測定の観点からさまざまな試行がなされている段階である。他方、実際の大学教育においてインターンシップを卒業所要単位として認定する場合には、単位認定のための成績評価が必要であり、これについては学生の提出する成果レポートや研修先からの報告書に基づいて成績評価が行われるのが一般的である。

現在、小樽商科大学で行われている成績評価も同様の形式で行われており、インターンシップ参加学生に対しては、主にインターンシップ終了後の成果報告レポートと研修先からの評価に基づき合否を決定している。しかし、インターンシップの教育効果がどの程度のものであり、それによって学生にどのような変化が生じたのかということを確認するためには、上述のキャリア意識の変化という指標によって量的にとらえることも必要であろう。また、教育改善のPDCAサイクルにその結果を取り入れることによって、インターンシップ運営方法の改善に関する示唆が得られることも期待できる。以上の理由から、今回、インターンシップの事前教育と事後教育の際にインターンシップによる参加学生の心理的变化に焦点を当てた検証を行った。

2. 2 調査の概要

対象；小樽商科大学3・4年次生で学内および学外インターンシップに参加した学生。

方法；第一回測定は2011年7月13日に行われた事前教育の際に、第二回測定は就業実習後の

11月9日に行われた事後教育（インターンシップ意見交換会）の際に行われた¹。なお、二回の調査は別々の質問紙で行われたため、第二回測定の際に第一回測定の結果を参照することはできない。

内容；第一回測定と第二回測定の内容は同一であり、次のような内容で構成されている。

（1）進路選択に関する自己効力尺度² 進路選択の際のさまざまな行動について、その遂行に関する自信の程度を測定する。30項目の質問に対し、4件法による回答を求めた。

（2）社会的スキル尺度³ 初歩的なスキル、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレス処理のスキル、計画のスキルという6種類のスキルで構成されており、全体では28項目で構成される尺度である。5件法による回答を求めた。

（3）自尊心尺度⁴ 自分自身の価値や能力に関する感覚・感情を測定する尺度。Rosenberg（1965）による原版を翻訳して使用した。全10項目に対し、4件法による回答を求めた。

（4）商大基礎力尺度 キャリア教育の効果測定の指標として、経済産業省による「社会人基礎力」概念、文部科学省による「学士力」概念を参考に、小樽商科大学の教育目標と照らし合わせ、学生が身につけるべき能力・スキルを設定し、それぞれを測定する質問紙を試作した。具体的には、①対人関係能力（他者と協同する能力）、②自己管理能力（自分の行動をコントロールする能力）、③課題解決能力（課題を分析・理解し、解決する能力）という3次元から構成され、合計18の能力・スキルについて、一般的な社会人を5ポイントとしたときの現在の自分の水準について1～5までの5件法により評定をさせた。

さらに、実際の際には上記の測定の後に、「インターンシップで必ず守るべきルールについて」というテーマでのグループワークを行い、その内容を踏まえ、事前調査では「インターンシップにおいて取り組む個人的課題・目標」。さらに、事後調査では「事前課題で設定した課題への振り返り」というテーマで自由記述による回答を求めた。

2. 3 結果と考察

インターンシップ参加学生のうち、事前事後の両方の調査に参加した人数は60人であり、内訳は男性26人、女性34人であった。インターンシップの前後において、それぞれの指標がどのくらい変化したのか（被験者内要因）を算出し、それと性別要因（被験者間要因）との二要因分散分析を行った。

以下、指標ごとに考察をしていくこととする。

¹ 職場での就業体験は原則として8月上旬～9月下旬の夏期休養期間に行われた。

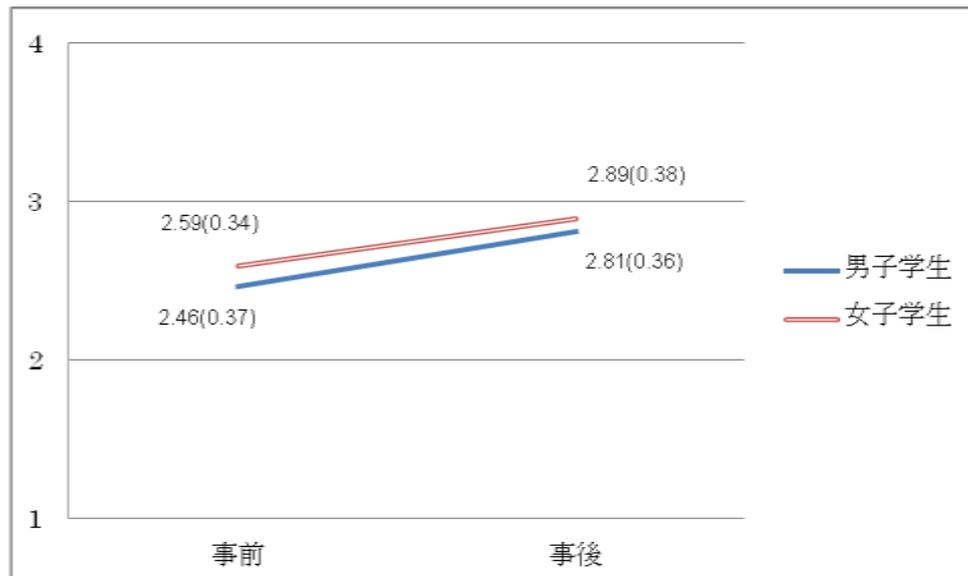
² 浦上昌則 1995 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断—Taylor & Betz(1983)の追試的検討— 進路指導研究 16, 40-45.

³ 菊池章夫 1988 思いやりを科学する -向社会的行動の心理とスキル- 川島書店.

⁴ Rosenberg, M. 1965 Society and the adolescent self-image. Princeton Univ.Press.

(1) 進路選択に関する自己効力尺度の結果

30項目全体の平均得点については、インターンシップ経験の主効果は有意であった ($F(1, 58)=54.30, p<.001$)。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=.1.65, n.s.$)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58) =.292, n.s.$)。このように、男女の差なく、インターンシップ前に比べてインターンシップ後の自己効力が上昇している傾向が確認された。



* 括弧内は標準偏差

図1 進路選択に関する自己効力の変化

また、尺度のそれぞれの項目に関する分析においても、すべての項目においてインターンシップ前に比してインターンシップ後の得点が高い傾向が確認された。そのなかでも、とくにインターンシップ前後で差のみられた項目は「5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること」(前 1.97→後 2.60)、「人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること」(前 2.72→後 3.32)、「将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること」(前 2.17→後 2.68)、「将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること」(前 2.45→後 2.92)であり、このようにインターンシップ後には、目標を設定しその実現のために計画を立てて進めていくといった「計画性」の側面に関する自信が特に高まっていることが確認された。

(2) 社会的スキル尺度の結果

社会的スキル尺度全体の平均得点について、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)$

=26.9, $p < .001$)であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58) = .063$, n. s.), 性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58) = 3.19$, n. s.)。全体として、男女ともにインターンシップ前に比べ、インターンシップ後には自身の社会的スキルを高く評価している傾向が確認された。

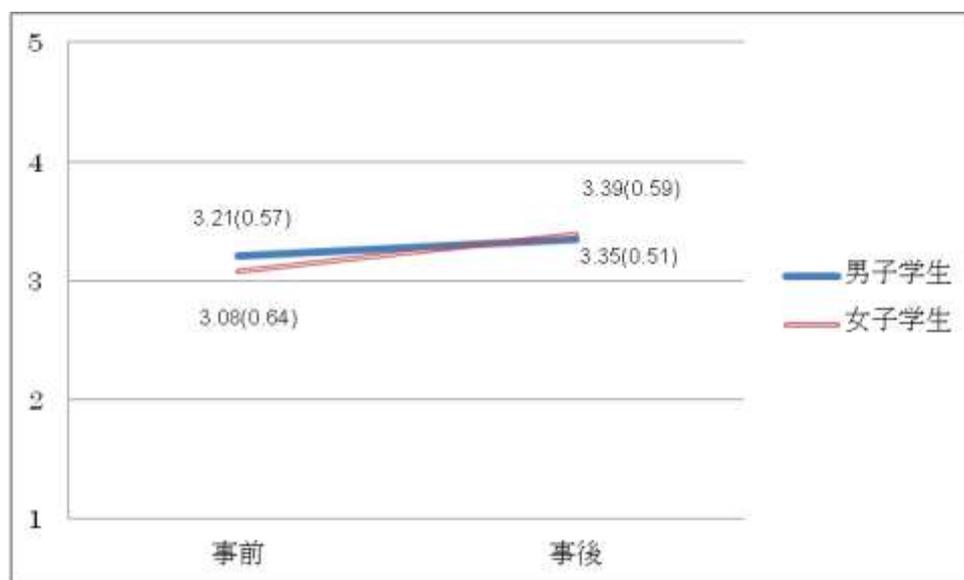


図2 社会的スキル（合計）の変化

なお、この尺度は6つのカテゴリから構成されるが、カテゴリごとの分析においては図3-1, 3-2のレーダーチャート⁵に示すような結果となった。男子学生は事前に低かったストレス処理のスキル（非難を処理するなど）や感情処理のスキル（自分の感情を表現するなど）の伸びが大きく、女子学生では計画のスキル（目標を設定し決定を下すなど）において高い伸びを示しているのがわかる。

⁵ レーダーチャートについては、事前・事後の差異を見やすくするために中心部を拡大している。

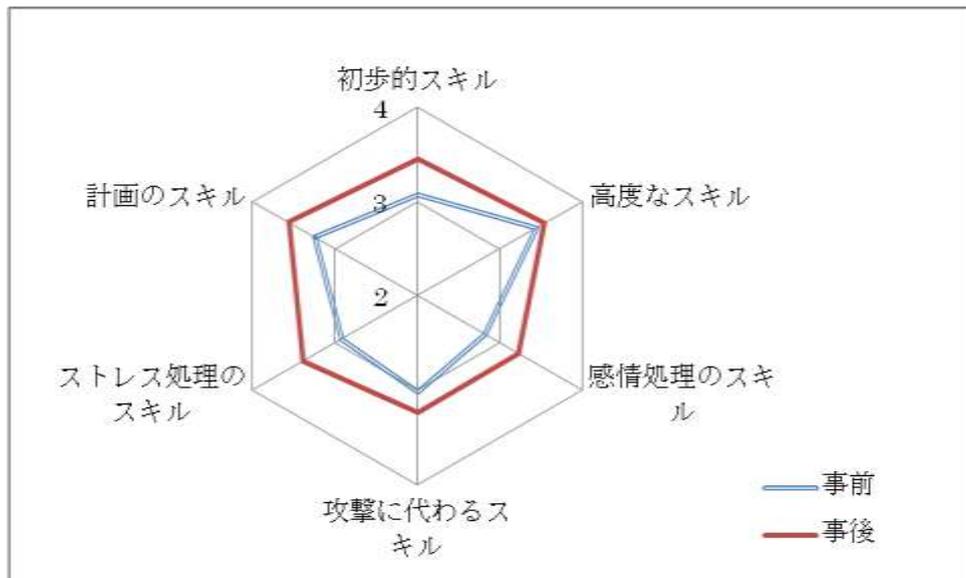


図 3-1 社会的スキルの変化（男子学生）

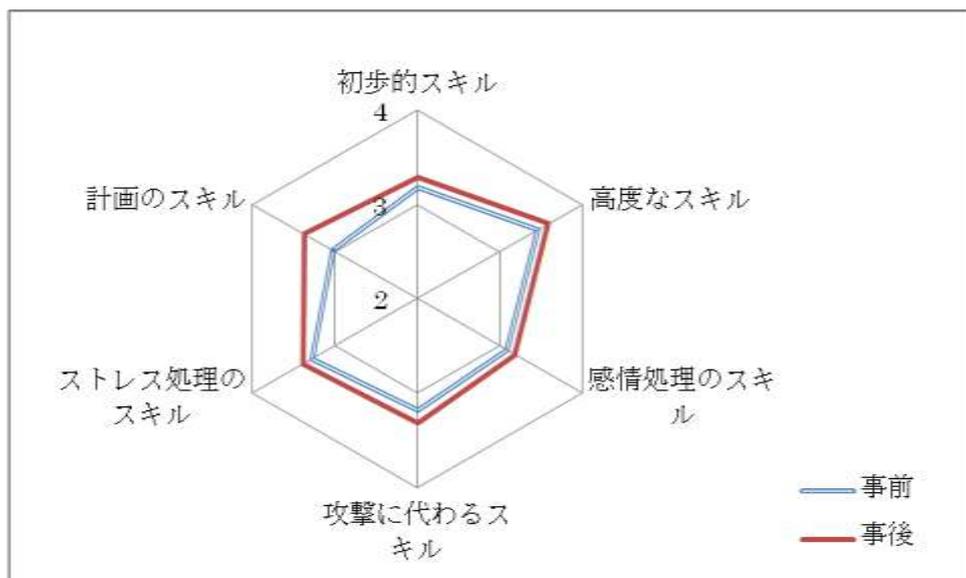


図 3-2 社会的スキルの変化（女子学生）

(3) 自尊心尺度の結果

Rosenberg (1965) によれば、自尊心 (Self-Esteem) とは他者と比較することによって優越感や劣等感を感じるのではなく、自分自身で自己に対する尊重や価値を評価することを意味する。さまざまな調査によって、社会的・心理的適応との関連の深い、重要な内的側面であることが確認されている。

自尊心尺度全体の平均得点について、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)=14.31, p<.001$) であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=0.21, n. s.$)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58)=0.09, n. s.$)。男女ともにインターンシップ後に自尊心が上昇していることが確認された。

インターンシップの過程において、学生生活とは異なる仕事という場のなかで、学生たちは自身の弱点や欠点に気づくことも多く経験していると思われるが、自尊心が有意に上昇しているという今回の結果からは、それ以上に自分を肯定的に評価する機会を得ていたことが示唆される。

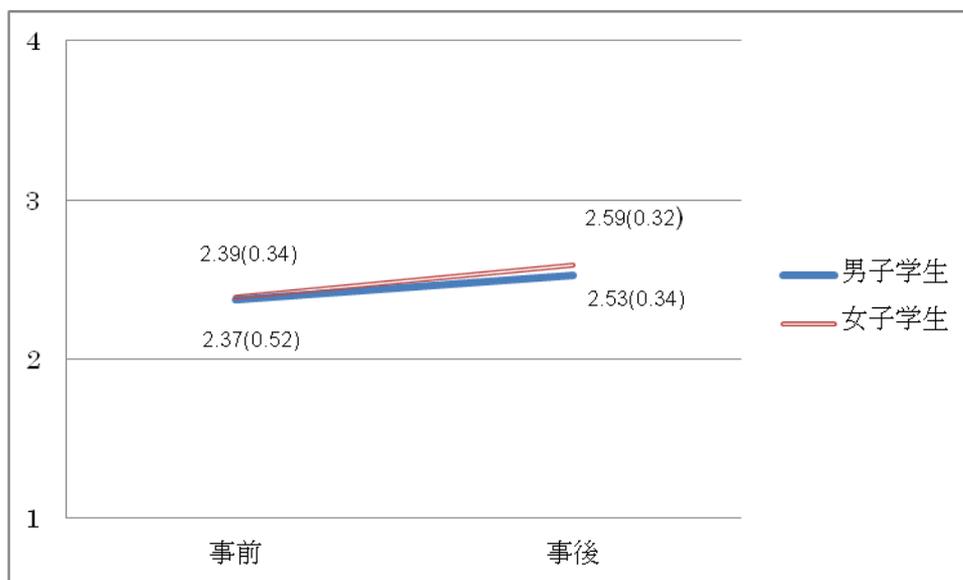


図4 自尊心の変化

(4) 商大基礎力尺度の結果

商大基礎力全体の平均得点において、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)=38.64, p<.001$) であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=0.07, n. s.$)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58)=0.17, n. s.$)。全体として、男女ともにインターンシップ前に比べ、インターンシップ後には自身の商大基礎力を高く評価している傾向が確認された。

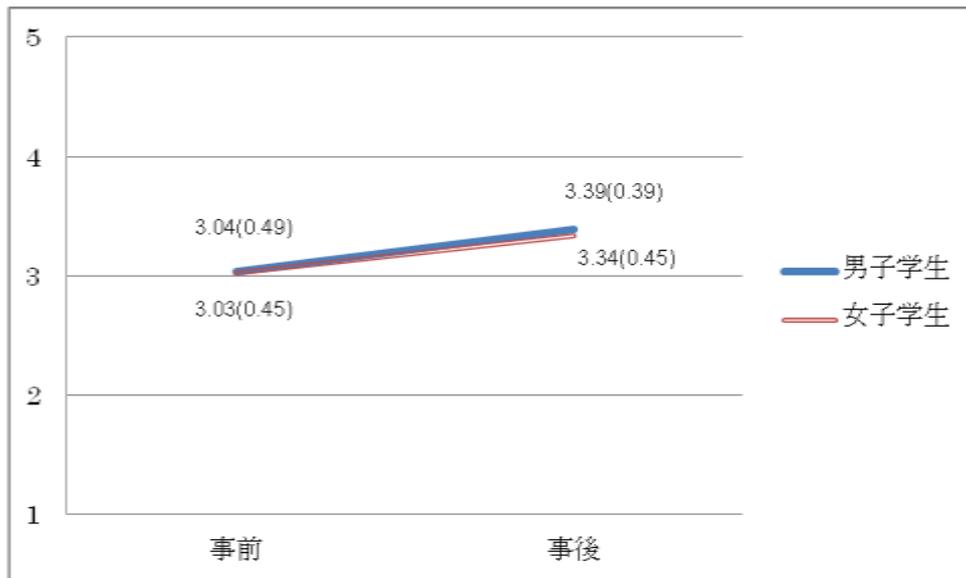


図5 商大基礎力（合計）の変化

商大基礎力という概念は対人関係能力、自己管理能力、課題解決能力という3つのカテゴリから構成されており、カテゴリ別に分析をした結果は次のようになった。

まず、対人関係能力について、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)=26.95$, $p<.001$) であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=.58$, n. s.)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58)=0.01$, n. s.)。

全体として、男女ともにインターンシップ前に比べ、インターンシップ後には自身の対人関係能力を高く評価している傾向が確認されているが、男子学生における働きかけ力、女子学生における働きかけ力や発信力は、得点レンジが1-5のなかで3未満の評価とインターンシップ後でもやや低い傾向がみられる。

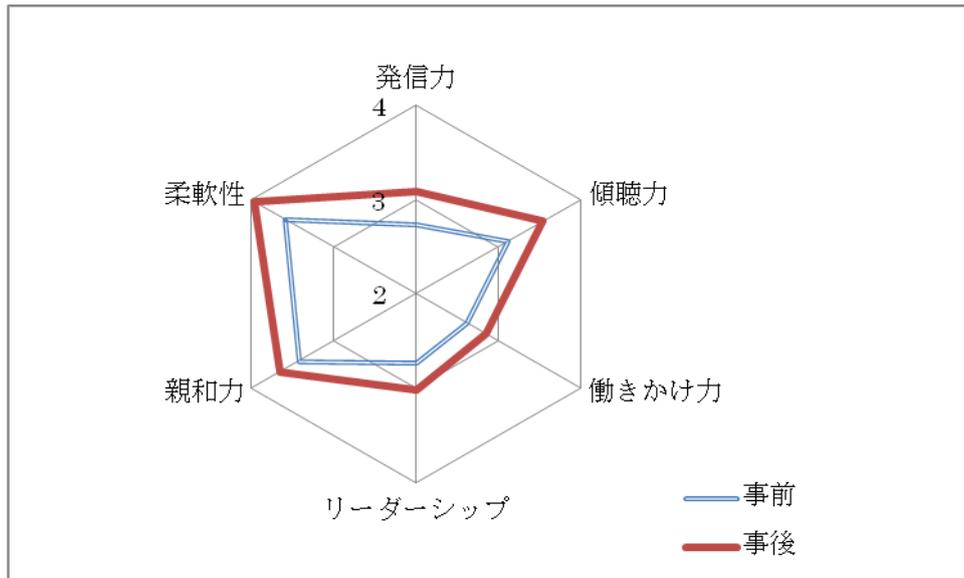


図 6-1 対人関係能力の変化（男子学生）

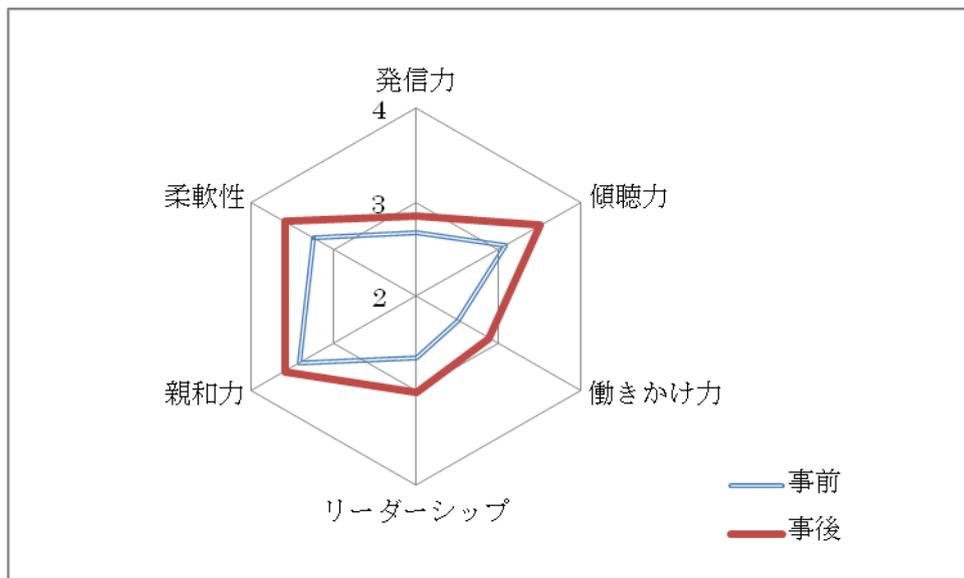


図 6-2 対人関係能力の変化（女子学生）

次に、自己管理能力については、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)=19.54$, $p<.001$) であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=.58$, n. s.)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58)=0.73$, n. s.)。これも同様に、男女ともにインターンシップ前に比べ、インターンシップ後には自身の自己管理能力を高く評価している傾向が確認された。男女の比較では、男子学生の事前調査において特に低かったストレスコントロール力や自己学習力の向上が注目される。また、実行力については、インターンシップ後の上昇はみられるが、男女ともにやや低めの評価であった。

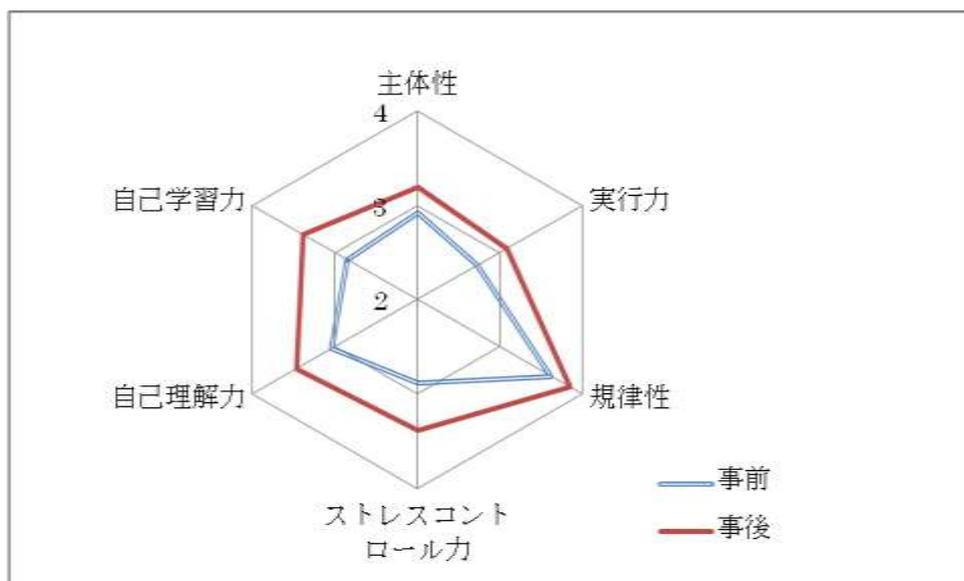


図 7-1 自己管理能力の変化（男子学生）

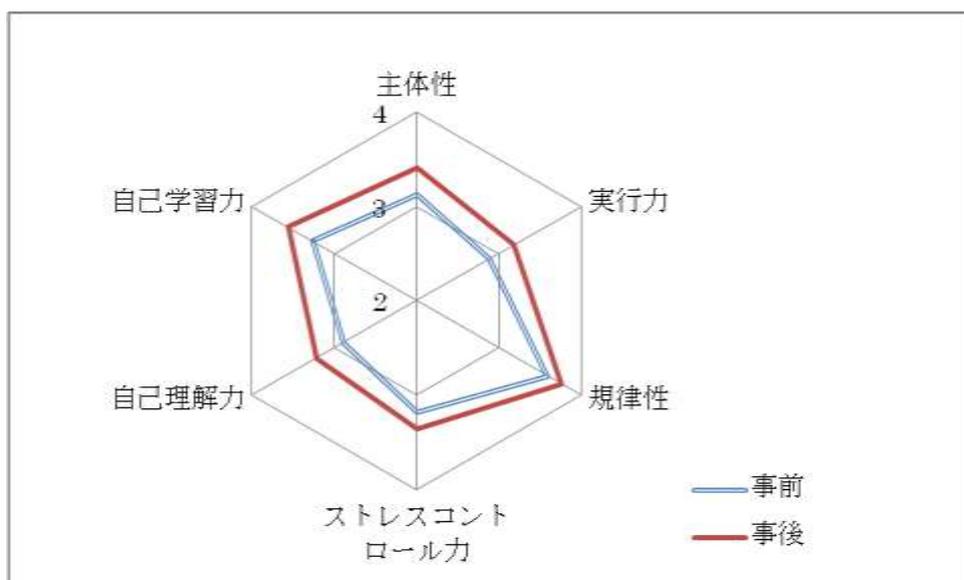


図 7-2 自己管理能力の変化（女子学生）

課題解決能力について、インターンシップ経験の主効果は有意 ($F(1, 58)=29.22, p<.001$) であった。性別の主効果は有意ではなく ($F(1, 58)=.36, n.s.$)、性別×経験の交互作用も有意ではなかった ($F(1, 58)=0.01, n.s.$)。先の2つのカテゴリーの結果と同様に、男女ともにインターンシップ前に比べ、インターンシップ後には自身の課題解決能力を高く評価している傾向を示すものである。事前調査において男女ともに低かった課題発見力は事後調査において向上しているが、同様に低い傾向を示していた創造力については事後も3未満の評価と低めの評価

であった。

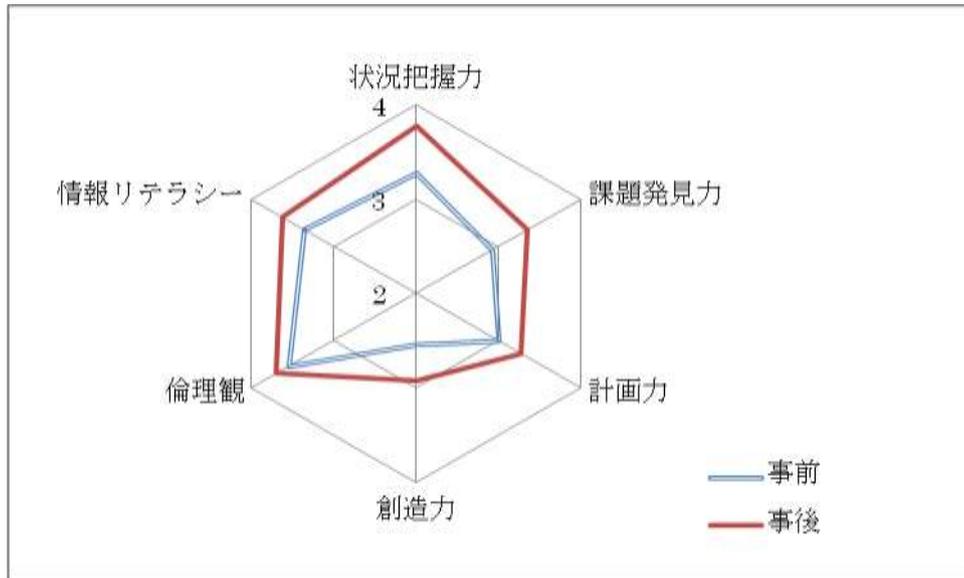


図 8-1 課題解決能力の変化（男子学生）

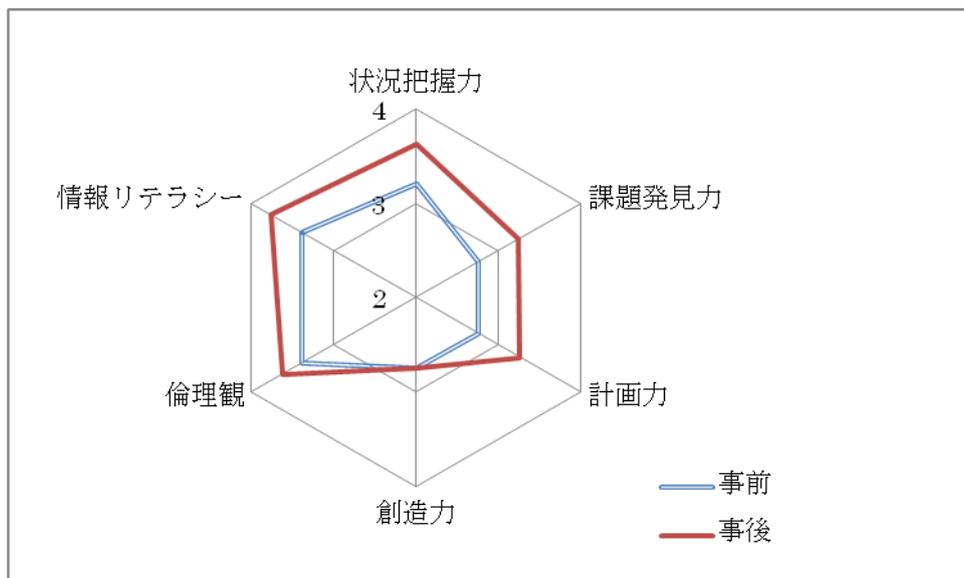


図 8-2 課題解決能力の変化（女子学生）

商大基礎力上昇群		商大基礎力下降群	
量	振り返り	量	振り返り
+23	(積極的に発言するという目標について)他の人と比べると発言はしていなかったと思う。しかし、自分なりに疑問に思った点は質問したりしたので、あくまで自分の評価であるが、達成できたと思う。	-12	適切な言葉遣いについては、全く問題がないと強くは言えないが、大きな失敗もなかった。(仕事仲間とのコミュニケーションづくりという目標については)自分の仕事は単独作業が多く、周りの人とコミュニケーションをとる機会が少なかったため、あまり達成できなかった。
+19	企業の方や取引先の方からお話を伺ったときに、何か自分の中で疑問点が浮かび上がったから、積極的に質問をすることができました。挨拶については、自分では行っているつもりでも、人事部の方から「みなさん静かですね」と指摘を受けたので、もっと学生らしく明るく対応していけばよかったと反省しました。	-11	自主的に発言する、というのがあまりできていなかったと思います。このインターンシップを通して、自分の意見を持ち、疑問を持ち、質問する力が足りないことを実感しました。面倒を見てくれる方とよい関係を築く、というのは達成できたと思います。感謝の気持ちを忘れずに過ごすことができました。インターンシップに参加してよかったです。
+19	インターンシップに参加したことによって、意識が変わった。学校の授業とは違う緊張感があり、時間や挨拶、態度などに気を配って参加することができた。そのことによって、自分の行動に対する責任感が生まれたと思う。働くということや学べたかということ、そこまで業務に携われなかったため、達成はできていない。向いているかはわからなかったが、業界についてくわしく知ることができたのはとてもためになった。	-10	(自ら進んで行動をとるという目標について)自分が興味あることについては、たくさん疑問があり、聞くことができた。しかし、あまり興味のなかったことにはとくに疑問を持たずに終えてしまって反省している。(あせらず、落ち着いた行動をとるという目標について)座学がメインだったので、とくに困ることもなく終わることができた。
+18	疑問に感じたこと、ふとしたアイデア、仕事に対する質問は積極的にできたと思う。しかし、職場でフランクに接していただいたとき、どうしても固い感じになってしまい、もっと打ち解けるべきだったと反省している。	-5	(相手に良い印象を与えるという目標について)考えすぎたせいか、積極的になれない部分が多かった。(小樽の現状に関することを学び、今後の学生生活に活かすことができるものを得るという目標について)小樽の課題を知り、発展させるためにはどうすべきか学ぶことができた。これらの課題と今後の学習課題と結びつけたいと考えるようになった。
+18	設定した課題について、①自信をつける：今回インターンシップ活動を通し多くのことを学んだことは、自信を持つことへしっかりと結びついた。自分を客観的に見て良い点、ダメな点を把握することが一番大事だと知った。②遅刻をすることはなかった。挨拶はもう少し元気にすべきだった。	-4	(積極的に質問・意見をするという目標について)ほぼ達成できたと思う。前半に比べ、後半には自ら進んで質問することも多くなり、積極的に行動できるようになったと考えられる。態度をよくするという目標についてもよく達成できた。期間を通して、一度もあくびなどはしなかった。
+17	(敬語を使いこなすという目標について)十分に使いこなせるようになったとは言えないが、目上の方と話す時に自然と敬語が出るようになったと思う。(商大の代表であるという自覚を忘れないという目標について)常に忘れずに意識することができた。その意識を持つことが明るい挨拶や積極的な行動につながったと思う。何事にも自分なりの意見を持つという目標はあまり達成できなかったため、継続して心がけていきたいと思う。	-2	積極的にコミュニケーションをとらなければならないということを心がけていたが、達成することはできなかったように思う。あいさつについては、意識して行えたと思う。敬語については、あわてると尊敬語と謙譲語が混ざってしまうことがあったので、今後の課題にしたい。

表1 商大基礎力の上昇群・下降群における振り返りの比較

また、インターンシップの教育効果と、設定した目標への到達度との関連を検討するために、商大基礎力尺度合計点についてインターンシップ前後に上昇した学生と下降した学生を抽出し、インターンシップに関する振り返りの内容（自由記述）の比較を行った（表1）。

表中の量とは、事前調査での商大基礎力合計得点から事後調査での同得点を引いた数値（得点のレンジは-72~+72）である。これによれば、商大基礎力上昇群では、積極性（積極的に発言・質問をするなど）への肯定的振り返りが多く見られる。他方、下降群の振り返りには消極的だったことを反省する振り返りが出現しており、こうした側面がインターンシップの教育効果に関わっていることが示唆される。ただし、商大基礎力の上昇群にも下降群にも目標が達成できた部分と達成できなかった部分がそれぞれ記述されており、全体としては両群において大きな質的な差異は認められるわけではなかった。

2. 4 結論

インターンシップの事前と事後におけるキャリア意識を比較した結果、全体的な傾向として次の結果が得られた。

- 1：事前に比べ、事後の進路選択に関する自己効力が上昇した（男女とも）。
- 2：事前に比べ、事後の社会的スキルの評価が上昇した（男女とも）。
- 3：事前に比べ、事後の自尊心が上昇した（男女とも）。
- 4：事前に比べ、事後の商大基礎力の評価が上昇した（男女とも）。

今回の調査ではインターンシップを経験していない学生を対照群として設置しているわけではないので、厳密にはこの変化をすべてインターンシップの効果と結論づけられるわけではない。しかし、複数測度に共通してみられたような効果の頑健性やインターンシップの効果に対する学生の肯定的報告から考慮すれば、これらの変化にインターンシップ経験が及ぼした影響は大きいものと推測される。

他方、インターンシップ終了後にも未開発の側面が存在することが確認された。具体的には、商大基礎力における働きかけ力や実行力、創造力などである。学生の振り返りと重ねあわせて考察すると、これらについてはインターンシップにおいて必要性に気づいたものの、まだその向上に結びつけることができないでいる可能性が示唆される。大学としては、その他のキャリア科目⁶やゼミナールでの活動を通して、こうした気づきを自己成長・自己開発へと繋げていくことができるよう指導していくことが必要であろう。

⁶ たとえば、本学で実施している「地域連携キャリア開発」（2年次以上配当）という科目は、PBL（project/problem based learning）の形式をとっており、こうしたスキル・態度の養成を視野に入れている。

第3章 平成22年度「総合科目Ⅱa」と「ルーキーズキャンプ」アンケート 分析結果

第3章 平成22年度「総合科目Ⅱa」と「ルーキーズキャンプ」アンケート分析結果

教育開発センター助教 辻 義人

3. 1 調査の目的

2010年度「総合科目Ⅱa」、ならびに「ルーキーズキャンプ」に参加した学生は、前期の学習活動を通してどのような変化が見られたのだろうか。この点について、総合科目Ⅱa（4月）、ルーキーズキャンプ（5月）、総合科目Ⅱa（7月）の3回にわたり縦断的調査を行った。

アンケート調査は、総合科目Ⅱa初回（4月14日）と最終回（7月28日）に実施した。初回における回答数は322件であり、最終回における回答数は290件であった。また、ルーキーズキャンプ（5月15～16日）にも、総合科目Ⅱaと同様のアンケート調査を実施しており、52件の回答が得られた。いずれの調査においても、欠損値を含むデータは除外した。総合科目Ⅱaの初回、ルーキーズキャンプ、総合科目Ⅱaの最終回、これらの全てに参加した学生数は32名であった。

アンケート調査の実施に際して、主に以下の4要素に注目した。そのうち、①～③は、心理尺度として一般的に用いられている妥当性の高い尺度である。

①進路選択自己効力感尺度（4件法，30項目，範囲30～120）

→将来の進路選択に対する自信の程度

②自尊心尺度（4件法，10項目，範囲10～40）

→自分自身の有能感

③社会的スキル尺度（5件法，18項目，範囲18～90）

→人間関係を上手に構築する能力

④悩みの個数（12項目，1/0で回答）

→現在どのような悩みを抱えているか

3. 2 アンケート分析結果

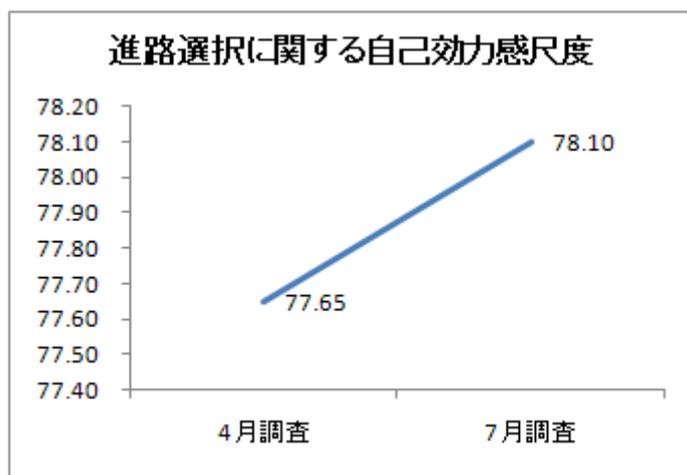
3. 2. 1 総合科目Ⅱaの前後間での比較

総合科目Ⅱ a 履修の前後（4月と7月）で、初年次生にどのような変化が見られたのだろうか。分析の結果より、総合科目Ⅱ a の履修者は、社会性が向上し、悩みの個数が増えていることが示された（対応のある t 検定）。なお、進路選択自己効力感と自尊心尺度については、素点は上昇しているものの統計的な差は認められなかった。

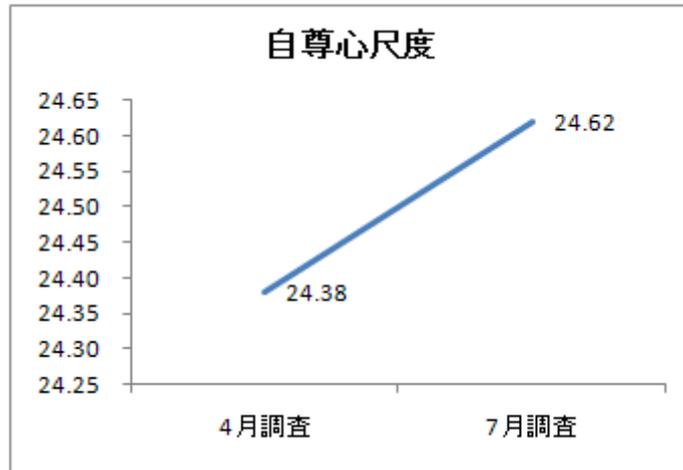
総合科目Ⅱ a では、主にグループディスカッションを通じた職業観・勤労観の育成が行われている。それを通して、多様な背景を持つ学生と交流することとなる。ほぼ毎回の授業で協働的作業が求められることから、社会性が向上しやすい環境にあったことが予想される。また、悩みの個数については、大学に入学し、学生が多様な活動に取り組むことになったためと考えられる。ここで注意が必要となるのは、悩みの個数の多少については、少ないから良いと解釈することが出来ない点である。多様な活動に取組み、課題を乗り越えることは、大学生（特に初年次生）に重要なことであろう。

	4月調査		7月調査		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
進路選択	77.65	10.95	78.10	10.67	(n.s.)
自尊心	24.38	2.72	24.62	2.86	(n.s.)
社会性	54.39	10.73	55.78	9.93	$p < .01$
悩みの数	2.51	2.19	2.96	2.18	$p < .01$

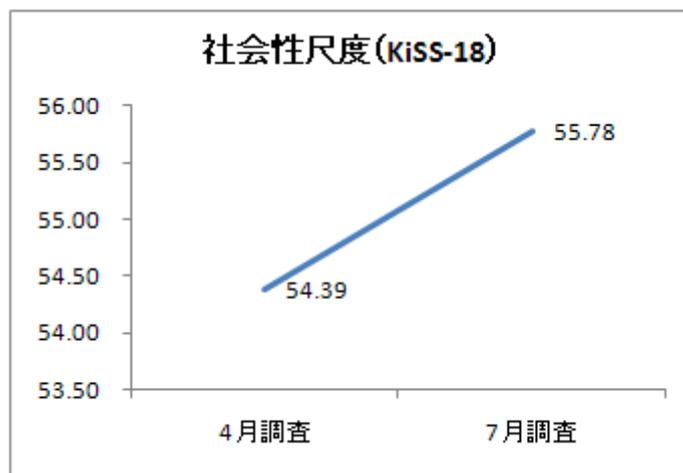
N=251



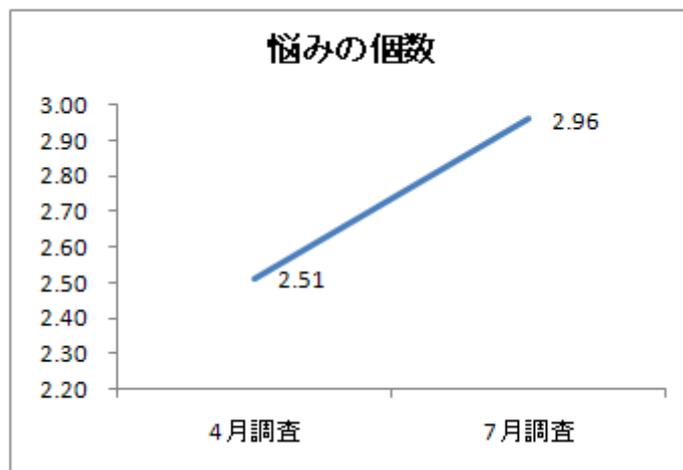
→有意差なし



→有意差なし



→7月>4月 ($p<.01$)



→7月>4月 ($p<.01$)

3. 2. 2 ルーキーズキャンプ参加の効果の分析

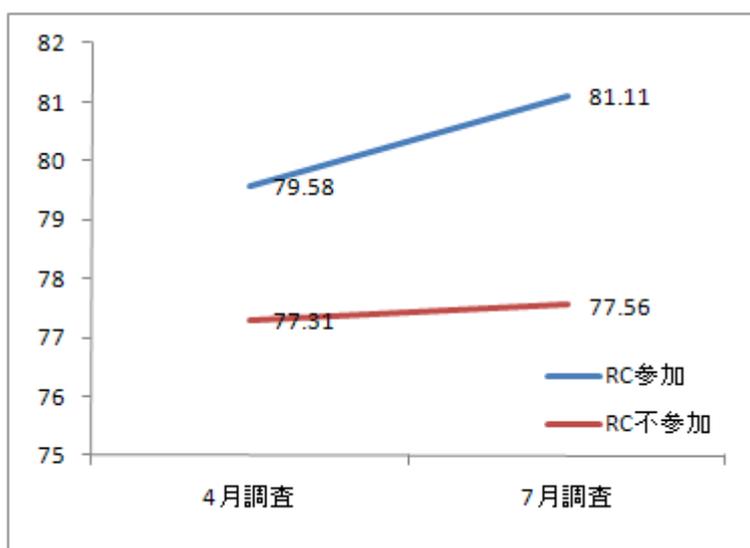
ルーキーズキャンプは、5月15～16日に余別クラスの宿で開催された合宿研修である。この活動は必修ではなく、希望する学生のみ参加する。なお、参加する学生は初年次生のみではなく、サポーター役として2年生以上の学生も参加した。分析方法は、1要因のみ対応のある2要因分散分析であった。各調査内容における分析結果（素点、分散分析表）とグラフを掲載する。

a) 進路選択に関する自己効力感尺度

進路選択に関する自己効力感尺度については、統計的な差は認められなかった。ただし、素点ではルーキーズキャンプに参加した学生の方が、やや向上していることが読み取れる。

進路選択	4月調査	7月調査	人数
RC参加	79.58	81.11	38
RC不参加	77.31	77.56	213

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:RC参加	546.210	1	546.210	2.71	0.101
誤差	50106.631	249	201.231		
主効果:調査時期	51.076	1	51.076	1.64	0.201
交互作用	26.120	1	26.120	0.84	0.360
誤差	7745.892	249	31.108		



→有意差なし

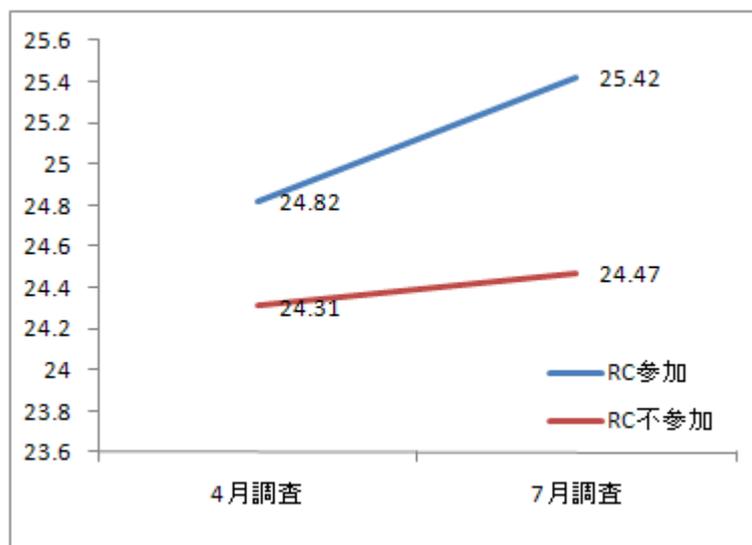
b) 自尊心尺度

ルーキーズキャンプの参加要因、調査時期要因の両方において、有意な差は認められなかった。ただし、両要因における有意確率が.10以下であり、有意傾向が認められた。この結果は、ルーキーズキャンプ参加者の自尊心が高く、4月よりも7月の自尊心が高い傾向を示す。

このことから、もともと自分自身を肯定的に捉える傾向の強い初年次生が参加していた可能性、また、ルーキーズキャンプの参加・不参加に関係なく7月には自分自身を肯定的に捉えられるようになる可能性、これらが示された。

自尊心	4月調査	7月調査	人数
RC参加	24.82	25.42	38
RC不参加	24.31	24.47	213

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:RC参加	34.251	1	34.251	2.790	0.096
誤差	3056.749	249	12.276		
主効果:調査時期	9.666	1	9.666	2.970	0.086
交互作用	3.069	1	3.069	0.943	0.333
誤差	810.497	249	3.255		



→有意差なし

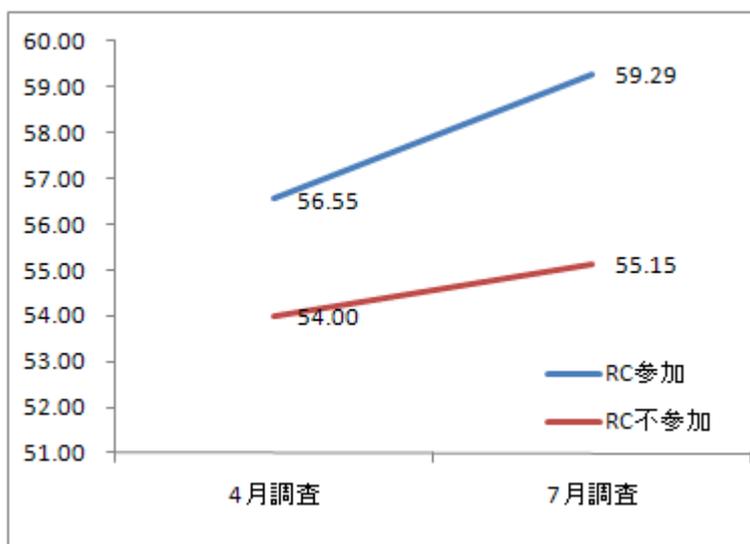
c) 社会性

初年次生の社会性の発達に関して分析を実施したところ、ルーキーズキャンプの参加・不参加、また、調査時期の両要因において主効果が認められた（RC 参加有無; $p<.05$, 調査時期; $p<.01$ ）。なお、交互作用については、主効果は認められなかった。

この結果より、ルーキーズキャンプに参加した学生は社会性が向上していること、また、4月の段階よりも7月の社会性が向上していることが示された。社会性は、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプの両取組みで、重視されている項目である。この結果は、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプが学生の社会性の発達に大きく貢献していることを示すものであるといえる。

社会性	4月調査	7月調査	人数
RC参加	56.55	59.29	38
RC不参加	54.00	55.15	213

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果: RC参加	721.016	1	721.016	3.925	0.049
誤差	45745.47	249	183.717		
主効果: 調査時期	244.205	1	244.205	8.762	0.003
交互作用	40.348	1	40.348	1.448	0.230
誤差	6939.628	249	27.87		



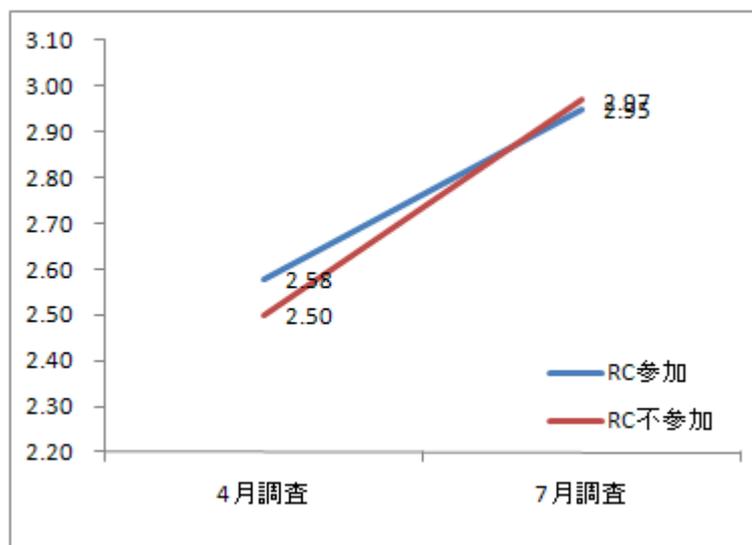
→RC 参加者 > 非参加者 ($p<.05$), 7月 > 4月 ($p<.01$)

d) 悩みの個数

悩みの個数については、ルーキーズキャンプ参加要因に主効果は見られなかった (*n.s.*)。その一方、調査時期要因に主効果が確認され、4月よりも7月の悩みの個数が増加していることが示された ($p < .05$)。悩みの個数の調査にあたっては、12項目の悩みについて [あり/なし] で評定を行わせた。本分析では、どのような悩みがどのように増加しているのかについては扱っていないが、学生の行動と悩みとの関連を検討する際には、それぞれを対応づけた分析が必要となることが考えられる。

悩み個数	4月調査	7月調査	人数
RC参加	2.58	2.95	38
RC不参加	2.50	2.97	213

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果: RC参加	0.052	1	0.052	0.007	0.935
誤差	1949.263	249	7.828		
主効果: 調査時期	11.194	1	11.194	6.279	0.013
交互作用	0.150	1	0.150	0.084	0.772
誤差	443.914	249	1.783		



→7月 > 4月 ($p < .05$)

3. 2. 3 性別と調査時期との関連について

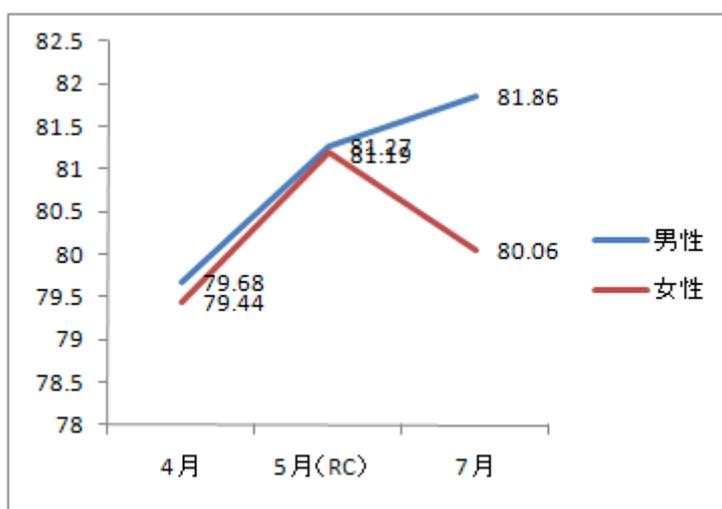
ここでは、総合科目Ⅱaとルーキーズキャンプの両方に参加した32名に注目し、その変化について分析を行った。参加者の性別間において、各調査時期の内容はどのように異なっているのだろうか。この点について、1要因のみ対応のある2要因分散分析（性別=被験者間要因、調査時期=被験者内要因）を実施した。以下に、各分析結果の詳細（素点と分散分析表、グラフ）を示す。

a) 進路選択における自己効力感尺度

分析の結果より、性別要因、調査時期要因の両者において主効果は認められなかった。総合科目Ⅱaの履修とルーキーズキャンプの参加を通して、進路選択における自己効力感尺度には違いが見られないことが示された。この理由として、調査対象が初年次生であるため、就職活動に対する実感や真剣さが、個人個人で異なっていることが考えられる。2～3年次学生を対象とした場合、また異なる結果が得られる可能性がある。このことから、年次を超えた縦断的調査を行う必要があるものと考えられる。

	4月	5月(RC)	7月	人数
男性	79.68	81.27	81.86	22
女性	79.44	81.19	80.06	16

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:性別	14.018	1	14.018	0.06	0.808
誤差	8411.570	36	233.655		
主効果:調査時期	59.671	2	29.835	1.12	0.331
交互作用	16.653	2	8.327	0.31	0.732
誤差	1915.470	72	26.604		



→男女間、調査時期間において主効果は見られなかった。

b) 自尊心尺度

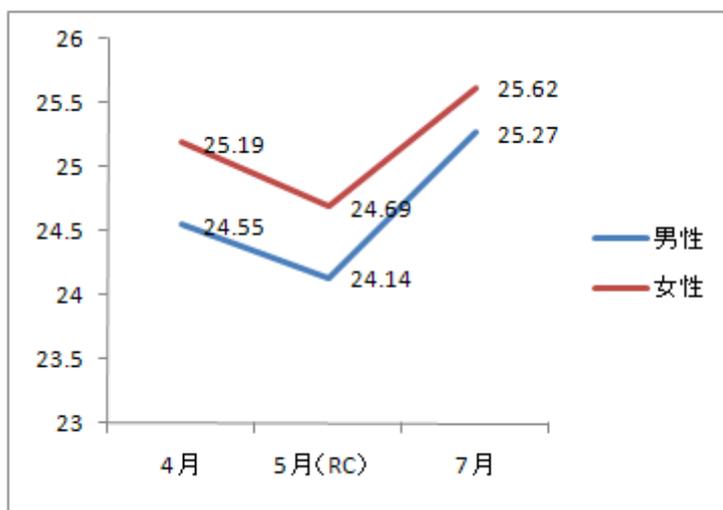
性別要因、調査時期要因の両者においても、自尊心尺度に主効果は認められなかった。この結果は、総合科目Ⅱaの履修とルーキーズキャンプの参加を通して、学生の自尊感情には違いが見られないことを示すものである。

しかし、ここで素点に注目すると、ルーキーズキャンプ直後の尺度得点が男性・女性ともに低下していることが伺える。ルーキーズキャンプの参加を通して多様な学生と交流し、協力して作業してすることによって、自分自身と他者への気づきが得られたことが伺える。また、4月の段階より7月の自尊心が高くなっている点についても、他者との交流を通して自分自身に肯定的な感情が生じたことを伺わせる結果といえるだろう。

ただし、いずれも統計的に有意な差ではなかった。このことから、より多くの被験者を対象とした追試が望まれる。

	4月	5月(RC)	7月	人数
男性	24.55	24.14	25.27	22
女性	25.19	24.69	25.62	16

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:性別	7.375	1	7.375	0.45	0.509
誤差	595.652	36	16.546		
主効果:調査時期	20.021	2	10.010	2.16	0.123
交互作用	0.407	2	0.203	0.04	0.957
誤差	334.383	72	4.644		



→男女間、調査時期間において主効果は見られなかった。

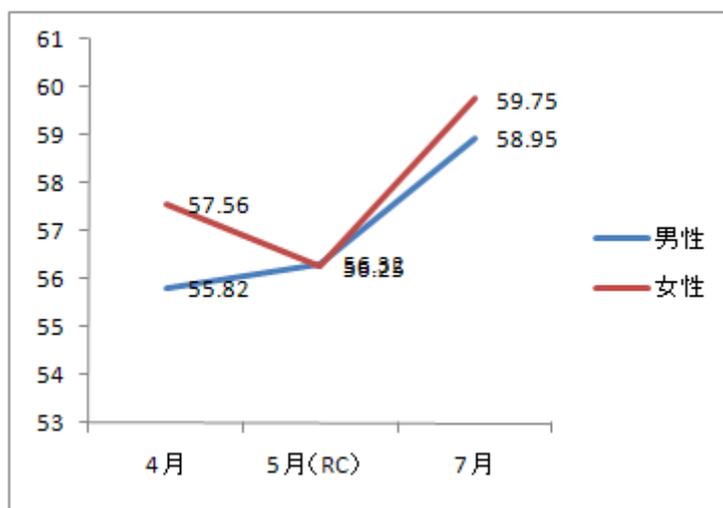
c) 社会性

初年次生の社会性の発達について、性別と調査時期の観点から比較を行った。その結果、調査時期要因に主効果が認められた ($p<.05$)。ここで、調査時期について多重比較を実施したところ、4月と5月の得点よりも、7月の得点が向上していることが示された ($p<.05$)。

この結果は、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプの参加を通して、男女ともに社会性が向上していることを示している。現在、あらゆる領域、あらゆる職場において、コミュニケーション力が求められており、協同で何かを達成することが求められている。この点について、本学では初年次から社会性を育成しており、明確な成果を上げているといえるだろう。

	4月	5月(RC)	7月	人数
男性	55.82	56.32	58.95	22
女性	57.56	56.25	59.75	16

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:性別	18.862	1	18.862	0.13	0.726
誤差	5440.585	36	151.127		
主効果:調査時期	205.823	2	102.912	4.10	0.021
交互作用	15.227	2	7.613	0.30	0.739
誤差	1808.352	72	25.116		



→調査時期要因で、4月、5月よりも7月が高い ($p<.05$)。

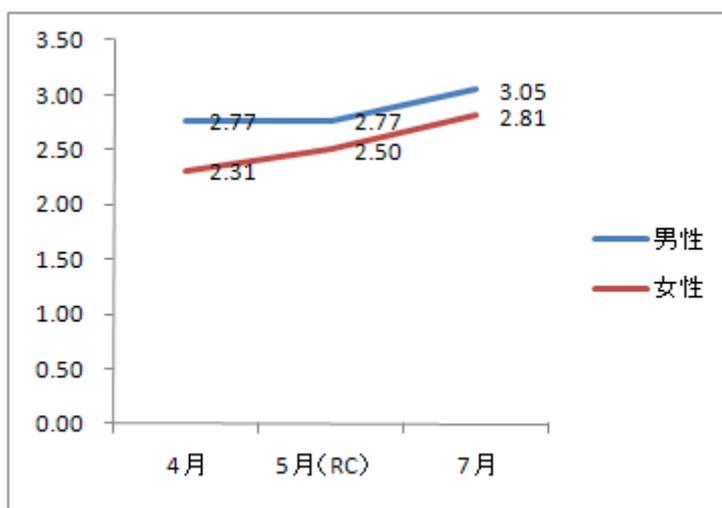
d) 悩みの個数

初年次生の悩みの個数について、性別間と調査時期間における比較を行った。その結果より、両要因において主効果は認められなかった。同様に、有意な交互作用についても認められなかった。

悩みの個数については、その調査方法が他の尺度と異なる。他の尺度では、4件法～5件法を用いているのに対し、悩みの個数では主な悩みを列挙し、当てはまるものを1点、そうでないものを0点としている。そのため、得点の範囲は0点から12点となり、他の尺度と比較して得点範囲が狭い。また、悩みの種類についても多様であることから、より詳細な分析を行うためには、それぞれの悩みを持つ学生の割合や、それぞれの悩みを場合分けした他の尺度得点の比較を行う必要があるものと考えられる。

	4月	5月(RC)	7月	人数
男性	2.77	2.77	3.05	22
女性	2.31	2.50	2.81	16

	SS	df	MS	F	有意確率
主効果:性別	2.881	1	2.881	0.23	0.632
誤差	444.356	36	12.343		
主効果:調査時期	3.010	2	1.505	1.50	0.230
交互作用	0.273	2	0.136	0.14	0.873
誤差	72.201	72	1.003		



→調査時期要因で、4月、5月よりも7月が高い ($p < .05$)。

3. 3 総合考察

これまで、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプについて、以下の3つの観点から分析を実施してきた。それぞれの分析内容と結果を以下に示す。

分析 1) 総合科目Ⅱ a の前後間での比較

→社会性の向上と、悩みの個数が増加

分析 2) ルーキーズキャンプ参加の効果

→社会性の向上と、悩みの個数が増加

分析 3) 性別と調査時期との関連

→社会性のみ上昇、性別での違いは見られない

3. 3. 1 社会性への注目

いずれの分析においても、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプの参加者の社会性が有意に向上していることが示された。この結果については、両科目の活動内容が顕著に結果に反映されたことが伺える。いずれの活動についても、グループディスカッションを中心とした活動であり、初対面の学生が協力して課題に取り組む必要がある。ここで、お互いに知らない状態から結果を導き出すには、どのようなプロセスが必要であるかを学習したことが予想される。

社会性（コミュニケーション能力）は、社会的に広く求められる能力である。この背景に基づいた時にも、初年次の段階から社会性の育成に取り組むことは有意義であるといえるだろう。

3. 3. 2 悩みの個数への注目

分析 1 と分析 2 において、悩みの個数が増加した結果が見られている。この点について、学生の持つ悩みは環境に強く依存しており、さらに、それぞれの悩みの強さについても異なることが予想される。一般的には、悩みがないことが望ましいといえるが、大学入学直後の初年次生に悩みがない方が不自然であろう。

現在、社会人基礎力の概念において、ストレスコントロール力が求められている。これは、ある程度の悩みやストレスに対して上手に対処し、自分自身を制御する能力と位置づけられる。今後、社会人となるに際して悩みに対する耐性をつけておくためにも、ある程度の悩みは避け

られないものではないだろうか。

3. 3. 3 その他の尺度について

今回の調査では、「進路選択に関する自己効力感尺度」と「自尊心尺度」に統計的な差が見られなかった。進路選択に関する自己効力感尺度については、今後の就職活動に強く影響を及ぼす直接的な尺度である。また、自尊心尺度は、進路選択に関する自己効力感尺度をはじめ、学生生活の多様な側面に影響を及ぼすものと考えられる。今回の調査結果では統計的な違いは見られなかったが、今後の学生生活で変化することが考えられる。より深い分析を実施するためには、縦断的な調査が必要であろう。

3. 3. 4 本分析の問題について

本調査は、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプに参加した初年次生を対象とし、これらの両科目の教育成果について検討するために実施したものである。その結果より、社会性と悩みの個数について、一定の知見が得られたものといえる。しかし、初年次生は、これらの2つの活動のみに参加しているわけではなく、他の科目やサークル・部活など、多様な活動に参加している。そのため、結果として社会性の向上が見られたとしても、それが単純に1つの科目によるものとは考えにくい。初年次生は、多様な活動を通じたなかで、社会性や将来への展望を獲得するのである。この点について、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプは、学生の社会性の獲得を支援するものではあっても、決定的な科目と位置づけることが困難であるといえるだろう。

より正確に総合科目Ⅱ a の教育効果を測定するためには、総合科目Ⅱ a の履修者と非履修者とを比較する必要がある。これは、手続き的にも困難であり、この手続きから得られる知見についても、教育活動にどのように貢献できるかが不明確である。このことから、総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプの教育効果に関して、社会性と悩みの個数について影響を及ぼす可能性があることと位置づけること、そして、多様な教育活動を複合的に計画・実施する必要があることが考えられる。

3. 4 本報告の結論

本調査の結果より、以下の点が示された。

- ・総合科目Ⅱ a を履修した学生は、社会性が向上し、悩みの個数が増加した。

- ・ルーキーズキャンプに参加した学生は、社会性が向上し、悩みの個数が増加した。
- ・両方の活動に参加した学生は、社会性が向上した。
- ・悩みの個数の増加は、大学生の時期に特有のものであることが予想される。
- ・総合科目Ⅱ a とルーキーズキャンプの取組みは、学生の社会性の向上に貢献している。
- ・「進路選択に関する自己効力感」と「自尊心」については、さらに継続的な調査が必要である。

【資料A：ルーキーズキャンプの自由記述】

- とても内容の濃い2日間でした。ありがとうございました。
- 現役大学生以外の方々も数多く参加していただいて普段聞けないような話も聞けて有意義だった。また、新入社員の方々を見て、私が勝手に社会人に対して思っていた「しっかりしていて、大人」というイメージが少しわかった。というもの、別に悪い意味ではなく、このままの自分を磨いていけば、いつか社会人として立派になれるのかなあという自信がついたということです。
- ディベートやグループワークが大事だと感じました。また積極的に参加する事が大事だと思いました。
- たくさんの社会人の方々と接する事ができて有意義な時間になりました。小樽商大だからこそできるイベントだったなと思います。これからもルーキーズキャンプをより大きなイベントとして進めていってほしいです。
- 商大はけっこう熱い！！
- プレゼンテーションとはどういうことなのかを学ぶことができる貴重な体験ができてよかったです。
- 僕は性格が悪くなった気がする・・・。
- ルーキーズキャンプでは、意識の高い同級生や、先輩や教員、OBの方々と一緒に活動できて、とても良い刺激になりました。私は、人前で話すのが最近苦手になってきていて、何とかしたいなと思っていたので、今回の活動を通して、改善していくきっかけにもなりました。また、先輩方からは、大学生活のアドバイスなどをいただくことができ、とても参考になりました。ルーキーズキャンプに参加して本当によかったです。ありがとうございました。
- 社会人の方々、商大の先輩の話を聞くことができ、貴重な体験ができました。自分もこれからルーキーズキャンプで得たことを活かして、大学生活を充実させたいと思います。ありがとうございました。
- たくさんの1年生と交流して、自分の欠点がたくさん見つかった。もう少しまわりの意見を理解すること、もっと積極的に自分の思っていることをみんなに伝えるということがこれからの課題だと思う。すごくいい経験になった。
- グループワークの大変さと完成したときの充実感を知ることができました。参加してよかったと思います。
- 先輩、教職員の方々にただただ感謝の気持ちを申し上げます。うまく表現できないけれど、心の中ではそう思っています。来年度以降も、できたらお手伝いしたいと思っています。良い経験ができて、とても有意義だったと思いますが、僕は徹夜などできないので寝てしまいました。関係者のみなさまお疲れ様です。ありがとうございました。
- プレゼンで、たくさん出た案を一つにまとめ上げるのが難しかった。

- グループワークのやり方を学べてよかった。
- 今までとは違った見方で社会人の方やコーチ、教職員の方と話ができたのでとても良かったです。
- 「自分のやりたいことを熱心にやれば道は開ける」そういう考えに少し自信を持つことができました。
- スピーチできる人はかっこいいって思った。
- とても楽しかった。この2日間で普段の大学生活では学べないことをたくさん学んだような気がする。普段、交流機会がなかなかない先輩等とも話したり相談することができてよかった。
- 大学生のうちには「挑戦」が大事だということがわかった。何事も自分が始めなければ、誰も助けてくれないので、どんどん新しいことに目を向けたいと思った。
- 今回、ルーキーズキャンプがきっかけで、ONEに入ることになったので、ボランティアなど頑張りたいと思います。また、来年もコーチとして参加したいです。
- プレゼンのやり方とか、話し合いとか、KJ方などの方法をたくさん知り、知識として深めることができました。自分は、もっと意見を発表できるようなものを身につけないといけないなと各班の発表を通して、強く思いました。これからプレゼンの機会があると思うので、今回のルーキーズキャンプのことを思い出して頑張ります。
- かなり、色々な面でおいしい。1日目の夜の懇親会の時間がもっと欲しかった。→深夜遅くまで起きてることになって、次の日が辛い。
- 部屋（コテ6）に虫が多かったので、事前に配られる持ち物リストに虫除けスプレーとか載せて欲しいです。
- プレゼン大事だと思った。悔しかった。
- 大学生活が楽しみになりました。
- グループワークやプレゼンなど短期間のうちでみんなうまくなっていてびっくりしました。また、モチベーション高い仲間と討論できて楽しかったです。
- 楽しくもあり、とてもためになったルーキーズキャンプでした。来年も参加したいくらいです！
- 先輩のアツイ話を聞いて、来て良かったと感じた。入学してまだ1ヶ月で商大の現状を知らないの理解に苦しむ場面もあった。
- 本当に色々な人たちと交流できて参加してよかったと思いました。
- 楽しい時間を過ごすことが出来ました。料理はうまく、温泉も最高でした。もう少しゆっくり動きたかったです。
- 先週の生協スクールより、ずっと気が楽でした。
- とても楽しかったし、後輩にすすめようと思う。
- 実際に集団でプレゼンを行い、それを伝えるには、どうすれば良いか、相手はどのような発表を望むか、それを考える良い機会になりました。

- 結局、コミュニケーションは必要なのが社会だが、それを絶対視しているような気がする。

【資料 B：総合科目Ⅱ a アンケート調査票（7月調査分）】

総合科目Ⅱ a アンケート「大学生活に関する意識調査」

このアンケートは、総合科目Ⅱ a に関して意識調査を行うものです。調査結果は、授業改善の手がかりとして使用され、厳重に管理されます。決して、個人情報が特定・公開されることはありません。リラックスして、深く考えず直感的に回答してください。

学籍番号： _____ 性別： 男性 ・ 女性 年齢： _____ 歳

ルーキーズキャンプ (5/15~16) に参加しましたか： はい ・ いいえ

1. あなたは以下の行動について、どの程度自信がありますか。当てはまるものに丸をつけてください。

		全く自信がない場合		非常に自信がある場合	
1		1	2	3	4
2	自分の能力を正確に評価すること。	1	2	3	4
3	就職時の面接でうまく対応すること。	1	2	3	4
4	一度進路を決定したならば、「正しかったのだろうか」と悩まないこと。	1	2	3	4
5	5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること。	1	2	3	4
6	もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること。	1	2	3	4
7	人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること。	1	2	3	4
8	自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと。	1	2	3	4
9	ある職業についている人々の年間所得について知ること。	1	2	3	4
10	将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること。	1	2	3	4
11	本当に好きな職業に進むために、両親と話し合いをすること。	1	2	3	4
12	自分の理想の仕事を思い浮かべること。	1	2	3	4
13	自分の将来の目標と、アルバイトなどでの経験を関連させて考えること。	1	2	3	4
14	就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること。	1	2	3	4
15	将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。	1	2	3	4
16	欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること。	1	2	3	4
17	自分の才能を、最も生かせると思う職業的分野を決めること。	1	2	3	4
18	自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと。	1	2	3	4
19	現在考えているいくつかの職業のなかから、一つの職業に絞り込むこと。	1	2	3	4
20	今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと	1	2	3	4
	両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること。	1	2	3	4

		全く自信がない場合		非常に自信がある場合	
21	いくつかの職業に、興味を持っていること。	1	2	3	4
22	自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること。	1	2	3	4
23	自分の将来設計にあった職業を探すこと。	1	2	3	4
24	何かの理由で卒業を延期しなくてはならなくなった場合、それに対処すること。	1	2	3	4
25	学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること。	1	2	3	4
26	将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること。	1	2	3	4
27	自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。	1	2	3	4
28	自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと。	1	2	3	4
29	卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要なのかどうか決定すること。	1	2	3	4
30	望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと。	1	2	3	4

2. 以下の文章を読み、当てはまるものに丸をつけてください。

		全然そう思わない		強くそう思う	
1	自分は、他人と同じくらいは価値のある人間である。	1	2	3	4
2	自分には、多くの望ましい素質がある。	1	2	3	4
3	全体的に、自分をおちこぼれだと思ふことがある。	1	2	3	4
4	ほとんどの場合、人並みに役割をこなすことができる。	1	2	3	4
5	自分には、得意なものがない。	1	2	3	4
6	自分自身に対して、前向きに考えている。	1	2	3	4
7	全体的に、自分自身に満足している。	1	2	3	4
8	もう少し、自分を尊敬できるようになりたい。	1	2	3	4
9	時々、自分が無意味に空回りしていると感じる。	1	2	3	4
10	自分がだめな人間だと感じることもある。	1	2	3	4

3. あなたの「資格」に対する考えをお聞きます。当てはまるものに丸をつけてください。

		全くそうではない			その通りである	
1	大学生のうちに、何かの資格を取得したい。	1	2	3	4	5
2	現在、資格取得に向けて勉強している。	1	2	3	4	5
3	資格を取得すると、就職に役立つと思う。	1	2	3	4	5
4	取得したい資格が、大まかに決まっている。	1	2	3	4	5
5	資格取得のために勉強することは、苦ではない。	1	2	3	4	5

→ 今後、取得したいと思っている資格があれば、資格名を記入してください。

アンケートは裏面に続きます。

4. 以下の文章を読んで、自分にどれだけ当てはまるか回答してください。

いつもそうでない

いつもそうだ

1	他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	1	2	3	4	5
2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	1	2	3	4	5
3	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	1	2	3	4	5
4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	1	2	3	4	5
5	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	1	2	3	4	5
6	まわりの人たちのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	1	2	3	4	5
7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	1	2	3	4	5
8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	1	2	3	4	5
9	仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。	1	2	3	4	5
10	他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。	1	2	3	4	5
11	他人を助けることを、上手にやれますか。	1	2	3	4	5
12	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	1	2	3	4	5
13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	1	2	3	4	5
14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	1	2	3	4	5
15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	1	2	3	4	5
16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	1	2	3	4	5
17	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。	1	2	3	4	5
18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	1	2	3	4	5

5. あなたは、現在の生活の中で、どのような悩みがありますか。差し支えなければ、当てはまるものにいくつでも丸をつけてください。

- ①自分の健康について ②自分の性格について ③自身の経済状況について
 ④生活環境について ⑤部活動やサークルについて ⑥友人との人間関係について
 ⑦先輩や後輩との人間関係について ⑧家族について ⑨恋愛・結婚について
 ⑩大学での学習について ⑪進路選択・就職活動について ⑫特に悩みはない

6. 総合科目Ⅱaに対する感想がありましたら、自由に記入してください。

[]

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

3. 5 ルーキーズキャンプ2010 自由記述アンケート結果

[質問1] 実際に参加したルーキーズキャンプは、事前に予想していた通りでしたか。それとも予想と異なりましたか、それをどのあたりに感じたかも合わせて記入してください。

- 想像以上に先生やOBと話せた
- ご飯がおいしい、友達ができる、グループワークも楽しい。予想以上
- 予想以上に楽しすぎた。
- 最初は予想よりも新入生に元気がないなあ、と感じたけど、後半は予想していた通りのパワーがあつて満足です。
- 予想通りの非常に有意義な研修でした。ただ予想外だったのはむしが多かったことです。
- たくさんの人々と交流し、初対面のメンバーでプレゼンの準備をしたりと、予想していたとおり以上の経験ができました。
- 予想していたものよりも内容が濃く、一つ一つの研修において自分の頭をフル回転することが多かったのもとても有意義なものに感じました。
- 異なる。もっと硬いものだと思っていた。
- 期待通りの盛り上がりが見えたと思う。合宿のイメージは研修施設でもっと真面目な話や作業をすと思っていたので、全体的に楽しめて笑ってばかりだったのが意外だった。
- 予想していたより先輩とお話できませんでした。
- 予想とは若干異なっていました。色々な世代の人との交流がとても多かったので良かったです。
- 予想とは異なっていた。もっと固い感じの雰囲気でおこなわれるものだと思っていた。
- 予想通りで、OBの方々と交流をはかれてよかった。
- 夕食はバーベキューであると、勝手に思い込んでいました。でも違いました。グループワーク、プレゼン、グループワーク、プレゼン…の無限ループの实在と、準備時間の短さに焦りましたが、3回プレゼンできて、次第にしたいによりものになるのを見て、ああ、こんな感じなのかと予想通りだと思いました。
- 主に泊まりを楽しみにしている人たちだけなのではないかと思っていたが、皆熱かった。
- 予想通りのところと、異なったところがありました。グループワークがあんなに難しいと思っていませんでした。
- 思っていた以上に、1年生や、OBの方たちとたくさん交流できた。
- 予想していたより楽しかった。
- 予想とは異なった。いきなり説明なしでプレゼンの準備にとりくんだ点。
- 異なる。予想よりも充実していた。
- 予想以上。来るべき。

- プレゼンが予想以上に難しかった。
- プレゼンについての研修が多かった点で、予想通りでした。
- プレゼンばかりだと思ったんですけど、交流する時間があって、予想とは異なりました。
- はい。ただ予想より楽しかったです。
- 予想以上に真剣だった。
- コーチ、ゲスト、教授方が真剣に我々のプランに意見を出してくれたことが、厳しいかとは思ったが、役に立った。
- 予想以上にスケジュールがびっしりで本当に充実した2日間を過ごせたと思う。
- 予想とは違って、こんなに本格的にプレゼンをするとは思っていませんでした。でも、とても楽しかったです。
- 予想していたよりも楽しかった。
- 予想とは違っていました。講義のようなものを聞く時間が長いと思っていました。
- 特に明確には考えておらず、行事を通じ、何か1つでも得られるものがあればと思い参加しました。
- 予想していた通り、積極的な人達が多くて、とても自分にとって良い刺激になりました。
- 良い意味で予想を裏切られました。グループでのディスカッション、OBさん、先生方との談話、貴重な体験でした。
- 予想通りわいわいと楽しかったです。
- もっと堅苦しい大人とかがたくさんいる感じだと思っていましたが、全くそんな事はなかったです。
- 何も予想していなかったけど、成長できたと思う。
- 予想していた通りの雰囲気、でもテーマ「20年後の商大」は難しかった。
- 予想というより、噂よりもすごく楽しかった。
- 予想以上に先生達があつかった。
- 予想とは異なった。思ったよりも友達ができた。
- 予想と違ってグループ行動中心ですごい楽しかった。
- 夜の懇親会が熱かった。
- 予想とは異なりました。もっと企業の方とふれあいながら作業が進んでいくものだと勝手に思っていました。
- もっと固くてつまらないグループワークかと思っていたけど、案外面白かった。
- 最初もっと固いイメージだったけど楽しく学べる感じで良かった。
- 予想より楽しく充実したものだった。
- だいたい予想どうりだったが、他のクラスとの交流が少なかった。
- 思ったより胃が痛まなかった。
- 全然違いました！もっとかたくるしい内容を想像していたのですが、アットホームな雰囲気がすご

くよかったです！

- 研修内容は予想以上に濃いものだった。班ごとの交流が多くて、他班とももう少し交流したかった。
- 予想では、先生達の話聞くのが主で、プレゼンは少ししかしないかと思ってました。グループで何かを考えたりプレゼンしたりするのばかりだったけど、初めての経験だったのでためになったし楽しかったです。
- 予想以上に楽しかった。もっとメンバーとか内容もまじめっぽい感じだと思ったが全然違った。
- 予想していたよりも取り組みやすい研修で楽しかったです。
- こんな感じかなと思ってはいました。
- 予想よりも良い意味でゆるい集まりで楽しめました。
- 予想より楽しいことが多かった。
- 予想通り。懇親会での語り合い。
- 堅苦しい講演が多いかと思ったが、実際はそうではなかった。
- 虫が多かった！
- 予想したよりも明るく楽しかった。

[質問2] 今後の大学生活に具体的な目標はありますか。それはルーキーズキャンプに参加して変化しましたか。

- 変化はしていないがやりたいことは増えた
- 自分について考える時間を持つこと。
- 積極的に色々なものに参加したい
- 今までにはやりたいことがあってもためらっていたけど、この2日間でやりたい事は全てやろうと決めました。絶対に留学します！時間は作るものですね。
- 将来やりたいことを1年生のうちに見つける。参考になったと思う。
- 勉強とサークルの両立がこれまでの目標でしたが、ルーキーズキャンプのコーチ陣のように、色々なことに挑戦するのも良いなと思いました。
- もっと自分のやりたいことを思いっきりやって、自分自身というものについて知ることを進んでやろうと思いました。ルーキーズに参加して、大学生活をもっと楽しもうと思いました。
- 特になし
 - ・ もう少し人の輪を広げたいこと。・ もっと商大の施設などを使っていこうと思う
- 先輩方の話を参こうに、これから具体的に考えてみたいです。
- 自分の言いたいことをちゃんと伝えるということ。
- ある。変化はなし。

- まだないが、先輩たちの話をきいて、真剣に考えてみようと思った。
- 勉強はもちろん、机上の学習以外のことにもより多くの力を入れたいという思いが今回の参加でより強くなりました。
- あるけど変わりません。
- 資格を取りたいと思っています。
- もっと積極的に自分から意見を発する。→あまり変化しなかった。
- まだないです
- 新しく始めることをやりとおす！ルーキーズキャンプで確固たるものになった。
- もう少し自分のやりたいことをしぼって勉強すること。
- 特になし。
- 就職に有利になるような資格は取りたいと思う。
- 優秀な成績を取り、進学する。
- 就職に向けて、もっと自分を表現できるような人になりたいです。
- はい。変化はないです。
- ある。変化なし。
- 新規性のあることを考案したい。
- 参加したことによってもっと新しいことに挑戦しようと思った。サークルをかけもちしようと思った。
- ボランティアなどを通じて、多くの人と関わりをもちたいです。ルーキーズキャンプに参加しなかったら、このような考えはなかったと思います。
- ルーキーズキャンプに参加して、目標を実現したくなった。
- 自分の経験値を高める為に、多くのことに挑戦したいと思っています。今回もその1つです。TOEIC 730突破（1年のうちに） ・自分のスキルup、プレゼン能力、質問能力等々
- とにかく大学時代にしかできないことに、たくさん挑戦していきたいです！
- 入学する前にいろいろあった目標が1カ月、大学生活を過ごしてきて、見えなくなってきていました。ですが、様々な話、体験を通し、自分の甘さ、未熟さを痛感し、これから大学生活を過ごす上での大きなきっかけとなりました。これから目標を定めていきたいと思っています。
- 特になし。
- もっと大人な対応ができるようになりたいと思いました。
- ボランティア活動に積極的に参加する。思ったことを行動に移す。
- 具体的な目標はないが、ルーキーズキャンプで得たプレゼンに参加する（発表する側、聞く側）という経験を生かせるようにしたい。
- 何か1つ大きなことをやりとげたと思うようになりました。

- 変化した。メラメラ燃えてきました。
- 様々なイベントに積極的に参加したいと思いました。
- 熱い気持ちを教わった。やりたい事をやるべきだと思った。勉強する。
- 特になし。
- 目標を持って学びを追求していこうと思いました。(OBさんの話をきいて)
- 色々なことに挑戦する。参加によりさらに強く思った。
- とくにはないです。
- 変化はしましたが、書きません。
- はい！
- 有意義に、積極的に、楽しい生活を送りたい、という風に変化した。
- 部活1つだけ入ってその世界にこもるのではなく、複数の部に入り、人間関係を広い範囲で持ちたい。
- 英語と中国語を頑張って勉強して、中国に留学する！変化してない。
- 留学したいと思っていましたが、先生の話などをきいてもっと詳しく調べようと思うようになりました。
- 何かやろうと思います。
- 人に何かを伝えるスキルをさらに高めたいと思いました。
- 部をがんばる。変化はない。
- 「自分が変わること」→いろいろな面で、常に心に 変化した。
- よく分からなくなってしまった。
- たくさんの方の前で話ができるようになること。

[質問3] ルーキーズキャンプに参加したことで得たものはありますか。あるとしたら、それはなんですか。

- プレゼン、ディスカッションの方法、人前で話すことへの抵抗が少なくなった
- 友人やグループワークについて。
- 友人や発言の大切さ。パニパニ
- パワーのある友人ができました！チャレンジする勇氣。
- 仲間と協力し合い、問題を解決する力。
- プレゼンに向けたグループワークで、恥ずかしがらずに他人に自分の意見を伝える伝える力がついたと思います。
- 人の意見を最後まで聞いて否定的な観点で判断するのではなく、その意見そのものを受けとめるこ

とを学んだ。

- 新しい友達
- ・友人・積極性
- 社会人の方々の話を今まで聞く機会がほとんどなかったので、そのような場をもてて、大変貴重な時間を過ごせました。
- コミュニケーション能力
- プレゼンテーションの方法や発想のコツ。
- これからの大学生活をどう過ごすか計画を立てることが大事だということ。
- プレゼンの方法について、たくさんのアドバイスを得ることができ、大変役立ちました。
- KJ法は色々な分野で役に立ちそうです。
- 新しい友達と協力することの大切さ。
- まわりの人たちのいろいろな考え方を得られた。
- 意見の出し合い方
- 人間関係の広がり
- 友達、初対面の人との交わり方
- 友達。
- 友達、プレゼンのしくみ？
- 全く意見の出ない場で、発表をまとめる力。
- プレゼンの発表などの仕方。
- 自分人間性について、考える機会を得ました。
- ある。やる気のある人に会えたこと。
- 発想力、プレゼン力。
- 教員や先輩と関わることで、自分の大学生活はまだまだ充実させることができると思った。
- プレゼンでの発表の仕方。あと、忙しくてもサークルとか、色々なことをやってみようっていう気持ちになりました。
- プレゼン能力、仲間。
- 自分達の考え方を伝えることの難しさを知ったこと。
- 自らのプレゼン能力の程度を知ることができ、改善の余地は、まだまだあると改めて感じました。
- 人の話と自分の意見が合わない時に、どうやって話をまとめていくかということ学びました。
- 行動力の大切さ
- 楽しく生きること
- プレゼンの仕方を少しわかりました。
- 自分の意見を言う。相手に意見を聞く。

- 人に考えをうまく伝える方法を考える難しさ。その時の話し方のポイント。友達…を得ました！
- 4年間で出来ることは限られているので、早く動き出すこと。
- 人前での話し方。
- 菊池先輩に会えたこと。
- 友達
- 熱い気持ち！プレゼンの大事さ！社会や就職のことを少し理解した。
- 友達、プレゼンテーションの仕方
- 自分から事を起こすこと。
- 意欲やプレゼン能力
- 友達、グループディスカッションのやり方
- スピーチ力
- 友人、緊張、達成感です！自分に足りない、至らないものを痛感しました。
- 自分から行動する気持ち、自分が変われば周りも変わる、と教えられた。
- グループワークの仕方と友達
- 私は何かやる時に、一生懸命やることをはずかしがって、結局は行動してなかったのですが、先輩の話をきいて、一生懸命やることは、すばらしいことだと思うようになった。
- みんなの前に立って自分達の意見を発表することに抵抗感が減って、すこし楽になりました。
- 友達
- 仲間と協力して何か1つのことをやりとげること。
- 新しい友、プレゼン能力（少し）。
- ちょっとした未来のビジョン
- 人生経験という名の何か。
- 友達

[質問4] ルーキーズキャンプをもっと良いものにするにはどうすればよいと思いますか。

- 施設を貸しきる
- グループとコテージの班はいっしょにすべき
- バスレクをもう少し楽しく。
- 今年のでなかなか大満足です！！虫はいない方がよいです。
- 虫がいやだったので虫の少ないところがいい。でもごはんはとってもおいしかった。
- とりあえず虫のいないところで実施するべきだと思います。
- もっと懇親会でゲームとかをして一年生で固まらず、社会人、教職員方ともふれあえるようにやっ

てほしいです。

- 散策をなくす。こんしん会をもう少し設定を細かくして用意してほしかった
- 仕方ないことだとは思いますが、タイムスケジュールにももう少し余裕がほしかったです。
- 学生の人数を増やす。
- 一日中話せるようにがんばってほしい。もう少しえんしゅう時間がほしかった。
- もっと時間にゆとりをもって、スケジュールを組むといいと思う。
- 反省を有効活用し、次年度に役立てるのが、やっぱり一番だと思います。
- ケータイの電波をどうにかする。
- 指示を正確にし、けいたいを使えるようにすること。
- もう少し指示を正確にしてほしい。
- 人数を増やす
- OBのお話をもう少しふやした方が。
- ゴールデンウィークに2泊3日にする。
- ほかの班と触れあえるようにする。
- 1年とコーチたちの交流が思ったよりなかったので増やした方がよい。
- 虫のいない環境で研修する。
- 交流を深めるために炊事があれば嬉しいです。
- auの電波状況が良くないので、場所の変更も検討していただいです。
- 事前にプレゼンテーションについての説明が欲しかった。
- これ以上良いものはない。
- 先輩方との交流がもっとできる機会が欲しい。
- 他のグループとの交流が上手くできなかった人もいると思うので、参加者全員で出来るレクリエーションを何かひとつ加えたほうがいいと思いました。
- 全員が一人一人顔を合わせることをするといいと思う。
- 懇親会でいきなり話し始めるのは難しいので、フォローがあったらいいと思いました。
- ルーキーズキャンプのコンセプト等を説明会で、より細かく明示して頂ければ、より一層目的意識を持って参加できると思います。
- グループわけしてあったので、他のグループとの関わりをあまりもてなかったのが残念なので、もっと交流したいです…
- 一年交流の時間が欲しい。
- 十分すばらしいと思います。
- ない
- もっと考える時間がほしかった

- グループワークをさせるときに段取りをよくしたらもっとまとまる。
- 講演でもう少しまじめなはなしをする。
- 夜に作業をやらせてください。
- 宣伝をもっとする。
- 内容重視なのかプレゼン重視なのかはっきりしたほうがいい。
- けっこう自由に意見を求めることが多かったので、もう少し強制して緊張感を持たせるといいと思います。
- もっとルーキーズキャンプを売り込んだらいいと思います。
- 充分すばらしい
- 楽しかったです。
- すごくいいです！
- 今回すごく充実していた。文句なしです。
- 夜遅くまで起きているのではなく、しっかり睡眠をとれるようにすればいいと思う。しっかり寝ないと2日目集中できない。
- 名刺に写真をつけたほうがいいと思う。
- コテージの虫を対処してほしいです。
- 散歩する時間は余計かも。
- 夜の時間は次の日もやる可能性があるということで、あまり騒げなかった。
- 参加者の感想を後輩に伝えてみては。
- 懇親会の時間を増やす
- 出身校やサークルをバラバラにしてグループ分けすること。
- 虫についての事前告知。
- 特になし。

〔質問5〕 来年のルーキーズキャンプに「コーチ」として参加したいと思いますか。理由も記入してください。

- 自分のためになったと思うので今度はそれを作り、教える側に立ってみたい
- 思いません。大変そうなので。
- 都合が合えば。
- 参加したいです！この空気(熱気)に毎年触れてたいです！！
- 参加したいと思わない。虫がいっぱいいるから。
- 今年のコーチのように、皆をサポートしたり、自主的に行動する力はまだ私には足りないと思うの

で参加は難しいです。

- はい。後輩をサポートしてケアする力をみがきたいから。
- 思う。楽しそう。
- 自分の予定と状況が許せば参加したいです
- 自分が何か後輩に伝えたいことができれば参加してみたいです。
- 今のところはないです。
- 思わない。コーチにきている人たちは考え方などがすごく自分が来年そんなふうになれる自信がない。
- 今の段階ではしたくないです。というのも、まだ自分で「これをやった！こんなことをしたらよい！」と言えないので。
- 緑丘祭もそうですが、自分は参加するよりも、運営する方が好きなので、機会があればぜひ参加したと思います。
- 自分なんかが出て良いものかと不安になります。
- 周りの人がすごい人だと迷いますが、機会があれば興味あります。
- 自分にできる自信がありません。
- いいえ。まだ教えられるようなものがないから。
- 参加したい。後輩をサポートしたいから。
- まだわからない
- 今は未定。用事がなければ。
- 思わない。コーチとしての役割をはたせなさそう。
- いいえ。大変そうだから。
- 1年生と触れ合いたいので、参加できたらいいなと思いました。
- はい。自分のルーキーズキャンプの経験から、将来の後輩に何か伝えたいと思います。
- わからない。
- 時間あれば参加したい。
- 新入生にやる気を与える先輩として参加してみたいとは思いますが、行動にうつせるかわからない。
- 参加したいです。今回、ルーキーズキャンプに参加して、すごく多くのことを学べたのでそれを後輩にも伝えていきたいです。
- 思う。楽しかったので、後輩ができれば、その人たちにも良さを知ってもらいたい。
- 先輩のフォローがディベートをより良くしてくれたので、一年でそこまで成長したいと思うからです。
- はい。今回参加してみて自らの能力の認識ができました。私自身、人を誘導する良いアドバイスができませんので、経験を積みたいと考えております。

- 参加したい。今年の「コーチ」のみなさんのように、もっと頼りになるキラキラとした先輩になって後輩に接することができることを1つの目標としてやっていきたいです。
- わからない。
- 今年のコーチ陣のようにうまくまとめることができないので、参加したいとは思いません。
- 思いません。忙しいと思うので。
- 今回は発言が少なかったので、また参加してみたい。
- したい。自分の班のコーチがとても尊敬できる人だったので。
- したい。2、3年になっても得るものがあると思うから。
- 参加したい。菊池先輩に教わったことを、次の年の1年生に伝えたいから。
- 今回楽しかったので、新入生のために参加したいです。
- 参加したい。社会人との会話でかなり学んだので、二年目にも聞きたいし、一年生にも大切さを教えたい。
- 思いません。つかれました。
- やりたいです。すごく楽しかったし、来年の新入生にもやる気を与えたいです。
- コーチの方々を見てとてもすごいなと思ったので少しコーチに興味を持ちました。
- 思います（暇があれば）。充実しているから。
- 面白いと思う
- したい。面白かった。企画作りなどが好きなので、もっと関わりたい。
- 興味あります。私達のチームのコーチが最高でした。尊敬します。
- この今の気持ちを忘れなければ、参加したい。
- 参加したい。人と何かを考えるのが楽しかったから。
- 今は思わない。
- コーチできる自信がついてら参加したいです。
- 来年にならないとわかりません。
- いいえ。
- コーチはやめときます。
- 思う。色々なコネやチャンスを増やせそうだから。
- はい。新一年生と接したいから。
- 参加したいと思うけど自分には難しいと思う。

[質問6] その他、感想などを記入してください。

- パニパニゲームは楽しいよ 露出は楽しいよ

- ルーキーズキャンプにこれで最高でした。
- 時間に追われたから、だらだらしないでプレゼン作り→発表とできたのかもしれないですけど、個人的にはお風呂にゆっくり入りたいです。(笑)
- 問題解決に大切なプレゼンテーションスキルや団結する力を得られてとってもよかったです。
- ずっと夜遅くまで友達やコーチと話したりして、とても楽しかったです。これからもずっとルーキーズキャンプを続けてほしいです。
- 有意義な時間でした。ありがとうございました。
- 貴重な体験ができました。ありがとうございました。
- 非常に楽しく2日間をおくることができた。
- 先輩、OB、先生方、職員の方、たくさんの方が1年生のために、何かしてあげたいという気持ちをもってくれていることが嬉しかったし、2日間お世話になったので感謝したいです。
- 2日間お疲れ様です。ありがとうございました。
- たのしかったです。おつかれさまでした！
- 2日間ですが、あっという間でした。
- ルーキーズキャンプに参加できて良かったです！！
- 予想以上に面白かったです。今後は色々な経験をして様々なことを学びたいと思いました。
- 楽しかったです。
- 非常にプレゼン力（人に伝える力）が足りないと感じた。プレゼン力をupしていく。
- ルーキーズキャンプに参加して考え方を前向きにすることができた。
- 2日間ありがとうございました。コーチの方々の姿を見て、今後の自分に必要な能力を知ることができました。具体的方法は確定していませんが、この1年の計画を立て実現したいと思います。
- 今回のルーキーズキャンプでは、先輩方がとても的確なアドバイスを下さり、勉強になることがたくさんありました。自分も来年そのようになれるのかは疑問ですが、意識の高い人達とふれ合うことのできる素晴らしい企画だと思いますし、自分のスキルアップにもつながると思いますし、ルーキーズキャンプの積極的な雰囲気がとても良いと感じたので、是非参加したいです！
- 先輩方が、とてもしっかりしていてたった1、2才の差くらいでしかないとは思えませんでした…。行動力。本当に大切だなと強く感じました。思っているだけじゃ何も変わらない。もっと積極的に行動し、充実した大学生活を送っていきたいと思います。ありがとうございました。
- とても楽しかったです。
- 成長させていただきありがとうございました。
- 来て良かったと何度も思いました。たのしかったです。ありがとうございました。
- 参加して良かったです。
- Bチームだったんですけど、A、Cチームとはコテージが一緒の人としか仲良くできなかったのが

心残りです。

- 本当に楽しかったです。もっと講義中心で堅いイメージだと思ってたので、予想してたよりもはるかに楽しかったです。
- せっかく考えた案を発表できなかったのはかなり悔しかった。でも何か問題があったと思うのでそれを理解して今後の成長につなげたい。
- 虫の対処法を考えて欲しいです。
- 先輩達の話聞いて、大学生活が楽しみになり、何か自分からやってみたいと思いました。
- とても充実していて楽しかった2日間でした。ありがとうございました。
- 食事と風呂がよかった。先生方の雰囲気が好きです。
- 参加して、本当によかった！！
- 思ったよりも内容が濃く楽しかったです。今後、プレゼンをする機会に生かせそうなことが色々あったので良かったです。
- 普段なかなか交流できない先生や先輩と沢山話せて良かったです。
- 楽しかったです。
- 短い時間ではあったものの、何か色々なものを得ることができ、とても充実した時を過ごせたと思います。ありがとうございました。
- 先輩達が話しかけ易かったです。よくしてくれました。参加して良かったです！
- お疲れ様でした。
- 男子と女子のコテージの場所を反対にして欲しい。女子に亀虫退治は難しいです。

第4章 FD 活動報告
(專門職大学院教育開発部門)

第4章 FD活動報告

4.1 専門職大学院教育開発部門の活動状況

4.1.1 専門職大学院教育開発部門の活動

平成 22 年度の専門職大学院教育開発部門会議は 5 回開催された。主な審議内容は以下のようである。

- ・平成 22 年度活動方針について
- ・教育業績評価のためのアンケートの実施について
- ・平成 22 年度授業参観の実施について
- ・平成 22 年度授業評価アンケートの実施について

4.1.2 研修会の開催状況

専門職大学院教育開発部門では、教員対象の FD 研修会を前期開講科目については平成 22 年 1 月 24 日に、後期開講科目を含めた通年分については平成 23 年 4 月 6 日に実施し、授業評価アンケートの集計結果報告及び分析結果の検討並びに GPA を用いた成績評価の検討が行われた。

4.1.3 授業評価等の実施状況

(1) 平成22年度「授業評価アンケート」の実施

専門職大学院教育開発部門では、平成 22 年度の前期及び後期の 2 回、開講しているすべての授業科目を対象に授業評価アンケートを実施した。授業評価の集計結果は、対象授業科目名、担当教員名を含めて公表した。平成 22 年度のアンケートの概要、分析等は、第 5 章に掲載している。

(2) 教員相互の授業参観の実施

専門職大学院教育開発部門では、教員相互の授業参観を前期・後期に実施した。

授業参観は、これまで授業科目 1 科目毎にアントレプレナーシップ専攻の専任教員 2 名が出席することを原則として同僚による同僚評価を行い、対象となる科目は実践科目を除く 34 科目とし、半期に 3 科目を評価対象として前期は 6～7 月、後期は 11～12 月に実施してきた。参観後に授業担当教員との懇談を行い意見交換後、授業参観記録シートを作成している。

(3) 教員による自己評価の実施

専門職大学院教育開発部門では、平成 22 年度に開講されたすべての授業科目の担当教員を対象に自己評価を実施した。

自己評価は、教育活動実施記録と学生による授業評価、教員による同僚評価（実施された場合）に基づいて行われた。評価項目のうち、「自己評価レポート」は、教員氏名、担当科目名とともに第 5 章 5. 5 節に掲載している。

4. 1. 4 FD活動報告書「ヘルメスの翼に」第 8 集への掲載

FD活動報告書「ヘルメスの翼に」第 8 集に、大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻における FD 活動について『ビジネススクール編』として掲載した。これは、大学院アントレプレナーシップ専攻教育開発部門が平成 21 年度に活動した内容をまとめたもので、また、平成 21 年度「教育評価」の結果と分析の報告書も兼ねている。

第5章 平成22年度「授業評価アンケート」集計結果と分析

第5章 平成22年度「授業評価アンケート」集計結果と分析

専門職大学院教育開発部門委員
准教授 保田 隆明

5. 1 質問項目

アンケートは、15項目からなり、それぞれの質問項目は以下のようである。なお、質問項目13, 14, 15は自由記述である。

- 1 シラバスにおける授業内容の記述は適切でしたか。
- 2 E-learning Systemの活用等、授業時間以外での教員の指示は適切でしたか。
- 3 授業中の教員の説明（話し方の明瞭さやパワーポイントを含む）は分かりやすかったですか。
- 4 授業で用いられた題材や資料は、授業を理解する上で適切なものでしたか。
- 5 グループディスカッションから得るものがありましたか
- 6 プレゼンテーションや全体ディスカッション（質疑応答を含む）から得るものがありましたか
- 7 事前課題は、授業を理解する上で役に立ちましたか。
- 8 事後課題ないしレポート作成から得るものがありましたか。
- 9 課題・レポート返却のタイミングや、コメントは適切なものでしたか。
- 10 授業の目的と授業の内容は整合性がとれていましたか。
- 11 成績評価の方法・基準（周知の仕方を含む）は適切なものでしたか。
- 12 この授業に満足できましたか。
- 13 この授業の良かった点（5つ以内）を記述してください
- 14 この授業について、こうすれば良かったという点（5つ以内）を記述してください。
- 15 その他お気づきの点がありましたら自由にお書きください

なお、アンケートは各質問項目について5段階評価を行っており、当該授業に該当しない質問項目については記入しないよう注意書きしている。以後の分析において表記を簡潔にするために各質問項目を表1のように表記することにする。

表1 質問項目の表記法

質問項目	1	2	3	4	5	6
表記法	シラバス	指示	説明	資料	グループワーク	ディスカッション
質問項目	7	8	9	10	11	12
表記法	事前課題	事後課題	コメント	整合性	成績評価	満足度
13	この授業の良かった点（5つ以内）を記述してください。					評価点
14	この授業について、こうすれば良かったという点（5つ以内）を記述してください。					改善点
15	その他お気づきの点がありましたら自由にお書きください。					自由記述

5. 2 アンケートの集計結果

アンケートは平成 22 年度に開講した 42 科目中 39 科目⁽¹⁾で実施されており、各科目の回答者数は表 2 のようで、アンケートの回収率は 94.5%であり、昨年度の 93.68%よりやや改善した。

表2 アンケート実施状況

	科目群	科目名	担当者	履修者数	回答者数	回収率
1	基本科目	マネジメントと戦略	李 濟民	37	39	105.4%
2		企業会計の基礎	堺 昌彦	38	41	107.9%
3		組織行動のマネジメント	出川・福重	36	39	108.3%
4		マーケティングマネジメント	近藤公彦	38	39	102.6%
5		情報活用とビジネスライティング	奥田和重	39	40	102.6%
6	基礎科目	アントレプレナーの系譜とリーダーシップ	瀬戸 篤	17	16	94.1%
7		統計分析の基本	西山 茂	23	22	95.7%
8		予算管理と業績評価	乙政 佐吉	37	34	91.9%
9		ベンチャー企業	瀬戸 篤	7	6	85.7%
10		初級ビジネス英語	浦島 久	22	25	113.6%
11		戦略的ファイナンス	籙本 智之	22	21	95.5%
12		ビジネス法務の基礎	中村・和田・河森・遠山	17	17	100.0%
13		経営戦略とイノベーション	玉井 健一	21	20	95.2%
14		顧客志向経営	猪口 純路	27	25	92.6%
15		パブリックマネジメント	相内 俊一	21	21	100.0%
16		ビジネスプランニングの技法	齋藤・山本(充)・出川	36	34	94.4%
17		ビジネスエコノミクス	西山・瀬戸	25	23	92.0%
18	発展科目	ビジネスプロセス構築	奥田・出川	27	26	96.3%
19		企業財務と税務戦略	富樫 正浩	9	7	77.8%
20		国際取引の法務戦略	中村秀雄	4	4	100.0%
21		金融システムのアーキテクチャー	齋藤一郎	14	13	92.9%
22		テクノロジービジネス創造	瀬戸・守内	3	3	100.0%
23		技術と事業革新	瀬戸・武田	3	3	100.0%
24		会社設立とファイナンス	佐藤・大浦	5	4	80.0%
25		マーケティングの技法	山本 充	11	10	90.9%
26		生産管理	奥田和重	7	6	85.7%
27		組織的意思決定	出川 淳	21	22	104.8%
28		北海道経済と地域戦略	下川・小田	14	11	78.6%
29		IR戦略	松本 康一郎	2	2	100.0%
30		将来予測の技術	西山 茂	11	9	81.8%
31		知的財産の評価と活用戦略	才原 慶道	14	14	100.0%
32		環境経営戦略	山本(充)・八木	5	5	100.0%
33		国際経営	李 濟民	6	6	100.0%

(※ 1) 「中級ビジネス英語」は履修生が科目等履修生 1 名のみであったためアンケートを実施していない。

34		中級ビジネス英語(*1)	小林・クランキー	1		
35		特殊講義Ⅰ(コーポレートファイナンス)	篠本・保田	27	26	96.3%
36		特殊講義Ⅱ(事業再生とリーダーシップ)	吉村	26	26	100.0%
37		特殊講義Ⅲ	(非開講)			
38	実践科目	ビジネスプランニングⅠ	齋藤・山本・出川・保田	39	35	89.7%
39		ケーススタディⅠ	玉井・近藤・堺・福重	39	37	94.9%
40		ビジネスプランニングⅡ	齋藤・出川・山本・保田	37	34	91.9%
41		ケーススタディⅡ	近藤・玉井・篠本・福重	38	36	94.7%
合計				826	801	97.0%

各質問項目に対する5段階評価の各評価値の合計数と、各質問項目の平均評価値を表3に示す。

表3 回答数と平均値

質問項目	シラバス	指 示	説 明	資 料	グループワーク	ディスカッション	事前課題	事後課題	コメント	整合性	成績評価	満足度
回答1	6	13	8	6	10	8	5	5	16	7	10	10
回答2	14	31	33	18	20	19	17	21	39	24	26	28
回答3	84	85	93	115	88	105	134	67	148	84	137	86
回答4	252	213	239	252	220	245	238	254	231	239	232	238
回答5	434	450	422	404	441	418	395	451	364	443	389	431
1~5合計	790	792	795	795	779	795	789	798	798	797	794	793
平均	4.38	4.33	4.30	4.30	4.36	4.32	4.27	4.41	4.11	4.36	4.21	4.33
全項目平均	4.31											

5段階評価の結果をみると、全ての項目について平均値が上昇しており、全科目平均値は前回の4.13から4.31に上昇している。前回は「資料」のみ「4」が最多となっていたが、今年度は全ての項目で「5」が最多となっている。前回は、「説明」、「資料」、「コメント」、「満足度」において、「1」と「2」の評価の合計が60~70あったが、今回はすべて改善しており、この1年間の教員による努力の結果が反映されていると思われる。項目間での相対評価で見ると、コメントの平均値が比較的低く、授業における教員の説明や、課題・レポートの返却時期、そこに付されているコメントの適切性についてはまだ改善の余地がある様子である。

5. 3 アンケートの分析

5. 3. 1 「教員の教授法について」の分析

各質問項目間の相関係数を計算すると表4のようになる。ここで相関係数が0.5以下の値を太文字で示している。

今回の結果は、昨年同様「グループワーク」に関わる相関係数が他の項目に比べてやや低い値になっており、グループワーク自体の評価は高くても（表3参照）、他の評価項目（例えば、当該授業の満足度）に寄与していないことが懸念される結果となっている。ただし、「満足度」と強い相関を持つ評価項目は、「シラバス」「説明」「資料」「事後課題」「コメント」「整合性（目的・内容）」「成績評価」などで高く、相対的に見ると「グループワーク」が最も低い値の一つになっているので、「グループワーク」についてはさらなる改善の余地があるとも考えられる。

なお、グループワークの満足度などに対する相関が低くなる原因としては、グループ編成におけるメンバー同士の対人関係も考えられ、この点に対してはいかんともしがたい。しかし一方で、グループワーク自体の授業などとの整合性や履修者の理解度向上への貢献度合いが低いということも可能性としてはありうるので、グループワークの進め方や方法についてさらなる検討や工夫が必要とされる。

「資料」は、「説明」、「整合性」、「満足度」との間の相関係数が高い値になっており、授業中に用いられる題材や資料が教員の授業中の説明や授業目的に沿ったものになっているといえる。

表4 質問項目間の相関係数

	シラバス	指示	説明	資料	グループワーク	ディスカッション	事前課題	事後課題	コメント	整合性	成績評価	満足度
シラバス	1.00											
指 示	0.66	1.00										
説 明	0.59	0.55	1.00									
資 料	0.64	0.58	0.70	1.00								
グループワーク	0.48	0.50	0.48	0.53	1.00							
ディスカッション	0.49	0.47	0.50	0.53	0.78	1.00						
事前課題	0.57	0.51	0.55	0.63	0.58	0.59	1.00					
事後課題	0.59	0.54	0.52	0.58	0.62	0.60	0.70	1.00				
コメント	0.55	0.59	0.56	0.61	0.43	0.46	0.55	0.52	1.00			
整合性	0.69	0.60	0.65	0.69	0.55	0.57	0.64	0.66	0.61	1.00		
成績評価	0.61	0.61	0.60	0.63	0.46	0.45	0.57	0.59	0.71	0.69	1.00	
満足度	0.69	0.59	0.71	0.73	0.60	0.62	0.66	0.69	0.65	0.79	0.68	1.00

本専攻が設立された平成16年度から今年度（前期）までの「満足度」の推移を表5に示した。また、表6には、科目ごとの各項目の評価値の結果を示した。

表5. 平成16年度～平成22年度の満足度の推移

年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
満足度	3.84	4.18	4.22	4.30	4.21	4.13	4.31

38	実践科目	ビジネスプランニングⅠ	齋藤・山本・出川・保田	4.56	4.43	4.20	4.26	4.57	4.51	4.37	4.51	4.23	4.54	4.14	4.37
39		ケーススタディⅠ	玉井・近藤・塚・福重	4.25	4.26	4.24	4.11	4.46	4.35	4.14	4.46	4.11	4.16	4.11	4.22
40		ビジネスプランニングⅡ	齋藤・出川・山本・保田	3.91	3.88	3.67	3.45	3.79	3.97	3.68	3.82	3.47	3.73	3.56	3.58
41		ケーススタディⅡ	近藤・玉井・旗本・福重	3.97	3.40	3.77	3.67	4.33	4.14	4.17	4.36	2.89	3.86	3.50	3.78
			項目の平均	4.38	4.33	4.30	4.30	4.36	4.32	4.27	4.41	4.11	4.36	4.21	4.33
			全体の平均	4.31											

5. 4 成績評価

5. 4. 1 履修者数と単位取得者数

平成22年度開講科目に履修登録した学生数と単位取得者数を表8に示す。

表8 平成22年度履修者数と単位取得者数

	科目名(旧カリ名)	科目名(新カリ名)	合 計	
			履 修 者 数	単 位 取 得 者 数
1	経 営 戦 略	マネジメントと戦略	37	37
2	企業会計の基礎	企業会計の基礎	38	37
3	組織と人的資源管理	組織行動のマネジメント	36	36
4	マーケティング・マネジメント	マーケティングマネジメント	38	38
5	情報の処理と活用	情報活用とビジネスライティング	39	39
6	アントレプレナーの系譜とリーダーシップ	アントレプレナーの系譜とリーダーシップ	17	16
7	調査研究とデータ解析の技法	統計分析の基本	23	23
8	予算管理と業績評価	予算管理と業績評価	37	34
9	ベンチャー起業論	ベンチャー企業	7	6
10	ビジネス英語の実践	初級ビジネス英語	22	22
11	会計情報と経営分析	戦略的ファイナンス	22	21
12	企業の社会的責任と経営倫理	ビジネス法務の基礎	17	17
13	事業革新と企業戦略	経営戦略とイノベーション	21	20
14	顧客満足経営	顧客志向経営	27	25
15	パブリック・マネジメント	パブリックマネジメント	21	21
16		ビジネスプランニングの技法	36	35
17		ビジネスエコノミクス	25	22
18	組織運営のためのシステム構築法	ビジネスプロセス構築	27	26
19	企業財務と税務戦略	企業財務と税務戦略	9	6
20	国際取引実務	国際取引の法務戦略	4	4
21	金融システムと企業発展	金融システムのアーキテクチャー	14	14
22	ライフサイエンスビジネス創造	テクノロジービジネス創造	3	3
23	技術と事業革新	技術と事業革新	3	3
24	起 業 と 法	会社設立とファイナンス	5	4
25	市 場 調 査 法	マーケティングの技法	11	10
26	生 産 管 理	生 産 管 理	7	6

27	組織的意思決定とIT	組織的意思決定	21	21
28	北海道経済論・北東アジア研究	北海道経済と地域戦略	14	9
29	財務会計とIR戦略	I R 戦 略	2	2
30	経営者のための経営分析及び統計分析	将来予測の技術	11	9
31	知的財産の評価と活用戦略	知的財産の評価と活用戦略	14	14
32	環 境 と 経 営	環 境 経 営 戦 略	5	5
33	国 際 経 営	国 際 経 営	6	6
34	上級ビジネス英語	中級ビジネス英語	1	0
35	特 殊 講 義 I	コーポレートファイナンス	27	27
36	特 殊 講 義 II	事業再生とリーダーシップ	26	26
36	特 殊 講 義 III		—	—
38		ビジネスプランニング I	39	39
39		ケーススタディ I	39	37
40		ビジネスプランニング II	37	37
41		ケーススタディ II	38	36
42	ビジネス・プラン III			
43	ケース・スタディ III			
44		ビジネスワークショップ I	38	37
45		ビジネスワークショップ II	38	37
46	リサーチ・ワークショップ			
		合計	902	867

5. 4. 2 取得単位数とGPA

表8を見る限りでは多くの学生が単位を取得しており、本専攻の学習に問題を抱えている学生はいないように見える。しかし個々の学生についてGPAを計算すると異なった状況が見えてくる。ここでGPAは式(1)で計算されるもので、グレードポイント(GP)は表9のように定めている。

表9 成績表示及び成績評価基準

評価	成績評価基準	GP	評価内容	区分
秀	100点～90点	4	授業の目的・内容の理解が特に優れている	合格
優	89点～80点	3	授業の目的・内容が深く広く理解できている	

良	79点～70点	2	授業の目的・内容が十分理解できている	
可	69点～60点	1	授業の目的・内容が概ね理解できている	
不可	59点以下	0	授業の目的・内容の理解が不十分である	不合格
認	単位認定科目	—	他大学等で修得した科目を本専攻の単位として認定したことを表す	対象外

$$GPA = \frac{(GP \times \text{修得単位数}) \text{ の合計}}{\text{総履修登録単位数}} \dots\dots\dots (1)$$

式(1)にしたがってGPAを計算しグラフ化したものが図2および図3である。

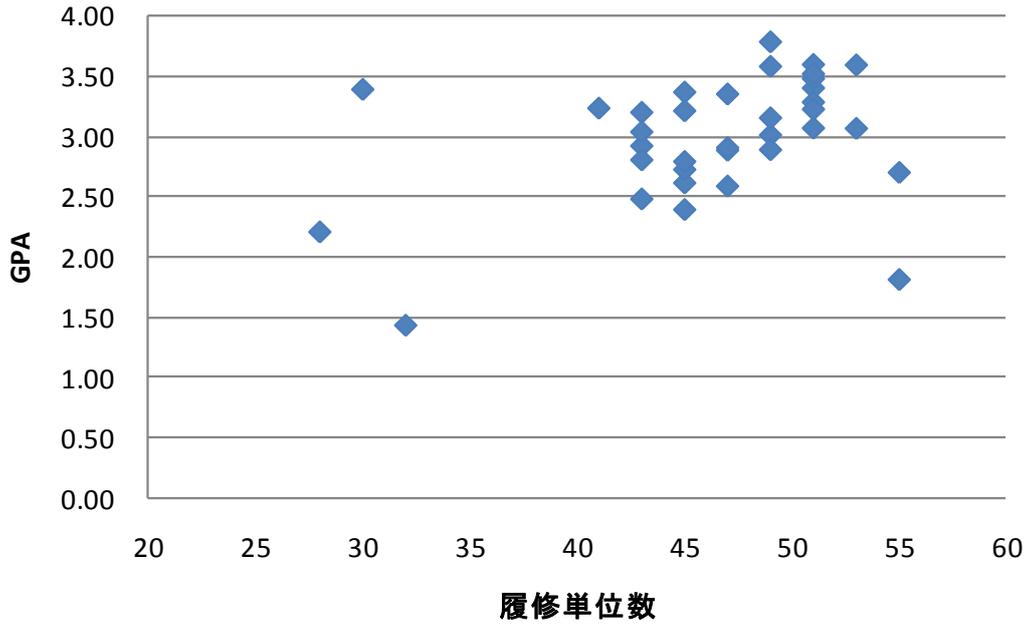


図2 2009年度生のGPAと履修単位数の様子

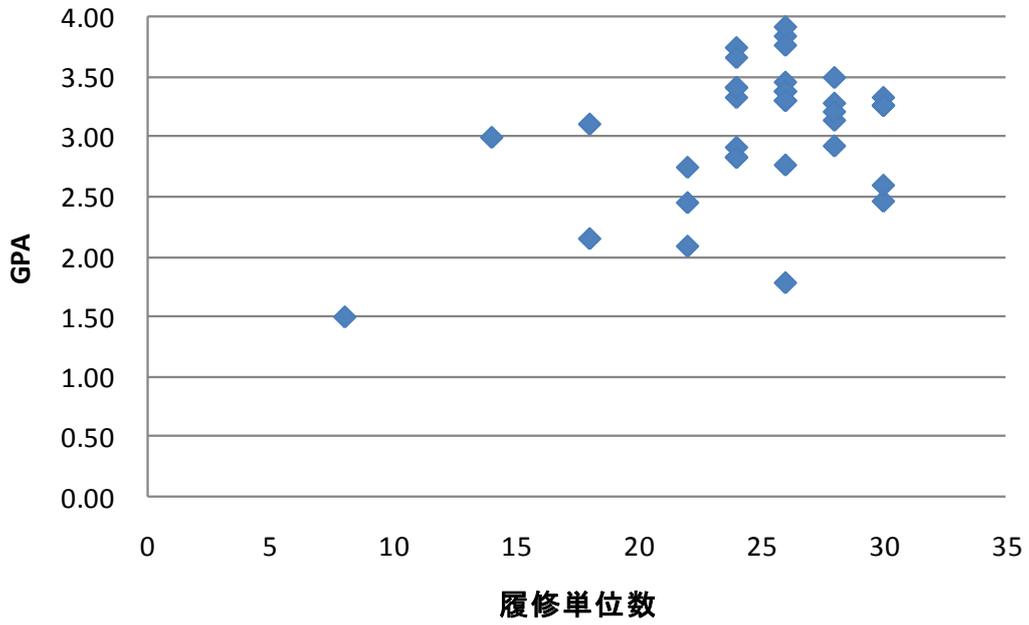


図3 2010年度生のGPAと履修単位数の様子

5.5 自己評価

自己評価は、教育活動実施記録と学生による授業評価、教員による同僚評価（実施された場合）に基づいて行っており、平成22年度に開講した科目について自己評価書が提出されている。本報告書には、評価項目「V 自己評価レポート」を教員氏名、担当科目名とともに公開することとしている。

・「区分」基本科目 「科目名」マネジメントと戦略

「担当教員」李 濟民

この科目は、経営者および事業レベルのマネジャ達の基本的役割を理解しながら、経営戦略の策定や遂行に必要な理論および分析ツールを学習することを目的としている。

モジュール毎に代表的な戦略ツールの習熟とそのツールを利用して次のモジュールの前半でグループワークを通じてケース分析することによって、より深く理解することができた。

モジュール7においては 旗本先生に財務戦略に関する講義とケースディスカッションを担当してもらった。ただ、殆どのケースが前年と同じものを使用してしまったことは次年度に向けて改善すべき点だと思う。

・「区分」基本科目 「科目名」企業会計の基礎

「担当教員」堺 昌彦

講義の焦点となるトピックと連動するケースと演習を組み込むことで、会計に対する関心の呼び起こしと知識の習得に一定の成果がみられた。

しかし、これらの教材の開発は未だ十分とはいえず、引き続き、効果的な学習のための教材開発に注力したい。

・「区分」基本科目 「科目名」組織行動のマネジメント

「担当教員」出川 淳、福重八恵

本授業の目的は“組織行動のマネジメント”に関する基礎的な知識と実践的知見の習得である。本年度は限られた授業時間を有効につかうため、事前課題を厚くし、授業では各履修生の事前課題に対する質問に答えるという方式を試みた。

その結果、一定の効果もみられたようであるが、履修生の授業に対する満足度などは多少低下した部分もあったようである。

このような状況をふまえて、どうすれば、効率的に履修生が組織行動関連の実践的な知見を身につけることができるかという点について、本授業での工夫や質の向上だけでなく、他の関連科目との内容の切り分けや場合によっては新科目の設置なども視野に入れて検討する必要があると思われる。

・「区分」基本科目 「科目名」マーケティングマネジメント

「担当教員」近藤公彦

理論とケースを統合的に活用し、ケース分析ではグループワークとプレゼンテーション、クラスディスカッションを効果的に実施することができた。

ケースとして取り上げた企業からゲスト・コメンテーターを招き、学生のケース分析のプレゼンテーションに関して当事者の観点からコメントをいただくことにより、学生の知見と洞察をさらに深めることができた。

・「区分」基本科目 「科目名」情報活用とビジネスライティング

「担当教員」奥田和重

モジュール4でのグループワークとディスカッションの時間が足りなかったため、講義とグループワークとの時間配分を見直す。

また、レポートを執筆する前のモジュール2終了時にA4版レポート1枚程度のレポートを課したが、これをさらに充実できるようにしてレポートを段階的に執筆できるようにする。

・「区分」基礎科目 「科目名」アントレプレナーの系譜とリーダーシップ

「担当教員」瀬戸 篤

昨年同様に、自著（未出版）原稿を分割して事前配布し行った講義であるが、反響は大きく、同時に学生諸君からの指摘により何をもって＜アントレプレナーの系譜＞を講義すべきかがよくわかった。

これらの成果を発展させて後期『ベンチャー企業』へと結びつけたい。

また、最終講義M8には短いながら本学大学院OBで、卒業後起業した現役創業者を招き創業経緯説明を依頼実施したところ、学生より「身近である」とのことより大きな反響を受けた。

・「区分」基礎科目 「科目名」統計分析の基本

「担当教員」西山 茂

代表値、散布度など分布の特性、正規分布の活用など基礎的事柄は理解の浸透が見られた。コース終盤では、回帰分析など統計分析の現場に近い素材を、チーム討論を行いつつ学習させた。クラス全体としては概ね満足のできる水準に達したと思われる。

しかしながら、基礎的概念を完全理解するまでの時間に個人差があり、ピラミッド型の授業進行の中で理解の深淺が徐々に拡大する傾向が認められる。

より経営現場に密着した問題への取り組み方を希望する学生も一部にいる。

これまで提供したインターネット授業に再生障害が生じているので再構築を検討すると並行して、23年度は理解困難テーマについてグループディスカッションの有効性を観察する予定である。

・「区分」基礎科目 「科目名」 予算管理と業績評価

「担当教員」乙政 佐吉

授業の目的を達成する上で、レクチャーによる基本的事項の理解、ケース・スタディによる考察、事後課題による内省という授業の進め方自体に問題はなかったと考える。

しかしながら、授業を進める際の、レジュメのつくり方、授業内容のボリューム、話し方、討論の仕方、タイム・マネジメントには改善の余地が認められる。これらの点については実践と反省を繰り返しながら改善していきたい。

・「区分」基礎科目 「科目名」 ベンチャー企業

「担当教員」瀬戸 篤

学生の課題レポートにおいてもっとも反響が大きいホンダについて、昨年同様、ホンダ創設期に入社し直接、本田宗一郎と藤沢武雄の下で直接働いた経験ある仙台在住の元ホンダ専務をM8最終講義にお招きして、学生へのレクチャーとディスカッションをおこなった結果、非常に高い反響を得た。

・「区分」基礎科目 「科目名」 初級ビジネス英語

「担当教員」浦島 久

シラバスからあまり離れない程度で、学生の英語レベルに合わせて教材を変えました。このことで学生の満足度がアップしたと思います。

・「区分」基礎科目 「科目名」 戦略的ファイナンス

「担当教員」旗本 智之

製造業を前提にした会計情報の利用を授業内容とした。準備課題、小テスト、事後課題はすべて採点の上、返却し、履修者の学習効果を高めるよう努力した。

内容が多様なこともあり、トレーニングのための教材を求める履修者が結構いた。

・「区分」基礎科目 「科目名」 ビジネス法務の基礎

「担当教員」中村 秀雄、和田 健夫、河森計二、遠山純弘

担当者の連携を深めて講義をより体系的にすること。

法的な思考方法を理解できるような内容にすること。

会社法については、具体的な裁判例を要約した教材の作成につとめること。

・「区分」基礎科目 「科目名」 経営戦略とイノベーション

「担当教員」玉井 健一

イノベーション論は、多様な観点から説明することができるため、できる限り適切な事例をもって説明することが必要があると感じている。次年度は、この点の改善に努めたい。

・「区分」基礎科目 「科目名」顧客志向経営

「担当教員」猪口 純路

・「区分」基礎科目 「科目名」パブリックマネジメント

「担当教員」相内 俊一

10人以下の履修者が数年続き、10名を超えたところに20名にまで履修者が増えた。10名程度の履修者の時には、一人一人にかなり時間を割いて議論をすすめる対話型の講義を行ってきたが、このスタイルでは授業の進行が遅れていく。

レクチャー、グループワーク、教師と学生との対話の時間的なバランスを再検討し、シラバスに掲げた内容を、しっかり網羅できるよう工夫する必要がある。

講義に対する履修者の満足度は、積極的な履修者の中で極めて高かったが、少数ながら満足度の低かった学生がいたことは、教師側のセンサーの鈍さに起因するものと自戒している。

今後も、工夫して対話型の講義を続けたい。

・「区分」基礎科目 「科目名」ビジネスプランニングの技法

「担当教員」齋藤 一郎、出川 淳、山本 充

本授業では、ビジネスプランニングにおいて必要とされる各種分析技法をオムニバス形式で取り上げ、それぞれの技法の理論的なアウトラインとともに、実際にツールとして活用する能力を涵養することを主たる目的としている。

2010年度では、昨年度から内容を一部変更し、①ビジネスプランニングの概要と戦略策定の基本、②業界構造分析、③市場分析（Ⅰ）～AHP活用の基礎～、④市場分析（Ⅱ）～セグメンテーションとターゲティング～、⑤商品市場分析、⑥SWOT分析、⑦価値連鎖分析（担当：齋藤）、⑧利益モデルとモデリングとした。

履修者からは、事前課題の出題方法や提出物に対する改善を求められつつも、総じて一定の評価を得ることができた。

・「区分」基礎科目 「科目名」ビジネスエコノミクス

「担当教員」西山 茂、瀬戸 篤

授業展開に当たっては、市場構造分析、価格・製品戦略の基礎となるゲーム理論、部分分析を超えた産業連関分析までを含め、OBSの教育方針である「新規事業開発、ベンチャー起業と成長発展戦略を立案・実行等」に直接つながるトピックスを選別した。

個々の学生間には経済学履修経験の違いによる到達度格差が認められたものの、全体としては概ね授業の目的・目標を達成した。

また、産業連関分析では、普段目に見えない産業間の相互依存関係が計量把握可能であり、農業自由化の影響が広範囲な産業全体に及ぶことを全員が計算のうえ確認した。

22年度は執筆中の新テキストを併用し、最近の新聞、経済誌等の記事を教材として活用した。組織論については22年度も時間的制約から割愛せざるをえなかった。

23年度には新テキストが刊行される予定であり、授業設計を①需給バランスの論理、②戦略的思考、③産業構造とイノベーションにスリム化、合理化する。

第1回目でマクロ経済的な見方を含めるなど、理解のしやすさの大幅な向上を図る。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**ビジネスプロセス構築**

「担当教員」**奥田 和重、出川 淳**

戦略を立案しそれを業務システム／プロセスにまで具体的に展開し、設計するための分析手法の理解や実践的なスキルの獲得を主眼とする本授業の主旨については、ほとんどの履修生が十分に理解してくれたと思われる。

しかし、実際に履修生が獲得した知見やスキルにはバラつきがあったようである。

これを改善し、より多くの履修生により高い水準の知見とスキルを身につけてもらうための方法を多面的に研究し、工夫していく必要があると考えられる。

そのためには、グループワークを如何に効率よく、おちこぼれやフリーライダーを発生させることなく進めるか、という点が大きな課題になると考えられる。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**企業財務と税務戦略**

「担当教員」**富樫 正浩**

税務という分野は、一定の会計知識が前提となるため、シラバスにおいても厳しい受講要件を課しているが、今年の履修者は、全体的に会計知識のレベルが低く、授業内容を理解できなかった者がいた。

その結果、前年までと比較して、履修者の授業参加の程度にばらつきがあり、中にはほとんど発言をしない履修者も存在した。レポートの内容もこれに比例した内容であった。

最終試験では一定の得点を獲得することができたものが多かったが、シラバスで示した評価基準では通常の授業参加に重きを置いた評価としているため、結果的に評価が「不可」となる履修者が発生した。

次年度は、最初の授業において想定するレベルを明確に伝達し、それを理解していただいたうえで授業を行っていきたいと考えている。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**国際取引の法務戦略**

「担当教員」**中村 秀雄**

国際取引の経験がある学生が受講生の半分であった。このため全体のレベルを保ちながら、個別の学生の需要に応えることに工夫を要した。

国際取引を実際に経験したものと、そうではないものの差が、教育内容、教材の理解に顕著に表れる。経営者として何を考えておくべきかについても、学生の経験の深浅によって、学習

成果に差異が出る。

この授業では出来るだけ具体的な事例を取り上げたり、課題の内容に設定したりして、現場を疑似体験してもらうよう努力した。これは相応の成果を上げたと評価している。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**金融システムのアーキテクチャー**

「担当教員」**齋藤 一郎**

本授業では、企業家が事業を手がける際に直面する資金調達に伴う困難をシステムティックに解決する“場”としての金融システムの基本的な性格や、企業家の潜在的な発展能力に見合った資金仲介（あるいは資金媒介）のあり方についての理解を深めることを目的としている。

授業では、履修者の金融システムに関する基礎的な知見に相当なばらつきがみられるため、講義を主体として展開してきた。講義の中では、適宜、今日的なトピックスを取り上げるよう心掛けてきたが、「授業運営における双方向性の確保」という点で不断の取り組みが求められている。

学生による授業評価では、「ディスカッション」を除く評価項目について概ね4点程度の評価を得ており、授業運営の方法に改善の余地を残しつつも、学生からは相応の評価を得ることができたと思慮される。

来年度は、今年度に引き続き「授業運営における双方向性の確保」という点に鑑みて、講義内容を精査するとともに、履修者自身によるレポートの作成・発表とそれを巡るディスカッションの時間を確保し、座学による知識の吸収と実践の場での応用力の向上を両立させていきたい。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**テクノロジービジネス創造**

「担当教員」**瀬戸 篤、守内 哲也**

昨年度よりこれまでのM4－7を一新して、知財・財務・出口の3分野に関し首都圏および札幌から我が国を代表する専門家4名を、外部レクチャーとして本講義にお招きした。

そして、各専門レクチャーと学生全員からのコメント・質問を必ず実施して、その後、本講義講師の瀬戸と守内がそれぞれ商学と医学の視点から解説コメントする方式を全面的に採用した。

その結果、学生と外部レクチャーとのディスカッションは、M1－3の事前講義における事前把握もあり飛躍的に発展したと感ぜられた。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**技術と事業革新**

「担当教員」**瀬戸 篤、武田 立**

指定課題図書を対象とする精度の高い事前課題を学生諸君に求めるとともに、「なぜ、課題レートが必要か?」「なぜ、指定課題図書は重要か?」「指定課題図書から、何を学ぶべきか?」という疑問に重点的に回答する形式の授業運営を目指した。

その結果、事前課題に対する全員の取り組み姿勢は、従来の「やらねばならない」から「なるほどだからこうなのか」へと大きく変化したように思われる。今後も、こうした説明が欠かせないことを確信した。

また、最終講義M8に仙台市在住の元ホンダ常務（ホンダ3期入社）をお招きして、ホンダ創業当時の本田宗一郎指導におけるエンジン開発当時をお話いただき、教員・学生共に深い感銘を受けた。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**会社設立とファイナンス**

「担当教員」**佐藤 等、大浦崇志**

本年は、急遽後半を担当する教員の交代があり、連携性に不安を感じてスタートしたが、良好な連携のもと修了することができた。「株式公開後の企業分析」に関しては、実際の企業を対象として授業で学ぶとともに、資本政策を作成した仮想IPO企業を対象にして事後課題とした。昨年よりもこの点において授業の学生に求めるレベルがアップしているが、よく趣旨を理解し、優秀な報告を得ることができた。

一方でこの点に関しては、学生の負担の過重感があったかもしれない。

しかし発展科目としてあるべき姿に一步近づいたと積極的に評価するべきと思料する。

課題の出し方、授業でのフォローなどの工夫で解消すべき事項として認識する。

いずれにしても本年においては授業の目的・目標を十分に達成し、履修者全員が一定以上の理解と成果を収めたと評価するものである。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**マーケティングの技法**

「担当教員」**山本 充**

履修者が授業時間内において取り組むリサーチをワーク・ディスカッションできる時間を設定する工夫を行い、共に議論するスタイルを強める。

解析方法は分析目的に応じて選択することが必要であり、そのためには多種の分析方法の用途を理解することが求められるが、時間的制約の中、そのすべてを解説・実践することが困難であるため、参考書紹介などによる自習のアドバイスを行ってきたが、それに加え、適当な手法に絞り込んで取り上げ、実践させる工夫を行う。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**生産管理**

「担当教員」**奥田 和重**

グループワークとディスカッションの評価が低いことから、昨年度から検討しているゼミ形式の授業にすることでディスカッションの機会を増やすようにする。

また、履修者数によってはグループワークの実施も検討する。

・「区分」発展科目 「科目名」組織的意思決定

「担当教員」出川 淳

対人コミュニケーションや論理思考の知見を真に理解し、それらを履修生が自らの実際に使えるスキルとして身につけるという点について、昨年度と同程度の成果は残せたと考えている。これにくわえて、本年度から取り入れたコーチングについても、具体的な仕事の仕方などを支持するコンサルテーションとの違いを明確にすることで、一定の理解はえられたようであり、組織におけるコミュニケーションの実践的な幅の広がりにもつながったと考えられる。

昨年度よりは知見の獲得において若干向上がみられたと考えているが、改善すべき点も残っている。

・「区分」発展科目 「科目名」北海道経済と地域戦略

「担当教員」下川 哲央、小田 福男

本科目において「MBAホルダーは、地域経済の奴隷（どがん）たるべし」を履修生の矜持として浸透させながら、ビジネス等（注）の設計に、地域経済「自立・活性化」に貢献できる経済学的思考を融合させることが目的である。

この場合、MBAホルダーは決して守銭奴でなく、地域経済との共生を条件としてゴールを目指し、履修生相互の啓発と知の共有を目指す。

幸い、現在まで履修生の意欲・資質とも高く、多くの履修生が学修の目的・目標に「4以上」のレベル到達により、ほぼ満足できるレベルを維持している。

（注）ビジネス等とは、ビジネス、プロジェクト、産業などを指す。

・「区分」発展科目 「科目名」IR戦略

「担当教員」松本 康一郎

2010年度は、受講生が例年以上に少なかった。2010年3月期連結財務諸表の作成にIFRSを適用する余地が生まれたので、もっと多くの受講生を期待していた。

今年度は、すべての評価項目において、前科目平均値を上回る評価を受けたことを素直に喜びたい。ただし、このことに満足せず、次年度は、事前・事後課題をさらに有効に活用することによって、余裕のある授業を展開することに努めたい。

・「区分」発展科目 「科目名」将来予測の技術

「担当教員」西山 茂

投資、研究開発、販売などについて経営戦略を選択するためには将来予測が欠かせない。22度は、最初のモジュールで統計ソフトRの導入教育を行い、表計算ソフトによるエクセルの使用を控えながら、授業の効率性の向上を図った。

特にRを活用したボックス・ジェンキンスのARIMA分析に多くの実習時間をとった。

これもあって履修者全体で統計的予測の技術が確実に習得された感触を得ている。

授業目的の達成には個人差が発生したが、予測実務を担当するなどの理由から強い履修動機を有する学生からは高い評価を受けている感触である。

また同僚評価においては、ボックスジェンキンス法という世界的に広く活用されている統計技術を正面からとりあげている点、及び PC 持参のうえで実習を中心に授業を進めている点について高い評価を頂いた。

23 年度には①統計分析授業ノートの拡大・改訂、②対話式ダイアログで統計ソフト R を操作できる方法の紹介マニュアル作成を予定している。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**知的財産の評価と活用戦略**

「担当教員」**才原 慶道**

知的財産と呼ばれるものには多種多様なものがあり、企業活動には各種の知的財産法がさまざまな形でかかわってくる。

この授業では、いわゆる知的財産法のうち、技術の保護・表現の保護という観点から、主に特許法と著作権法を取り上げた。

限られた時間の中で、知的財産法の全体像を示すことは困難な作業ではあったが、少なくとも両法の要点については押さえることができたと思う。

また、学生の興味をひきそうな話題を織り交ぜながら、企業等の現場において、実際に問題になりそうな事柄を可能な限り盛り込み、授業が平板なものにならないよう配慮した。

論点が多岐にわたったが、随時、質疑に応じるなど、学生の理解を助けるよう努めたつもりである。知的財産法の基礎的な知識については伝えることができたと思う。

この授業が、今後、学生が知的財産法を学んでいくきっかけになったとすれば幸いである。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**環境経営戦略**

「担当教員」**山本 充、八木宏樹**

科目内容が環境経営と環境ビジネスとなっている感があるため、全体の整合性を図る改善を行う。

具体的にはエコツーリズムは環境ビジネスの 1 例であるが、題材とする事業の吟味を行うとともに、環境ビジネスの考察に経営的視点を加えて検討させ、事業全体および市場のグリーン化を図れるスキル養成を狙いたい。

また、事業のステークホルダーとのコミュニケーション方法について CRM に絡めて検討させるように工夫することを検討する。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**国際経営**

「担当教員」**李 濟民**

おおむね目標していたことは達成できたが、より良い授業をしていくためには、飽きさせない為のレクチャーとケースディスカッション等において時間配分の工夫とグループワークを

増やす必要性を感じた。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**特殊講義Ⅰ（コーポレートファイナンス）**

「担当教員」**旗本 智之**

企業価値というわかりそうでわかりにくい概念を習得するために、細かくステップを設定して授業を行った。事前課題、小テスト、事後課題はすべて採点の上、返却した。

授業でのグループディスカッションも学習効果を高めるよう、課題の設定、討論時間の管理について最大限の努力を払った。

最終レポートで履修者の学習効果を評価すると、彼らは企業価値概念を正しく理解し、予測モデルを構築して企業価値を適切に評価していることが確認された。

・「区分」**発展科目** 「科目名」**特殊講義Ⅱ（事業再生とリーダーシップ）**

「担当教員」**吉村 仁**

講義は、毎回学生の実ビジネスへの高い興味と参加意識のもとで活気のあるものになったと思う。学生の自主性を尊重し、事前、事後の課題について多くの指示は行わなかったため、評価は得られなかったが、講義後の e-Learning 上の学生間の意見交換を見ると、当方から伝えたいメッセージは伝わっていたように思う。

グループワークについては、うまくいったグループと、そうでないグループで評価のバラつきが見られたが、次年度は上手く機能できたグループを参考に、更に改善して行いたいと思う。

私自身、学生とのディスカッションから多くを学ぶことができたことに感謝する次第である。

・「区分」**実践科目** 「科目名」**ビジネスプランニングⅠ**

「担当教員」**齋藤 一郎、出川 淳、山本 充、保田隆明**

2010 年度の「ビジネスプランニングⅠ」では、テキスト（『MBA のためのビジネスプランニング手法』（同文館）を刊行するとともに、関連科目「ビジネスプランニングの技法」との連携を密にすることによって、分析手法などの理解とスキル獲得を容易にした。

また、課題については昨年に引き続き一つとすることによって、じっくり検討してもらうことによって、理解の度合などを、以前にくらべると全般的に深めることができた。

とはいうものの、一部の履修生や一部のグループのビジネスプランニングに対する理解の度合や、成果物である事業計画書の質は必ずしも充分でないものもあり、この原因は、主に不適切なグループワークの運営やフリーライダーの発生によるものと考えられるため、今後はこの点を是正するための施策を工夫していかなければならない。

・「区分」**実践科目** 「科目名」**ビジネスプランニングⅡ**

「担当教員」**齋藤 一郎、出川 淳、山本 充、保田隆明**

2010年度の「ビジネス・プランニングⅡ」では、「既存企業（運輸業者）の新規事業」という若干特殊な（というより業界固有事情を孕んだ）形態のビジネスプランニングに取り組んでもらうことを通じて、ビジネスプランニングの総合的なスキルの向上を目的とした。

その結果、「価値の具現化」や「生産・業務プロセスの検討」などについては一定の成果があったが、「マーケティング」や「顧客満足維持・向上」、「経営環境の変化への対応」といった項目については、十分なレベルまで達しなかったようである。

したがって、2011年度以降は、本科目だけでなくその他のビジネス・プランニング関連科目（「ビジネスプランニングⅠ」、「ビジネスプランニングの技法」）においても、これらの点を強化するための授業内容に修正していく必要があると考えられる。

そのための具体的な計画として、ビジネスプランニングに必要な理論・手法・考え方・段取りなどを全てとりまとめ、さらに、分析支援ソフトも添付したテキスト『MBAのためのビジネスプランニング手法』（同文館）を履修生に提供していく予定である。

・「区分」実践科目 「科目名」ケーススタディⅠ

「担当教員」近藤 公彦、玉井 健一、堺 昌彦

学生間で差が出やすい財務・会計の能力を基準にグルーピングするとともに、グループ内でのディスカッション、クラスでのプレゼンテーションとディスカッションを行ったことにより、学生のプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を高めることができた。

課題としては、M4の戦略ゲームをより効率的に授業設計することが挙げられる。

・「区分」実践科目 「科目名」ケーススタディⅡ

「担当教員」近藤 公彦、玉井 健一、旗本 智之、福重八恵

ケーススタディⅡでは、ケースの問題点発見から解決策の提示に至るまで、ケース分析に用いる理論、フレームを学生に自由に選択させている。

これにより高度なケース分析スキルを習得させることができたとともに、ディベート形式を導入することにより、コミュニケーションスキルを高めることができた。

また、モジュール4において企業価値計算演習を実施し、推奨戦略を実行した際の財務成果を分析させることにより、財務的視点から経営成果を推測する方法を会得させることができた。しかしながら、ケース分析の採点と学生へのフィードバックが遅れる状況が生じ、上記のスキル向上に支障を来すことがあった。

第6章 FD 活動報告
(大学院教育開発部門)

第6章 FD 活動報告

6. 1 大学院教育開発部門の活動状況

6. 1. 1 大学院教育開発部門の活動

平成22年度の大学院教育開発部門会議は3回開催された。主な審議内容は以下のようである。

- (1) 平成22年度「年度活動方針」について
- (2) 平成22年度「予算」について
- (3) 大学院FDアンケートの実施について
- (4) データベースの選定について

6. 1. 2 「大学院FDアンケート」集計結果について

教育開発センター 助教 辻 義人

【1. 大学院FDアンケート調査の概要】

本学大学院商学研究科における教育効果の向上を目的とし、大学院生と教員に対してアンケート調査を実施した。調査期間は、2010年11月5日～12月6日であった。

大学院生対象アンケートは、大学院生37名（博士前期課程26名、博士後期課程11名）に配布し、17件の回答が得られた（博士前期課程15件、博士後期課程2件）。回収率は45.9%であった。また、教員対象アンケートは、45名の教員に調査票を配布した。回収数は13件であり、回収率は28.9%であった（図1, 2）。なお、H21調査の回収率は、大学院生46.9%、教員34.1%であった。ここで、教員に配布する条件として、以下の2点を設定した。①平成22年度授業科目担当教員のうち履修者のいる科目担当教員、または、②平成21年度に大学院生の研究指導を担当した教員。回収方法は、大学院生は学務課まで提出、教員は事務棟に設置されたボックスで回収するものであった。

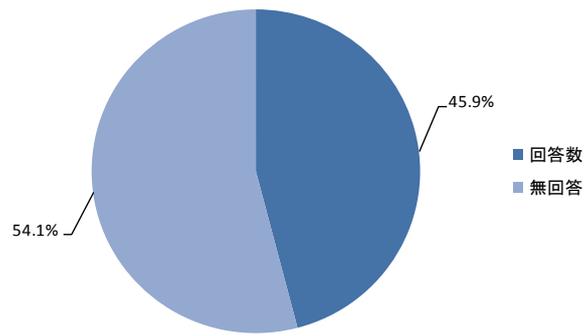


図1 大学院生対象アンケート票（回収率）

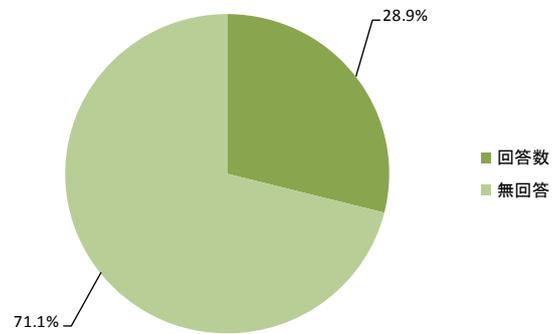


図2 教員対象アンケート票（回収率）

質問項目、ならびにレイアウトについて、以下に「大学院生対象アンケート票」「教員対象アンケート票」、これらを掲載する（図3, 4a~4b）。

大学院FDアンケート(大学院生対象)

本調査は、博士前期課程・後期課程の教育課程(カリキュラム)および教育体制に関して、幅広く学生の意見・希望を聴取し、今後の大学院指導の参考にすることを目的としています。成績評価等には全く関係しませんので、率直な意見をご記入ください。

【回答方法】 1:まったくそう思わない, 2:あまりそう思わない, 3:どちらともいえない, 4:ややそう思う, 5:強くそう思う

1) あなた自身にとって、興味深い科目が開講されている。	1	2	3	4	5
2) 幅広い内容にわたって、科目を選択することができる。	1	2	3	4	5
3) シラバスに記載されたとおりの知識や技能を獲得できている。	1	2	3	4	5
4) 指導教員から、十分な論文指導(研究指導)を受けている。	1	2	3	4	5
5) 科目のレベル(難易度)は適切である。	1	2	3	4	5
6) 修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である。	1	2	3	4	5
(学習・研究活動に関する意見を記入してください)					
7) 研究に必要な図書資料が、十分に整備されている。	1	2	3	4	5
8) 研究に必要な論文が、十分に整備されている。	1	2	3	4	5
9) 研究に必要な図書館データベースが、十分に整備されている。	1	2	3	4	5
10) 大学院生の共同研究室は、研究活動に適した環境である。	1	2	3	4	5
11) 学内設備(PCなど)の利用環境が整っている。	1	2	3	4	5
(資料や設備に関する意見を記入してください)					
12) 研究や進路など、学生生活について相談できる環境がある。	1	2	3	4	5
13) 学内の講義やゼミ以外に、研究会や勉強会に参加したい。	1	2	3	4	5
14) 履修科目を決定する際、シラバスが参考になった。	1	2	3	4	5
15) 現在の大学院における学習・研究活動に満足している。	1	2	3	4	5
(学生生活全般に関する意見を記入してください)					
(その他、意見がありましたら、記入してください)					

図3 大学院FDアンケート：大学院生対象

大学院FDアンケート(教員対象)

本調査では、大学院における教育方法の改善を図る上で、アンケートにより教員の意見・感想を収集し、今後の学生指導体制やFD活動のあり方を検討することを目的としています。ご協力いただけますよう、お願いいたします。

【回答方法】 1:まったくそう思わない, 2:あまりそう思わない, 3:どちらともいえない
4:ややそう思う, 5:強くそう思う

1) 成績評価に関して、共通した基準の必要性を感じる。 1 2 3 4 5

2) 講義において、さらに多くの補助(TAなど)が必要である。 1 2 3 4 5

3) 指導に際して、eラーニングシステムを有効に利用している。 1 2 3 4 5

4) 院生に対して、より幅広い交流活動を期待している。 1 2 3 4 5

(研究指導や論文指導に関するご意見を記入してください)

5) 学内において、研究指導に必要な資料が整備されている。 1 2 3 4 5

6) 図書資料や論文の収集に関する学生の知識は十分である。 1 2 3 4 5

7) 学生の研究活動に必要な環境が整備されている。 1 2 3 4 5

(資料や設備に関するご意見を記入してください)

8) 授業方法の改善のため、組織的な取り組みが必要である。 1 2 3 4 5

(本学大学院で行うべきFD活動について、ご意見を記入してください。)

(その他、ご意見がありましたら、記入してください)

【前年度(平成21年度)、大学院の研究指導を担当された方は、次ページにご回答ください。】

図 4a 大学院 FD アンケート票：教員対象 (表側)

9) 平成20年度に研究指導を担当された教員の方にお聞きします。

本学では、平成19年度から、研究指導に関する単位数を以下のように変更しました。これは、段階的で進捗状況に合わせた研究指導の実現を意図したものです。

変更前：研究指導に関する演習(10単位)

現在： アカデミックトレーニング(研究方法論など4単位)、研究指導Ⅰ～Ⅲ(各2単位)

ここでは、上記の変更に伴う研究指導上の効果や問題点についてお聞きします。

a) 段階的で進捗状況に合わせた研究指導の教育効果や問題点について、ご意見を記入してください。

(教育効果について)

(問題点について)

b) 正・副指導教員による研究指導体制の連携について、ご意見をお聞かせください。

(教育効果について)

(問題点について)

c) 現在の履修細則では、1年次後期科目「研究指導Ⅰ」の単位が取得できなかった場合、2年次に進級することができません。この点について、ご意見をお聞かせください。

d) 履修細則の改正後において、新たな取り組みなど、研究指導方針に変更はありましたか。もしあれば、具体的な取り組みや、それによって期待される効果についてご記入ください。

(教育効果について)

(問題点について)

e) 平成19年度に行われた履修細則の改正に関して、その他のご意見があればご記入ください。

【アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。】

図 4b 大学院 FD アンケート票：教員対象（裏側）

【2. 大学院生を対象としたアンケート結果】

大学院生対象アンケートとして、以下の3つの観点を設定した。以下に、それぞれの調査結果と考察について述べる。

- (1) 学習・研究活動に関する意見
- (2) 資料や設備に関する意見
- (3) 学生生活全般に関する意見

(1) 学習・研究活動に関する意見

本観点は、6項目と自由記述から構成されるものであった。まず、各質問項目と、その回答(平均値、標準偏差、データ数)を以下にまとめる(表1, 図5)。

表1 学習・研究活動に関する意見 (大学院生)

質問項目	平均値	標準偏差	データ数
1) あなた自身にとって、興味深い科目が開講されている。	3.82	1.13	17
2) 幅広い内容にわたって、科目を選択することができる	3.71	0.99	17
3) シラバスに記載された通りの知識や技能を獲得できている。	4.00	0.87	17
4) 指導教員から、十分な論文指導(研究指導)を受けている。	4.41	1.06	17
5) 科目のレベル(難易度)は適切である。	3.94	1.09	17
6) 修了に必要な「講義科目」の単位数は適切である。	3.88	1.05	17

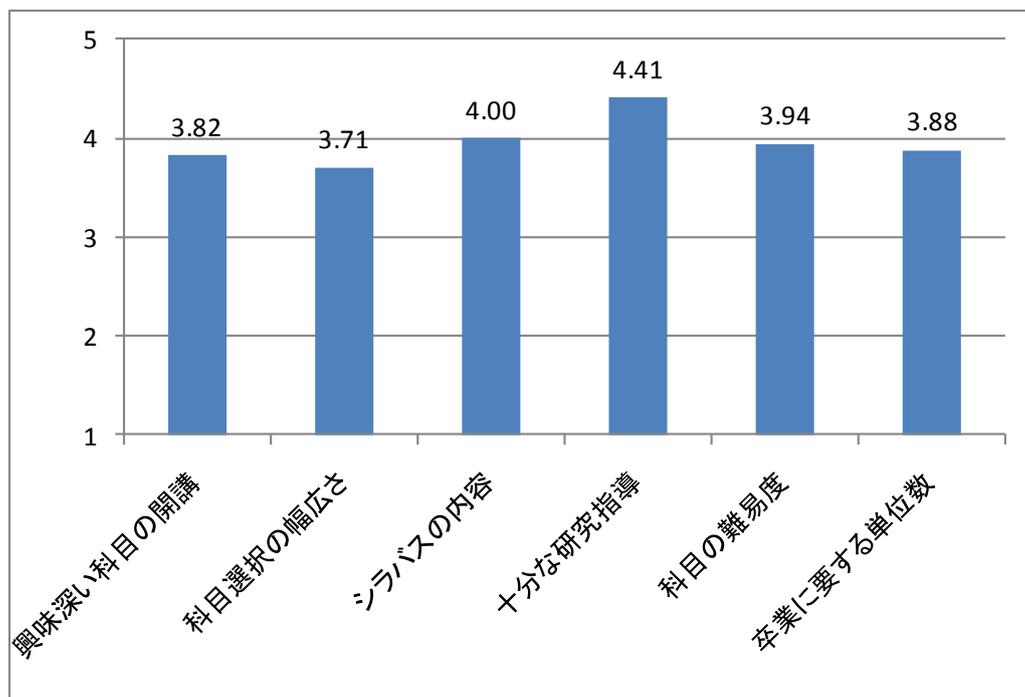


図5 学習・研究活動に関する意見 (大学院生)

（自由記述：学習・研究活動に関する意見）

- マーケティングに関する科目を多く開講してほしいです。
- 博士後期課程の講義が5科目は、他大学の例を見ても多すぎると思います（専門職Dではないので。）社会人だと2年前期までほとんど研究ができません。もっと、指導教員からの指導や学会発表、投稿論文に時間を割くべきだと思います。
- 科目のレベルがちょっと高くて、難しいと思う。
- 後期課程の学生と情報交換する場所や機会があれば良いと思う。
- 社会人学生としては、受きたい科目が集中講義であり習得できない。

数量的調査の結果より、「学習・研究活動」の領域においては、全般的にある程度高い評価が得られていることが示された。なかでも、大学院生の「十分な研究指導」に対する評価が最も高く（*Mean=4.41*）、大学院生を対象とする指導体制が十分であることが伺える。その一方、相対的に低い項目として「科目選択の幅広さ（*Mean=3.71*）」や「興味深い科目の開講（*Mean=3.82*）」が挙げられる。大学院生に対する個別指導は十分である一方で、開講科目の内容や選択については、必ずしも学生が満足していない可能性が示された。ただし、前述のようにこれらの評定値は非常に高く、早急に対策が必要なものとは考えられない。

また、本観点に関する自由記述より、科目編成や難易度に関する要望がいくつか寄せられている。これらの要望が一般的なものであるかどうかについて、さらに調査を行う必要があるものと考えられる。

（2）資料や設備に関する意見

次に、学内の資料や設備に関する結果に注目する。各質問項目と、回答結果（平均値、標準偏差、データ数）を以下に示す（表2、図6）。

表2 資料や設備に関する意見（大学院生）

質問項目	平均値	標準偏差	データ数
7) 研究に必要な図書資料が、十分に整備されている。	2.94	1.18	16
8) 研究に必要な論文が、十分に整備されている。	2.88	1.15	16
9) 研究に必要な図書館データベースが、十分に整備されている。	3.18	1.13	17
10) 大学院生の共同研究室は、研究活動に適した環境である。	3.59	1.12	17
11) 学内設備（PCなど）の利用環境が整っている。	3.71	1.31	17

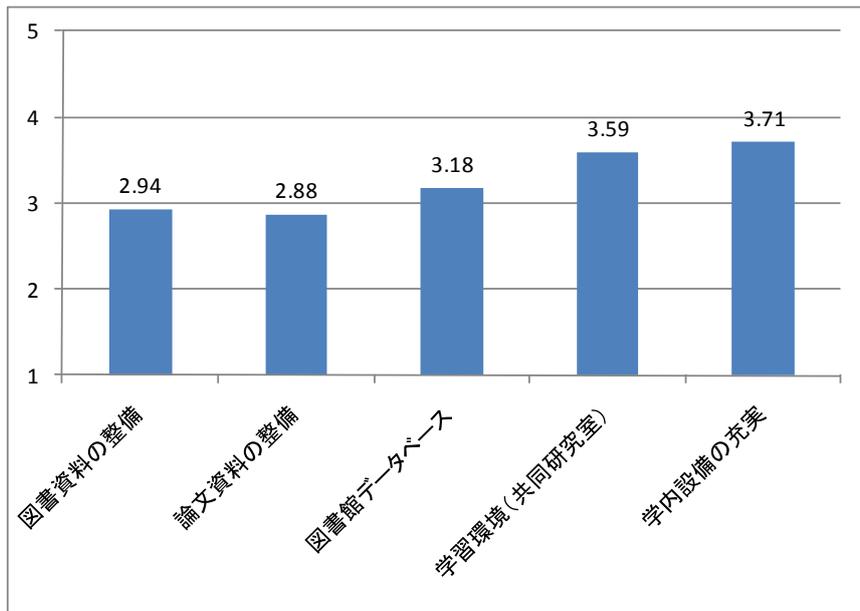


図6 資料や設備に関する意見 (大学院生)

(自由記述：資料・設備に関する意見)

- (PC)外国の資料をみれない場合があります。
- 資料や設備はいいと思いますが私たち外国にとってはよくわからないところがある。調べ方とか使い方とか。
- 設備は問題なく、図書館の対応もとても良いです。
- 図書館の資料、たとえば本や雑誌などの種類もっと欲しい。あと外国語の専門誌 (中国語とか) 欲しい
- アメリカ等の原文の本を増やしてほしいです。

資料や設備に関する観点から調査を行った結果、全般的に低い評価が得られた。特に評価が低かった項目として、「図書資料の整備 ($Mean=2.94$)」と「論文資料の整備 ($Mean=2.88$)」が挙げられる。この点については、図書館との連携を図り、十分な研究資料 (論文や書籍、データベースなど) の整備と拡充が必要であろう。その一方で、ある程度評価が高かった項目として、「学習環境 ($Mean=3.59$)」と「学内設備の充実 ($Mean=3.71$)」が挙げられる。これらのことから、大学院生は、学習スペースなどの学習環境には概ね満足しているが、研究のための資料については、さらなる整備を希望していることが示された。この結果は、自由記述においても同様の傾向が見られた。設備に対しての評価が高い一方で、資料の種類や量についての改善が望まれている。

(3) 学生生活全般に関する意見

本学における学生生活全般について、4項目から構成されるアンケート調査を行った。その結果を、以下に示す(表3, 図7)。なお、自由記述について記入する項目を設けたが、大学院生からの回答は得られなかった。

表3 学生生活全般に関する意見 (大学院生)

質問項目	平均値	標準偏差	データ数
12) 研究や進路など、学生生活について相談できる環境がある。	4.12	0.86	17
13) 学内の講義やゼミ以外に、研究会や勉強会に参加したい。	4.12	0.78	17
14) 履修科目を決定する際、シラバスが参考になった。	3.88	1.17	17
15) 現在の大学における学習・研究活動に満足している。	4.06	0.56	17

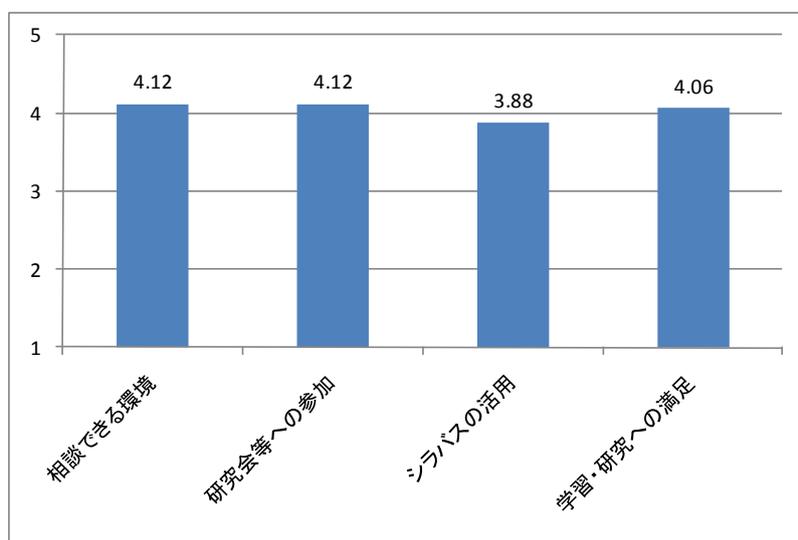


図7 学生生活全般に関する意見 (大学院生)

学生生活全般に関する観点から調査を行った結果、全般的に高い評価が得られた。1項目(シラバスの活用)を除き評価値が4を上回っており、本学の大学院生は学生生活全般について満足していることが示された。なお、問13の「学内の講義やゼミ以外に、研究会や勉強会に参加したい ($Mean=4.12$)」については、大学院生が学術的な交流活動に対して積極的に取り組んでいる可能性を示すとともに、学内における交流活動が不足している可能性も示している。本調査においては、これらの要因を切り分けることは困難であるが、大学院生に対する積極的な学外交流を促すことが望ましいといえる。

本調査の結果、大学院生の満足度は非常に高いことが伺える。しかし、その一方でアンケート調査の回収率が低い問題が挙げられる。すなわち、本学の大学院教育に対して十分に満足している学生、または、教育の改善を望んでいる学生のみが、アンケートに回収している可能性が考えられる。この点について、学生からの回収率をさらに向上させる必要があるだろう。

【3. 教員を対象としたアンケート結果】

教員対象アンケートとして、以下の3つの観点を設定した。以下に、それぞれの調査結果と考察について述べる。また、前年度（H21）に大学院における研究指導を担当した教員に対して、自由記述によるアンケート回答を求めた。その結果を④ [研究指導に関する単位数の変更に関する意見] にまとめる。

- (1) 研究指導や論文指導に関する意見
- (2) 資料や設備に関する意見
- (3) 本学大学院で行うべきFD活動
- (4) 研究指導に関する単位数の変更に関する意見

(1) 研究指導や論文指導に関する意見

本観点について、4項目のアンケートと自由記述による調査を実施した。結果を、以下に示す（表4、図8）。

表4 研究指導や論文指導に関する意見（教員）

質問項目	平均値	標準偏差	データ数
1) 成績評価に関して、共通した基準の必要性を感じる。	2.46	1.20	13
2) 講義において、さらに多くの補助（TAなど）が必要である。	2.54	1.05	13
3) 指導に際して、eラーニングシステムを有効に利用している。	2.15	1.57	13
4) 院生に対して、より幅広い交流活動を期待している。	3.42	1.31	12

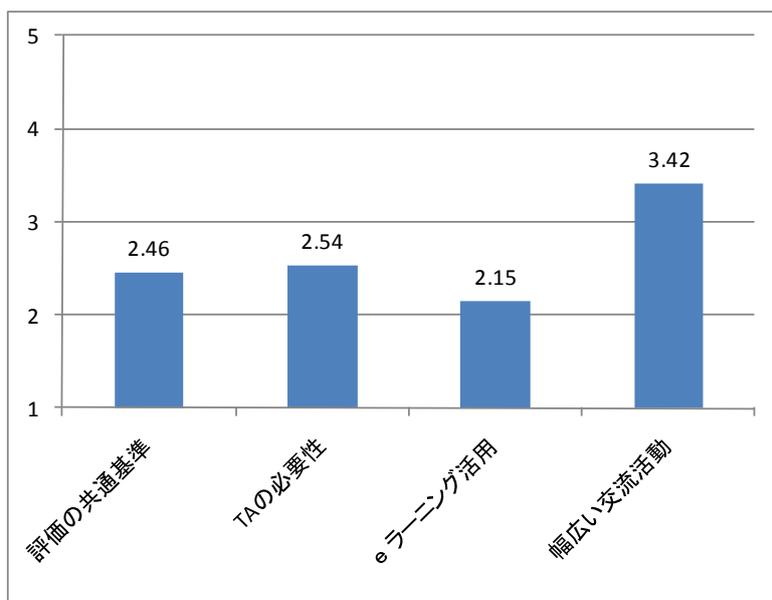


図8 研究指導や論文指導に関する意見（教員）

(自由記述：研究指導や論文指導に関する意見)

- 研究指導を半期ごとに成績評価するのは難しいと感じます。

研究指導や論文指導に関して、概ね低い評価が得られた。一項目のみ、評定値が3を超えているものがあるが、これはあくまで「学生に対する期待」であり、現状を評価したものとは言えない。ここで、「評価の共通基準」、「TAの必要性」、「eラーニングの活用」に関する評定値が低い理由として、大学院における研究指導や論文指導が、個別の学生に特化していることが挙げられる。そのため、共通した評価基準の必要性は低く、対面での細かい指導を行うためにTAは必要なく、同様にeラーニングに対する注目も低いことが伺える。学部の講義と異なり、大学院教育では個別の学生に合わせた指導が実施されていることが示された。

また、自由記述の結果より、研究指導を行う時期に関する意見も見られている。より長期的な観点に基づいた指導と評価の必要性が提案されている。

(2) 資料や設備に関する意見

本学の大学院指導における資料や設備について、教員にアンケート調査を行った。その結果を、以下に示す(表5、図9)。

表5 資料や設備に関する意見(教員)

質問項目	平均値	標準偏差	データ数
5) 学内において、研究指導に必要な資料が整備されている。	2.31	0.85	13
6) 図書資料や論文の収集に関する学生の知識は十分である。	2.46	0.88	13
7) 学生の研究活動に必要な環境が整備されている。	2.54	0.78	13

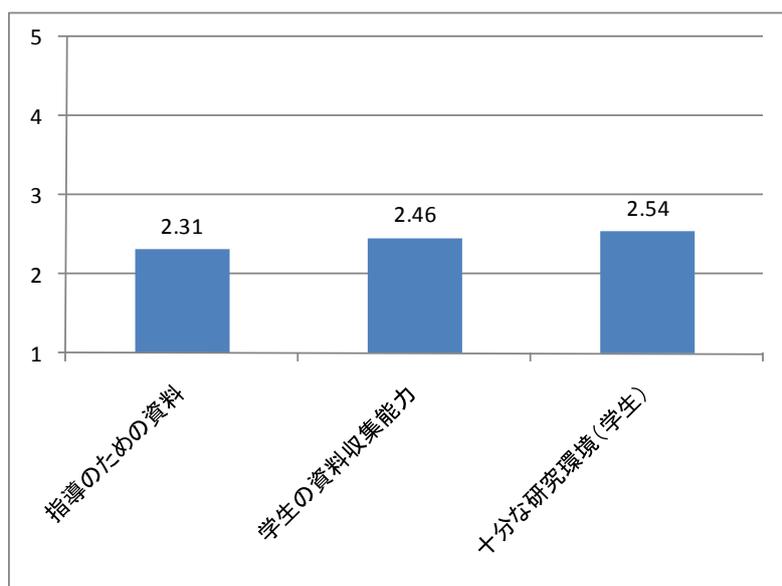


図9 資料や設備に関する意見(教員)

(自由記述：資料や設備に関する意見)

- 分野にもよりますが、雑誌は国内外とも不足していると思います。他大学からの貸し出しやコピー取り寄せに関して、学生に対する補助があってもよいかと考えます。
- 最新の図書が不足している。

本学の大学院教育における資料や設備について、全般的に低い評価が得られた。この結果は、①教員の研究指導用の資料が不足していること、②教員は学生の資料検索能力が低いと思っていること、③教員から見たとき学生の研究環境は整っていないこと、これらを示すものである。

大学院教育における資料や設備の充実に関しては、昨年度も同様の調査を行っている。その考察において、実際に資料が不足している可能性と、学生の資料検索能力が低いために資料が見つからない可能性、これらが指摘されている。今年度の結果も、ほぼ同様であるといえるだろう。今後、文献や論文資料のさらなる拡充が必要であり、同時に、大学院生に対する情報検索能力の育成（情報リテラシー育成）が求められるのではないだろうか。

なお、これは教員と学生に共通しているが、他大学から資料を取り寄せる際には、送料や複写料が必要となる。教員の場合、研究費などから資料を請求することが可能であるが、学生の場合は私費での資料請求となる。この点について、各教員によって学生に支援を行う場合と、そうでない場合とに分かれているのではないだろうか。大学院生に対して、より研究資料を請求しやすくなる工夫が求められているものと考えられる。

(3) 本学大学院で行うべき FD 活動

大学院における指導の向上のため、組織的な取組みの必要性について調査を行った。その結果、平均値 3.25 ($SD=0.97$, $N=12$) の結果が得られた (図 10)。

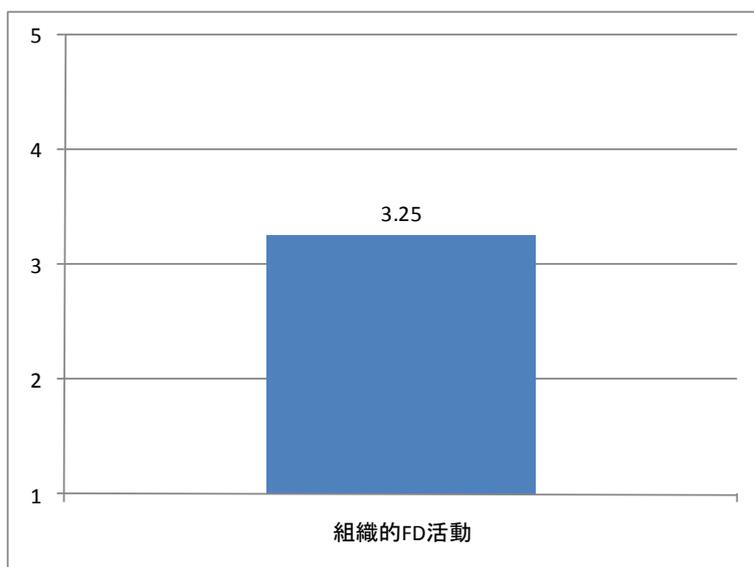


図 10 組織的 FD 活動の必要性 (教員)

調査の結果より、組織的 FD の必要性として 3.25 の評定値が得られた。この結果は、大学院教育における組織的 FD 活動の重要性について、ある程度の認識は得られているものの、十分に浸透していないものを示すものといえる。この理由として、大学院では受動的な座学学習

と比較して、積極的な学習活動が求められるゼミでの指導が重視されていることが挙げられる。ゼミでの指導では、個別の大学院生に対する指導が行われ、他の教員との連携機会は減少する。そのため、大学院における組織的なFD活動に対するイメージが喚起されにくかった可能性がある。

大学院における組織的FD活動として、目新しい活動や特殊な活動が求められているわけではない。学部FD活動と同様に、個別の指導事例の報告（日常的な指導方法や留学生に対する指導のあり方など）し、相互に意見交換を行うことにも大きな意味があるものと考えられる。自由記述にも見られるように、大学院における指導は、個別の学生に合わせた指導が必要であるため、手探りとなってしまうことが多い。ここで、相互に意見交換や事例報告を行うことによって、大学院における組織的FD活動の効果や意義が実感されるのではないだろうか。なお、その際にはeラーニングシステムを積極的に用いることも、組織的FD活動の効果向上に貢献することが予想される。

（自由記述：本学大学院で行うべきFD活動）

- 大学院では「研究」という側面が強くなるため、正直なところどのような授業が望ましいのかわかりません。
- eラーニングシステム利用の促進を。

（4）研究指導に関する単位数の変更に関する意見

平成19年度に、大学院における研究指導の単位数の変更が行われた。これは、大学院生の研究の進捗状況を考慮し、継続的な研究活動を促進するための履修規則の変更と位置づけられる。設問は下記の通りであり、回答は全て自由記述であった。各質問に対する回答を、それぞれ以下に示す。

【設問】本学では、平成19年度から、研究指導に関する単位数を以下のように変更しました。これは、段階的で進捗状況に合わせた研究指導の実現を意図したものです。

変更前：研究指導に関する演習（10単位）

現在：アカデミックトレーニング（研究方法論など4単位）、研究指導Ⅰ～Ⅲ（各2単位）

ここでは、上記の変更に伴う研究指導上の効果や問題についてお聞きします。

[a. 段階的で進捗状況に合わせた研究指導]

（教育効果）

- 実質的には、論文完成まで一連の論文指導になるため、単位を分割することによる教育効果はあまりないと思います。
- 節目があり、学生にとっては良いプレッシャーになっている。
- 学期毎に、論文の進捗状況を把握できるので、研究指導がしやすい。

（問題点）

- 論文は必ずしも段階的に進歩するわけではないと考えます。単位を分割すると、いったりきたりのプロセスを評価できなくなるのではないのでしょうか。

- アカデミックトレーニングと研究指導が実際には同じものとなっている。分ける必要性があるか疑問である。

[b. 正・副指導教員による研究指導体制の連携]

(教育効果)

- 連携がうまくいってれば、多彩な見解に触れることによる教育効果はあると思います。
- 複数の意見を聞くことは院生にとってもプラスである
- 正・副相補合いながら指導できるので、教育効果は高い。
- 経済学のいろいろな知見を得ることができるので良い。

(問題点)

- 正・副指導教員の連携をどのようにして図るか、が問題になるかと考えます。

[c. 1年次後期科目「研究指導Ⅰ」の単位取得が出来ない場合、2年次に進級できない点について]

- 単位を分割することにやはり問題があると思います。
- 研究指導Ⅰの単位が取得できる可能性は低いと思われるので、大きな問題とはならないといえる。
- 学生にとってはよいプレッシャーになり、効果的に機能していると思う。
- 特に問題とは思いません。ただし、そのことおよびその趣旨の徹底が必要だと思います。
- やむをえない。

[d. 履修細則改正後の研究指導方針の変化について]

(教育効果)

- 計画的に論文指導を行うようになった。
- 従来より、修士論文の仕上がりが早い。

(問題点)

- →意見なし

[e. 履修細則に関するその他の意見]

- 2単位が基本となったため、日本語を理解できない留学生にとって、不利な状況となった。一部科目の4単位化も検討する必要がある。

【4. 総合考察】

4. 1 大学院生を対象としたアンケート結果

大学院生を対象としたアンケートでは、「学習や研究活動に関する意見」、「資料や設備に関する意見」、「学生生活全般に関する意見」これらの調査を実施した。その結果を、以下に簡単にまとめる。

まず「学習や研究活動に関する意見」では、全般的に高い評価が得られていた。特に、「十分な研究指導 ($Mean=4.41$)」「科目選択の幅広さ ($Mean=3.71$)」「興味深い科目の開講 ($Mean=3.82$)」、これらの項目の評価が高く、ゼミ指導や科目履修については、現在の評価を維持させることが望ましいといえる。次に、「資料や設備に関する意見」に関する調査結果は、全般的に低い評価であった。なかでも、「図書資料の整備 ($Mean=2.94$)」「論文資料の整備 ($Mean=2.88$)」の評価が低く、図書資料や論文資料、電子ジャーナルなどの整備を進めるとともに、学生（特に大学院生）を対象とした文献検索方法についての講習会や、指導教員による指導が必要ではないだろうか。なお、研究資料以外の設備面（共同研究室やPCなど）については、特に目立った問題は指摘されなかった。最後に、「学生生活全般に関する意見」に関する調査結果は、全般的に高い評価が得られた。この観点において、最も重視すべき質問項目として「学習・研究への満足」が挙げられる。この評定値が 4.06 であったことから、本学の大学院生は、概ね教育・研究活動に対して満足していることが伺える。その他の結果からも、研究や進路などの相談窓口、また、シラバスの理解など、学生の満足度が高いことが示された。

これらの結果より、本学の大学院生に対する支援として、研究資料（書籍や論文、電子ジャーナルなど）の整備が望ましいこと、また、教員による学生指導と環境整備を維持すること、これらが示された。特に、研究資料の整備に関しては、昨年度（H21）のアンケート調査においても、今後の重要課題として設定されている。実際に、今年度（H22）では、大学院教育開発部門による図書館データベースの拡充が実施され、検索可能な論文資料等が増加している。また、附属図書館主催の取組みとして、電子ジャーナルの効率的な利用方法に関して、学外から講師を招き全学を対象とした講習会が開かれている（平成 22 年 7 月 15 日：EBSCOhost 講習会）。このように、実質的な研究資料の拡充や、大学院生も参加することが可能な講習会の開催など、今後とも組織間で連携した取組みを行うことが望ましい。

本調査の問題点として、アンケートの回収率が挙げられる。大学院生のアンケート回収率は 45.9%であり、教員の回収率は 28.9%であった。これは、大学院生においては二人に一人、教員に至っては、三人に一人も回答していなかったことを示す。アンケートの精度を高め、教育効果の向上を促すには、大学院生と教員との意見交換が必要である。今後、アンケートの回収率を高めるとともに、日常的に大学院生と教員とが意見を交換できる場を設けることが望ましいと考えられる。

また、今回の調査においても、大学院生の就職活動については、ほとんど扱われていなかった。大学院生に対する就職支援やキャリア教育が十分に行われているかどうかについても、今後、調査を実施する必要があるものと思われる。

4. 2 教員を対象としたアンケート結果

教員を対象としたアンケートでは、以下の 4 つの観点からの調査を行った。「研究指導や論文指導」、「資料や設備」「本学大学院で行うべき FD」「研究指導に関する単位数の変更」。これ

らについて、調査結果を簡単にまとめると、次の通りである。

第一に、「研究指導や論文指導」では、教員は大学院生に学外での学術的な交流を期待しており、評価基準の明確化や固定化は望んでいないことが示された。これは、大学院教育においては、主にゼミ形式でのディスカッションで研究が進行し、決められた枠組みでの評価が困難であるためと考えられる。

第二に、「資料や設備」では、教員による評価は全般的に低いことが示された。これは、「研究指導に必要な資料」「資料収集に関する学生の知識」「学生の研究活動に必要な環境」からなる観点であり、いずれも評定値は3を下回っていた。この点について、指導教員は大学院生の学習環境について決して満足できるものではなく、改善が必要であると考えていることを示したものである。

第三に、「本学大学院で行うべきFD」では、ある程度の組織的FDの必要性が認識されていることが示された。大学院における教育活動は、多くの場合、ゼミ形式（ディスカッション形式）で行われる。そのため、すでに大学院生の一人一人に対する指導体制が確立しており、組織的なFDの必要性に対する認識が低かったことが予想される。しかし、他の教員はどのような大学院での指導を行っているのか、また、このような場合にはどのように対処しているのかなど、情報交換を通して有益な知見が得られることも期待される。

第四に、「研究指導に関する単位数の変更」では、大学院教育における単位履修制度に対する理解が進んでいることが示された。H19に変更された教育課程の変更では、大学院生の段階的で継続的な研究を促進することが意図されている。この変化に伴う教育活動の変化について、教育効果の向上と問題点の両観点から意見を集めた結果、ある程度順調に現行カリキュラムが機能していることが伺えた。ただし、いくつかの問題点も見られた。

これらの結果より、教員の大学院教育に対する姿勢として、個別の大学院生に合わせた研究指導を重視していることが伺える。大学院では、主に研究活動と発表活動が重視されることから、個人個人の研究テーマの設定と進行に関する指導が求められる。この指導は、研究内容ごとに異なっているため、共通した評価基準を設けることは困難である。このような理由から、教員の組織的FDに関する重要性の認識が低いことが考えられる。特に注目すべき点として、指導に必要な資料が不足しているとの評価が多かったことが挙げられる。H22においては、附属図書館と連携して資料を増やし、電子ジャーナル講習会が開催されているが、それでも資料に関する評価は、昨年度さほど変わっていなかった。この点について、今後とも指導に必要とされる資料の調査と拡充が必要であろう。また、大学院教育における単位履修制度については、継続的な研究活動を継続させる必要性について、ある程度の理解がなされていることが読み取れる。

【5. 結論】

平成 22 年度の大学院 FD アンケートの調査結果より、本学の大学院教育に関して、以下の 4 点が示された。

1. 平成 22 年度の大学院 FD アンケートにおける学生の回収率は 45.9%であり、教員の回収率は 28.9%であった。これは決して十分な値ではなく、今後のアンケート回収率の向上が期待される。
2. 大学院生の多くは、研究指導や科目選択に関して高い評価を行っている一方で、研究資料の収集についての改善を望んでいることが示された。特に附属図書館と連携を強化し、図書・論文資料の拡充や、電子ジャーナル講習会などの取組みを実施することが望ましい。
3. 大学院教育を担当している教員においては、個別の学生に合わせた指導を行っていることが示された。それに関して、共通した評価基準の必要性は低い一方で、教員同士の意見交流などを行うことが、組織的 FD の実践として効果的であると考えられる。
4. H19 のカリキュラム変更に関して、多くの教員の理解と協力が得られていること、また、多様な教育効果が得られていることが示された。学生の継続的な研究を促すためにも、今後も同様のカリキュラムでの教育活動を展開することが望ましい。

編 集：小樽商科大学教育開発センター

連絡先： 〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号

○ 小樽商科大学教育開発センター
電 話 0134-27-5297

○ 小樽商科大学学務課教育課程改善係
電 話 0134-27-5240
FAX 0134-27-5243
e-mail kaizen@office.otaru-uc.ac.jp

ホームページ： <http://www.otaru-uc.ac.jp/hkyomu1/fdhome/index.htm>